

鳥栖市文化財調査報告書第71集

西
浦
遺
跡

西 浦 遺 跡

鳥栖市文化財調査報告書第71集

2004

鳥栖市教育委員会

二〇〇四

鳥栖市教育委員会



朝鮮製粉青沙器四耳壺

序

本書は平成15年度に発掘調査を実施した西浦遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査の結果、弥生時代から近世まで幅広い時期の遺構が確認され、貴重な資料が多く出土しました。

中世の溝は当時の屋敷地を示す区画溝と考えられます。中でも溝から出土した朝鮮製の粉青沙器四耳壺は、市内で過去に出土例が無いもので大変珍しく貴重な遺物です。その他に中国製陶磁器や肥前染付けなどの国産陶磁器も多く出土しました。

本報告書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術分野で役立つことができれば幸いに存じます。

平成16年 3月

鳥栖市教育委員会

教育長 中尾 勇二

例 言

1. 本書は平成14年度に発掘調査を実施した鳥栖市大正町所在の西浦遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社ソロンコーポレーションの委託を受けて、鳥栖市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査作業にあたっては株式会社ソロンコーポレーションの協力を得た。
4. 本書の執筆、編集は湯浅満暢が担当した。
5. 整理作業及び報告書作成作業は鳥栖市藤木町文化財整理室で行なった。
6. 測定値の表示に用いた単位は遺構が m、遺物が cm である。
7. 遺跡の略号は TNU で佐賀県教育委員会の台帳に登録した。
8. 遺構の略号は SD：溝 SH：住居跡 SP：土壇墓 SK：土坑 SX：不明遺構である。
また、遺構番号は略号を頭に付け2桁の一連番号とした。小穴は遺物の出土したものについて2桁の一連番号を付けPの略号を用いて標記した。
9. 西浦遺跡の発掘調査、報告書作成に際し、下記の方々から指導・ご助言をいただいた。
大橋康二（九州陶磁文化館）
小野正敏（国立歴史民俗博物館）
片山まび（大阪市立東洋陶磁美術館）
徳永貞紹（佐賀県文化課）

本文目次

第1章 調査の概要	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	5
第3章 調査の内容	8
1. 遺跡の概要	8
2. 調査の経過	9
3. 調査の概要	10
4. 遺構と遺物	15
5. まとめ	53

挿図目次

図1 鳥栖市位置図	3
図2 周辺地形図 (1/125,000)	4
図3 周辺遺跡分布図 (1/30,000)	6
図4 調査地点位置図 (1/4,000)	9
図5 西浦遺跡遺構配置図 (1/200)	13
図6 SD02出土遺物 (1/3)	16
図7 SD02出土陶磁器類 (1/3)	16
図8 SD07出土遺物 (1/3)	17
図9 SD09・SD10出土遺物 (1/3)	17
図10 SD12土層断面図 (1/40)	19
図11 SD12出土遺物 (1/3)	19
図12 SD13・SD14・SD20・SD22土層断面図 (1/20)	20
図13 SD13出土遺物 (1/3)	21
図14 SD13出土陶磁器類 (1/3)	22
図15 SD14出土遺物 (1/3)	22
図16 SD17出土遺物 (1/3)	24
図17 SD19出土遺物 (1/3)	26
図18 SD20出土遺物 (1/3)	27

図19	調査区南張出部 (1/100)	29
図20	SK04 (1/40)	30
図21	SK08 (1/40)・出土遺物 (1/3)	31
図22	SK11 (1/40)	32
図23	SP26 (1/20)	33
図24	SP26出土遺物 (1/3)	33
図25	SK27 (1/20)	34
図26	SK28 (1/20)	35
図27	SK29 (1/10)	36
図28	SK29出土遺物 (1/3)	37
図29	調査区東端部 (1/100)	39
図30	SH18 (1/40)	41
図31	SH23 (1/40)	42
図32	SH23出土遺物 (1/3)	43
図33	SH24 (1/40)	44
図34	SH24出土遺物(1) (1/3)	45
図35	SH24出土遺物(2) (1/3)	46
図36	SH30 (1/40)	47
図37	SX01・SD02 (1/40)	48
図38	SX03 (1/80)	49
図39	SX03出土遺物 (1/3)	49
図40	SX21 (1/40)	50
図41	SX21出土遺物(1) (1/3)	51
図42	SX21出土遺物(2) (1/3)	51
図43	SX31 (1/40)	52
図44	溝遺構配置図 (1/300)	54
図45	中世溝位置図 (1/2,000)	55

表 目 次

表 1	周辺遺跡一覧表	7
表 2	出土遺物一覧表	58
表 3	瓦一覧表	61
表 4	陶磁器一覧表	61
表 5	中国製磁器一覧表	

写真図版目次

写真図版 1 (空撮)

1. 鳥栖駅方向 (南東方向)
2. 南方向

写真図版 2

1. 全景①
2. 全景②

写真図版 3

1. 全景③ (南張出し部)
2. 全景④西から

写真図版 4

1. 調査区東端部
2. SH23 (右)・24 (左)

写真図版 5

1. SX01北西から
2. SK04北から
3. SK08西から
4. SK11東から
5. SD10東から
6. 作業風景
7. SD12西から
8. SD12土層西から

写真図版 6

1. SD13西から
2. SD13②③西から
3. SD13②南から
4. SD13②③南から
5. SD14東から
6. SD14出土状況
7. SD15北から

写真図版 7

1. SD17 (左)・SD16 (右) 南から
2. SD17・SH18北から
3. SH18東から
4. SD20東から (SD19交差部分)
5. SD22土層
6. SD20土層東から
7. SD19南から
8. SD19北から

写真図版 8

1. SD25南から
2. SX21西から
3. SH23南から
4. SX21ベルト除去後南から
5. SH24南から
6. SH24ベルト除去後南から
7. SK29出土状況①
8. SK29出土状況②

写真図版 9

1. 粉青沙器四耳壺①
2. 粉青沙器四耳壺②
3. 粉青沙器四耳壺③
4. 粉青沙器四耳壺④
5. 粉青沙器四耳壺⑤
6. 粉青沙器四耳壺⑥
7. 粉青沙器四耳壺⑦ (底部)
8. 粉青沙器四耳壺⑧ (内面)

写真図版10

1. SD02出土染付類①
2. SD02出土染付類②
3. SD02出土陶器類①
4. SD02出土陶器類②
5. SD02出土肥前染付皿①
6. SD02出土肥前染付皿②
7. SD02出土肥前染付碗①
8. SD02出土肥前染付碗②
9. SD02出土肥前染付碗
10. SD02出土仏飯器
11. SD02出土波佐見系染付皿
12. SD02出土肥前陶器刷毛目鉢

写真図版11

- | | | |
|------------------|----------------|---------------|
| 1. SD02出土肥前青磁染付皿 | 2. SD02出土肥前青磁瓶 | 3. SD02出土油壺 |
| 4. SD02出土遺物 | 5. SX03出土遺物 | 6. SD07出土遺物 |
| 7. SD09出土遺物 | 8. SD10出土遺物 | 9. SD13出土遺物① |
| 10. SD13出土遺物② | 11. SD13出土鋤先① | 12. SD13出土鋤先② |

写真図版12

- | | | |
|---------------|---------------|--------------|
| 1. SD17出土遺物① | 2. SD17出土遺物② | 3. SD19出土遺物① |
| 4. SD19出土遺物② | 5. SD19出土遺物③ | 6. SD20出土遺物 |
| 7. SX21出土遺物① | 8. SX21出土遺物② | 9. SX21出土遺物③ |
| 10. SX21出土遺物④ | 11. SX21出土遺物⑤ | |

写真図版13

- | | | |
|---------------|---------------|---------------|
| 1. SX21出土遺物⑥ | 2. SX21出土遺物⑦ | 3. SH23出土遺物① |
| 4. SH23出土遺物② | 5. SH23出土遺物③ | 6. SH24出土遺物① |
| 7. SH24出土遺物② | 8. SH24出土遺物③ | 9. SH24出土遺物④ |
| 10. SH24出土遺物⑤ | 11. SH24出土遺物⑥ | 12. SH24出土遺物⑦ |
| 13. SH24出土遺物⑧ | 14. SP26出土遺物① | 15. SP26出土遺物② |
| 16. SP26出土遺物③ | 17. SP26出土遺物④ | |

写真図版14

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| 1. SP26出土遺物⑤ | 2. SP26出土遺物⑥ | 3. SP26出土遺物⑦ |
| 4. SP26出土遺物⑧ | 5. SP26出土遺物⑨ | 6. SP26出土遺物⑩ |
| 7. 瓦類 | 8. 中国製磁器類 | |

報告書抄録

ふりがな	にしうらいせき							
書名	西浦遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鳥栖市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第71集							
編著者名	湯浅満暢							
編集機関	鳥栖市教育委員会							
所在地	〒841-8511 佐賀県鳥栖市宿町1118番地 TEL 0942 (85) 3695							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしうらいせき 西浦遺跡	さがけん 佐賀県 とすし 鳥栖市 たいしょうまち 大正町	410213	—	33° 22′ 22″	130° 31′ 00″	030116 ～ 030323	2,000m ²	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
西浦遺跡	散布地	弥生 古墳 中世 近世	竪穴式住居 土壙墓 土坑 溝	弥生土器、須恵器 土師器、鉄器 粉青沙器四耳壺 中国製磁器 国産陶磁器				

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経過

鳥栖市大正町字東浦畑755-1においてマンション建設の計画が起こった。当該地は西浦遺跡として埋蔵文化財包蔵地として周知化されており、東側には小原遺跡が隣接し、さらに東には京町遺跡が位置する。それら二つの遺跡に関しては、小原遺跡は1979年（昭和54年）に鳥栖中央ビル（スーパー寿屋）の建設の際に、京町遺跡が大規模商業施設の建設に伴い1995年（平成7年）に本調査を実施している。京町遺跡の調査地点は今回の調査対象地から東へ300mほどで、小原遺跡の調査地点は南へ約100m離れた地点である。

平成14年11月5日付けで株式会社ソロンより、鳥栖市教育委員会に対象地について埋蔵文化財の有無について照会がなされ、埋蔵文化財発掘届と確認調査の依頼が提出された。遺跡の状況、内容、範囲を正確に把握するために平成14年11月12日～14日の3日間で確認調査を実施した。

この確認調査の結果、対象地2,152m²のほぼ全域に遺構が存在することが判明した。確認された遺構の内容及び時期は弥生時代の土坑、古墳時代の住居跡、中世の溝等であった。この結果をうけ事業主体者である株式会社ソロンと協議を行なった。協議はマンション本体を除く立体駐車場部分の設計変更による調査面積の縮小と本調査実施の時期についてであった。協議の結果、設計変更は不可能であり対象地全域について本調査を実施することとなった。株式会社ソロンからはマンション建設工事の着手が平成14年12月の予定であったため、本調査を早急に開始して欲しい旨要望があった。しかしながら本調査の期間は最長で約2.5カ月が予想されたこと、また予算措置についても検討が必要であったため工事スケジュール変更の要望を株式会社ソロンに伝え、再度協議を行なうこととした。

再度協議の結果、株式会社ソロンからマンション建設工事の開始を変更し、平成15年4月にすると回答があった。それに伴い本調査の実施を平成15年1月～3月とすることに決定した。予算については市内緊急発掘調査受託費で対応することとした。

本調査対象地は商店街及び住宅街に隣接するため、安全対策として調査区外周にフェンスを設置することが好ましいと思われた。これについては株式会社ソロンのご好意により無償で設置していただいた。

平成15年1月6日付けで株式会社ソロンと「西浦遺跡埋蔵文化財調査委託契約書」ならびに「西浦遺跡の埋蔵文化財に関する協定書」を締結した。また、整理作業及び調査報告書作成作業については平成15年度に実施することで合意した。

現場における発掘作業は平成15年1月6日に着手し、3月24日で全ての発掘作業を終了した。

平成15年4月14日付けで新たに「西浦遺跡埋蔵文化財整理作業委託契約書」を締結し整理作業と報告書作成作業に着手した。作業は藤木町文化財整理室で平成15年4月14日から平成16年3月15日までの期間で行なった。

2. 調査組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査主体 鳥栖市教育委員会

総括 中尾勇二（教育長）

水田孝則（教育部長：平成14年度）

近藤繁美（教育部長：平成15年度）

西川和彦（生涯学習課長）

高尾泰明（生涯学習課参事）

藤瀬禎博（生涯学習課長補佐兼市史編纂係長）

石橋新次（文化財係長）

調査 湯浅満暢（文化財係主査 調査・報告書担当）

鹿田昌弘（文化財係主査）

久山高史（文化財係主査） 内野武史 島孝寿

調査協力 株式会社ソロンコーポレーション

表土除去作業：龍工業

発掘作業：久保山隆弘、龍頭啓一、杉岡俊昭、岩橋良年、仁田利宣、陣内義美、陣内三十三、松隈敏子、吉戸菊子、久保光子、栗山満恵、大野勝子、岡本光子、中島トミ子、横尾朝子、山下重信、徳渕直広、高田莫

遺構実測：(株)埋蔵文化財サポートシステム

空中写真撮影：(有)空中写真企画

遺構・遺物写真撮影：湯浅満暢

遺物整理：権藤由美子、毛利よし子、野口勝恵、中島ヤヨイ、横尾順子、谷川久美子

遺物実測：毛利美代子、山本美代子、中島貞子

製 図：権藤由美子、毛利よし子、谷川久美子

第2章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

西浦遺跡が所在する鳥栖市は佐賀県の東部に位置し、筑後川流域に展開する筑紫平野の一角を占める。北は筑紫山地によって限られ福岡県那珂川町と、南は筑後川をもって福岡県久留米市との境をなし、東北の三養基郡基山町、西の三養基郡中原町、北茂安町とは九千部山より派生する丘陵で接する。市域は東西に8.2km、南北に9.0km、面積は71.73km²で、人口は62,441人（平成16年3月1日現在）である。

地勢は、脊振山系の九千部山（847.5m）を主峰として三つの支嶺が派生し、それぞれから南東あるいは南に延びる丘陵を経て平坦部となり筑後川にいたる。地形を東から詳述すると、権現山から杓子ヶ峰に連なる第一の支嶺は南東の柚比・今町の高位段丘に通じ曾根崎の低位段丘におよぶ。第二の支嶺は、九千部山の南側から起こり城山・群石山に終わる。最も西に位置する第三の支嶺は、九千部山の西南側から石谷山・雲尾峠・笛吹山を経て、北茂安町千栗一帯まで連なる丘陵となる。それぞれの支嶺に源を発した河川は、山麓で扇状地を形成し平野部を南下して筑後川に注ぐ。主な河川として第一、第二の支嶺間を流れる大木川、第二の支嶺の南で四阿屋川と合流して南流する安良川、第三の支嶺の北側に石谷山を水源とする沼川が挙げられる。大木川は山麓に神辺扇状地を形成し、その左岸には杓子ヶ峰から延びる高～低位段丘、右岸には現市街地が載る標高15～25mの低位段丘がある。安良川は山麓で養父扇状地をつくる。安良川と沼川の間には標高15～80mの低～高位の洪積段丘があり、朝日山によって北の麓地区、南の旭地区に分けられる。河川はいずれも南流し筑後川へ注ぐが、下流域は標高10m以下の沖積低地の広大な平坦部となっており、穀倉地帯であるとともに古くは何度となく水害にみまわれる常襲地帯であった。

また、鳥栖市域は古代以降の律令制下において筑前・筑後・肥前三国の接する地域であり、大宰府・筑後国府・肥前国府を連絡するそれぞれの官道（城の山道・筑後路・肥前路）が通過し、近世になり長崎街道が整備されると、轟木・田代に宿場が置かれ栄えるとともに久留米道・彦山道が分岐する地点でもあった。明治以降鉄道や国道あるいは現代において高速道路が整備されると、ここが分岐点となり重要な交通の要衝となるとともに、流通の拠点ともなっている。

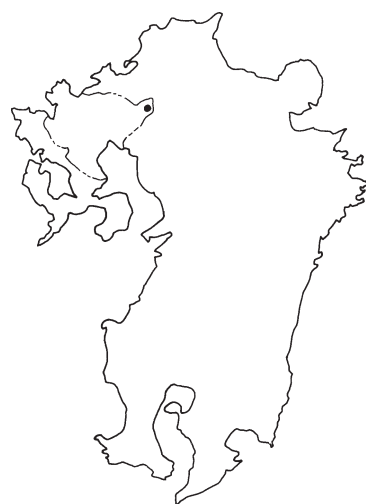


図1 鳥栖市位置図

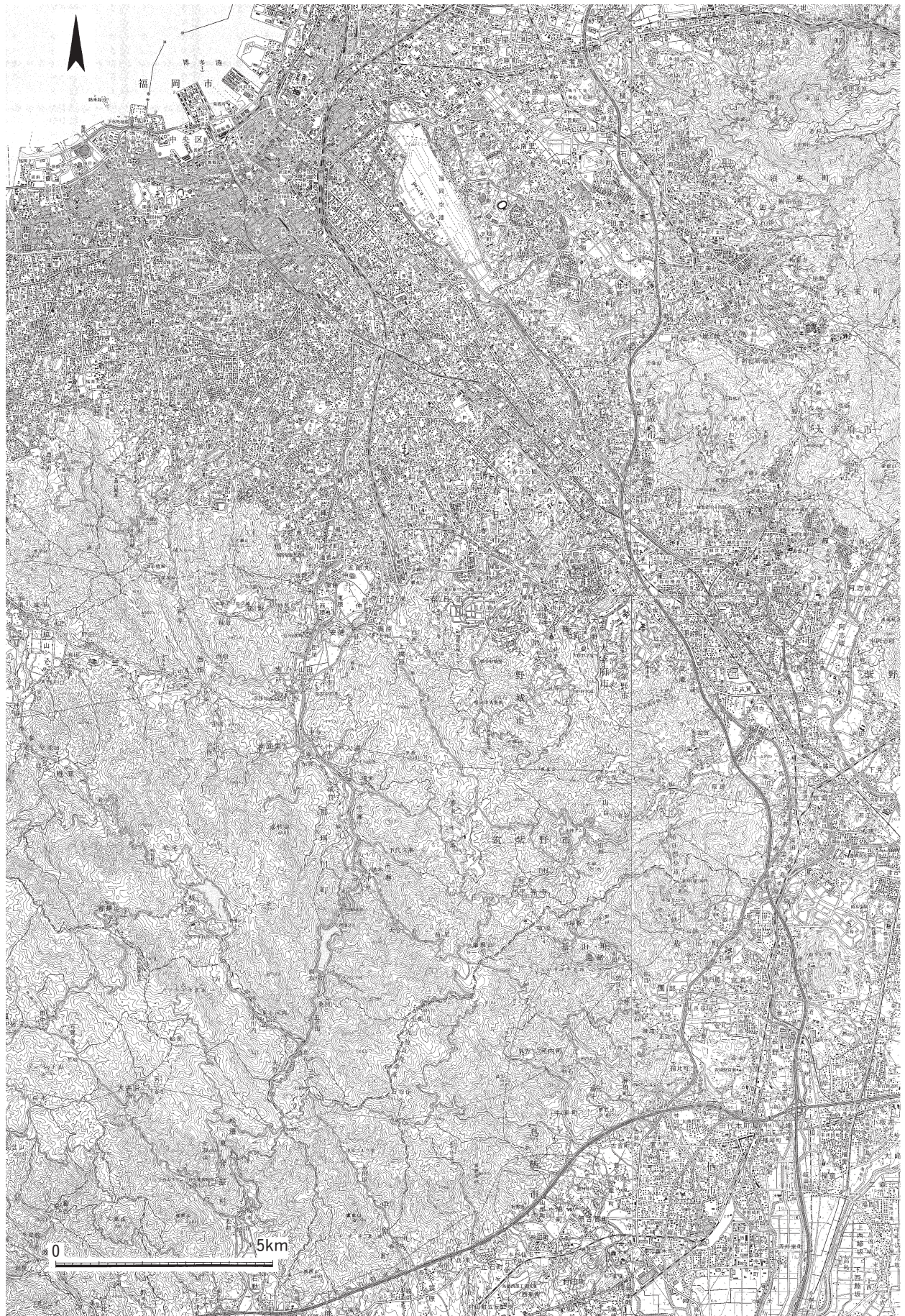


图2 周边地形图 (1/125,000)

2. 歴史的環境

鳥栖市内には数多くの遺跡が所在する。その分布は、脊振山系山麓一帯にベルト状に分布する古墳時代後期の群集墳を除けば、市北東部の「柚比遺跡群」と称される柚比町・今町周辺の丘陵群、市南西部の江島町周辺の丘陵群、および養父扇状地から現市街地の載る低位段丘一帯の3つのグループに分けられる。

旧石器時代では、長ノ原遺跡・本川原遺跡・平原遺跡・牛原原田遺跡・本行遺跡でナイフ形石器や細石器類が採集されているが、遺構は検出されておらず詳細は明らかでない。

縄文時代になると、早期では西田遺跡で多量の押型紋土器・無紋土器・条痕紋土器に伴い多くの集石遺構を検出している。前期では牛原前田遺跡から曾畑式土器が出土している。中期では平原遺跡で集石遺構とともに並木式土器が出土し、岸田南遺跡からは阿高式土器が出土している。後期では蔵上遺跡から土器棺墓・住居跡を検出した。晩期では本川原遺跡・平原遺跡・永吉遺跡・蔵上遺跡などを挙げるができる。

弥生時代では前期の様子は明らかではなく、遺跡数が急増するのは前期末以降のことである。北東部の柚比遺跡群では八ツ並金丸遺跡・今町共同山遺跡・今町岸田遺跡・長ノ原遺跡などで集落跡や墓地跡が確認されている。中期では、平原遺跡・安永田遺跡・前田遺跡などで集落が形成され、安永田遺跡では銅鐸・銅矛の鋳型とともに青銅器鋳造関連の遺物や遺構が確認されており、拠点的な集落であった。平原遺跡では丘陵上に環濠集落を検出している。また柚比本村遺跡・柚比梅坂遺跡・大久保遺跡・八ツ並金丸遺跡・安永田遺跡・フケ遺跡などに墓地が造営されている。特に、柚比本村遺跡では赤漆玉鈿装鞘銅剣を含む7本の銅剣を副葬する首長墓とともに、祖霊祭祀とみられる大型建物跡や祭祀土坑を検出している。一方、市南西部の調査例は少なく不明な点もあるが、江島町周辺に広がる丘陵上に立地する本行遺跡で大溝で丘陵を分けた中期中頃から後期中頃を中心とする集落跡が検出されている。また、青銅製品とともに銅剣・銅矛などの鋳型類が多数出土しており、このあたり一帯の拠点的な集落であったことが明らかとなり、安永田遺跡とともに同時期同規模の集落の存在が明らかとなった。

後期になると丘陵部には遺跡がほとんど見られなくなり、現在の市街地や低位段丘上に集落が形成される。本原遺跡・牛原原田遺跡・内精遺跡などが挙げられ、特に内精遺跡では大規模な集落跡が検出されている。また、京町遺跡・藤木遺跡などの市街地でも調査が行なわれ、環濠や集落の一部を確認している。

古墳時代前期になると赤坂前方後方墳や本川原遺跡・下原遺跡・今泉遺跡・日岸田遺跡で方形周溝墓がみられる。5世紀になると平原古墳・山浦古墳群・薄尾古墳群・田代東方古墳等をみる事ができるが、集落遺跡は現在まで確認されていない。しかし6世紀にはいり、遺跡は急増する。大木川左岸の中位段丘上に剣塚古墳・東田古墳・岡寺古墳・庚申堂塚古墳などの前方後円墳や田代太田古墳・ヒャーガンサン古墳などの彩色系装飾古墳が築造され、安良川流域には前方後円墳の牛原前田5号墳や稲塚古墳・塩塚古墳などの円墳が築造される。また、6世紀後半～7世紀代に脊振山系の山麓部を中心に多数の群集墳が築かれる。集落跡は、元古賀遺跡・蔵上遺跡・内精遺跡・梅坂炭化米遺跡などで確認されている。

飛鳥～平安時代には肥前国に属し、大木川を境として北東部を基肄郡、南西部を養父郡の範囲とした。『肥前風土記』によると、基肄郡は「郷陸（六）所、里十七」とあり、養父郡は「郷肆（四）所、里十二」

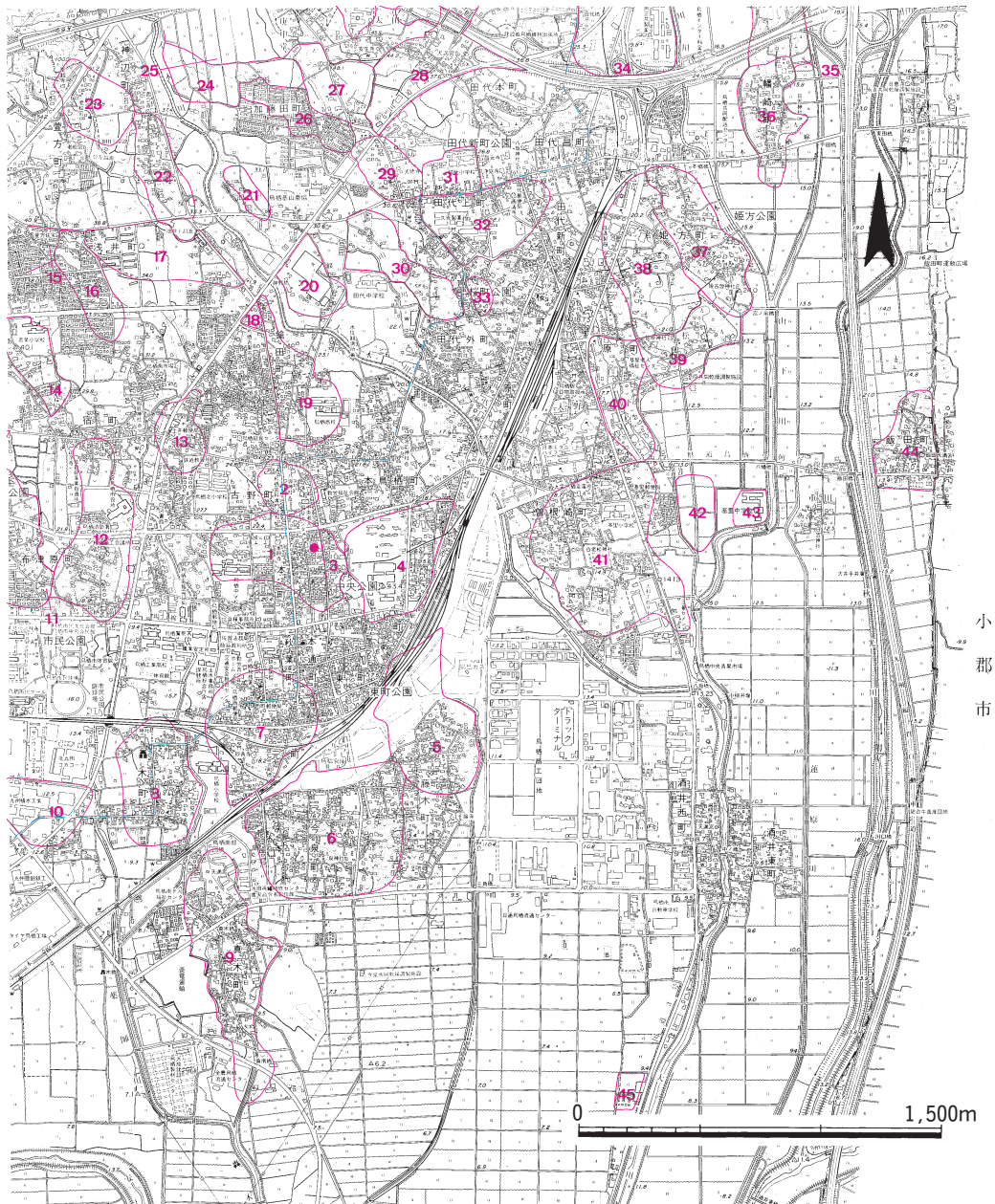


図3 周辺遺跡分布図 (1/30,000)

とある。基肄郡衙の位置は現在のところ不明であるが、八ツ並金丸遺跡で大型掘立柱建物跡が瓦とともに検出されており、その関連がうかがわれる。養父郡衙は、現在の蔵上町集落に所在したと考えられていたが、それを裏付けるように蔵上遺跡から掘立柱建物の倉庫群が検出されるとともに、「厨番」と記した墨書土器なども出土している。集落跡は、基肄郡域では八ツ並金丸遺跡・今町岸田遺跡・本川原遺跡・本原遺跡から、養父郡域では牛原前田遺跡・立石惣楽遺跡・柳の元遺跡・蔵上遺跡などで確認されている。

律令体制が衰退する平安時代後期以降、鳥栖地域においても荘園が形成されるようになり、13世紀末には荘園は基肄・養父両郡の約半数の耕地を占める。この大部分は大宰府天満宮安楽寺領で、あとは宇佐八幡宮弥勒寺領となっているが、実質的にこれらの荘園は、曾禰崎氏・土々呂木氏・藤木氏などの御家人地頭によって支配された。

表1 周辺遺跡一覧表

1 西浦遺跡	16 柳遺跡	31 田代代官所跡
2 町上遺跡	17 浅井遺跡	32 田代大官町遺跡
3 小原遺跡	18 鎗田遺跡	33 清水ヶ本遺跡
4 京町遺跡	19 天神木遺跡	34 本川原遺跡
5 藤木遺跡	20 藪原遺跡	35 立田石遺跡
6 今泉遺跡	21 中川原遺跡	36 幡崎遺跡
7 内畑遺跡	22 池田遺跡	37 姫方遺跡
8 町屋敷遺跡	23 国泰寺遺跡	38 本原遺跡
9 真木遺跡	24 唐木遺跡	39 大手木遺跡
10 轟木二本松遺跡	25 日岸田遺跡	40 下原遺跡
11 布津原遺跡	26 加藤田遺跡	41 四ツ木遺跡
12 門戸口遺跡	27 中島遺跡	42 恒石遺跡
13 原口遺跡	28 畑ヶ田遺跡	43 浦田遺跡
14 古賀遺跡	29 上天遺跡	44 飯田遺跡
15 元古賀遺跡	30 田代外町遺跡	45 樋ノ口遺跡

南北朝時代から戦国時代にかけての戦乱期には、支配者の頻繁な交替がみられるが、この時期、村田町や牛原町周辺には山城が築かれるようになる。明応6年（1497）に筑紫氏が鳥栖地域を押さえて以降、天正14年（1587）に島津氏に攻略されるまでの約90年間、勝尾城を本城に多くの支城群が構成され、山麓には武家屋敷や町屋など城下町も形成された。山浦新町遺跡ではこの時期の城下町の遺構が検出され、その具体像が解明されつつある。また、その前段階の集落跡が京町遺跡で確認され、当時の鳥栖市域における筑紫氏との関わりの中でみられる中世集落の変遷の一端をみることができる。

近世以降、基肄郡と養父郡の東半分は対馬藩領に、養父郡西半分は佐賀鍋島藩領となる。また長崎街道が整備されるとともに、両藩領域にはそれぞれ田代宿・轟木宿が設けられた。また、轟木宿には番所が置かれ、田代宿には対馬藩肥前田代領（1万6千余石）の統治機関として代官所が設置された。

明治時代の廃藩置県当初、鍋島藩領は佐賀県、対馬藩田代領は巖原県に分かれていたが、伊万里県、三潁県、長崎県を経て明治16年に佐賀県となった。昭和29年には、鳥栖町・田代町・基里村・麓村・旭村の2町3村が合併し鳥栖市が誕生した。

第3章 調査の内容

1. 遺跡の概要

西浦遺跡は九千部山系から南東に派生する標高10～20mの低位段丘上の東辺に立地し、鳥栖市大正町字東浦畑、本町字西浦、西浦畑一带に広がる。現在のところ、東西約500m、南北約120mの範囲が西浦遺跡として周知化されている。西浦遺跡は現市街地の中心部に広がり、道路を挟んで東側には小原遺跡が隣接する。また、北側には町上遺跡が存在する。本調査を実施した鳥栖市大正町周辺は、JR鳥栖駅前の本通り筋商店街から北へ分岐した商店街で、駅西側に広がる商業地帯の一角を占めている。

西浦遺跡の立地する低位段丘はJR鳥栖駅を越え南へと続く。段丘の先端部分には今泉遺跡や藤木遺跡が所在しており、地形は緩やかに下っていき藤木町西端と今泉町の南端で水田部と接している。今回の調査対象地東側では地形は5～10mほど低くなっており東へと次第に下っていく。段丘の東側には低い谷が入りこみ古くから溜め池となっており、現在は中央公園として整備され市民の憩いの場となっている。さらに公園東側の大型ショッピングセンターから東方にかけては京町遺跡が広がる。

今回の本調査を実施した大正町付近は古くからの商店街と住宅街が隣接する地区であり過去に大規模な開発はほとんど行なわれたことはなかった。本調査が実施されたのは、東側に隣接する小原遺跡で昭和54年(1979)に調査を行なったものと、東側のショッピングセンター建設に伴う京町遺跡の調査の2例がある。

京町遺跡にしても調査対象地となったところは古くは大正時代より片倉製糸工場が、引き続き戦後は旧専売公社鳥栖工場の工場が建てられており、平成7年度の調査で初めて遺跡の概要が明らかになった。その他に調査例は無く、一般開発はもちろん住宅の建て替えに伴う確認調査もほとんど行なわれていない。そのため遺跡の広がりや性格、遺構密度等がどの程度のものであるのかは未知数であった。

小原遺跡の調査及び今回の西浦遺跡の調査で弥生時代から中世までの集落が確認され、近世の遺物も多く出土した。遺跡の性格としては連続する同一の集落であろうと考える。

隣接する小原遺跡も含めて考えた場合、両遺跡で確認された集落の広がりについては自然地的に東側を限られるため、今回の調査地点が遺跡の東端付近に位置するであろう。集落の中心については西側に広がる事が予想されるが、現在のところ西限のラインについて推定は困難である。

京町遺跡からはショッピングセンター建設時の調査(平成7年度・1995)で弥生時代～中世にかけての遺構・遺物が確認されており、西浦遺跡で確認されたものと同時期であることから深い関連が想像できる。西浦遺跡が存在する鳥栖市本町、大正町は旧長崎街道の街道筋にあたり、当時本町辺りは瓜生野町と呼ばれ、商業流通の中心地となっていた。旧長崎街道は北側の町上遺跡と西浦遺跡のほぼ中心を南北に縦断している。瓜生野町は対馬藩田代宿と佐賀藩轟木宿の間に位置し、町並みの長さは七町(約750m)であった。そのうちが西浦遺跡にかかるのは300mほどである。この瓜生町は田代町に次ぐ町並みで長崎街道沿いに拓けた。町の中心は現在の本町から秋葉町一帯のにかけてであり、享保年間(1716～1736)頃までは「九齋市」が立てられ賑わっていた。売薬行商を行なう者も多く、「配置売薬」で知られる田代町以上に行商を行なう者が多い町であった。

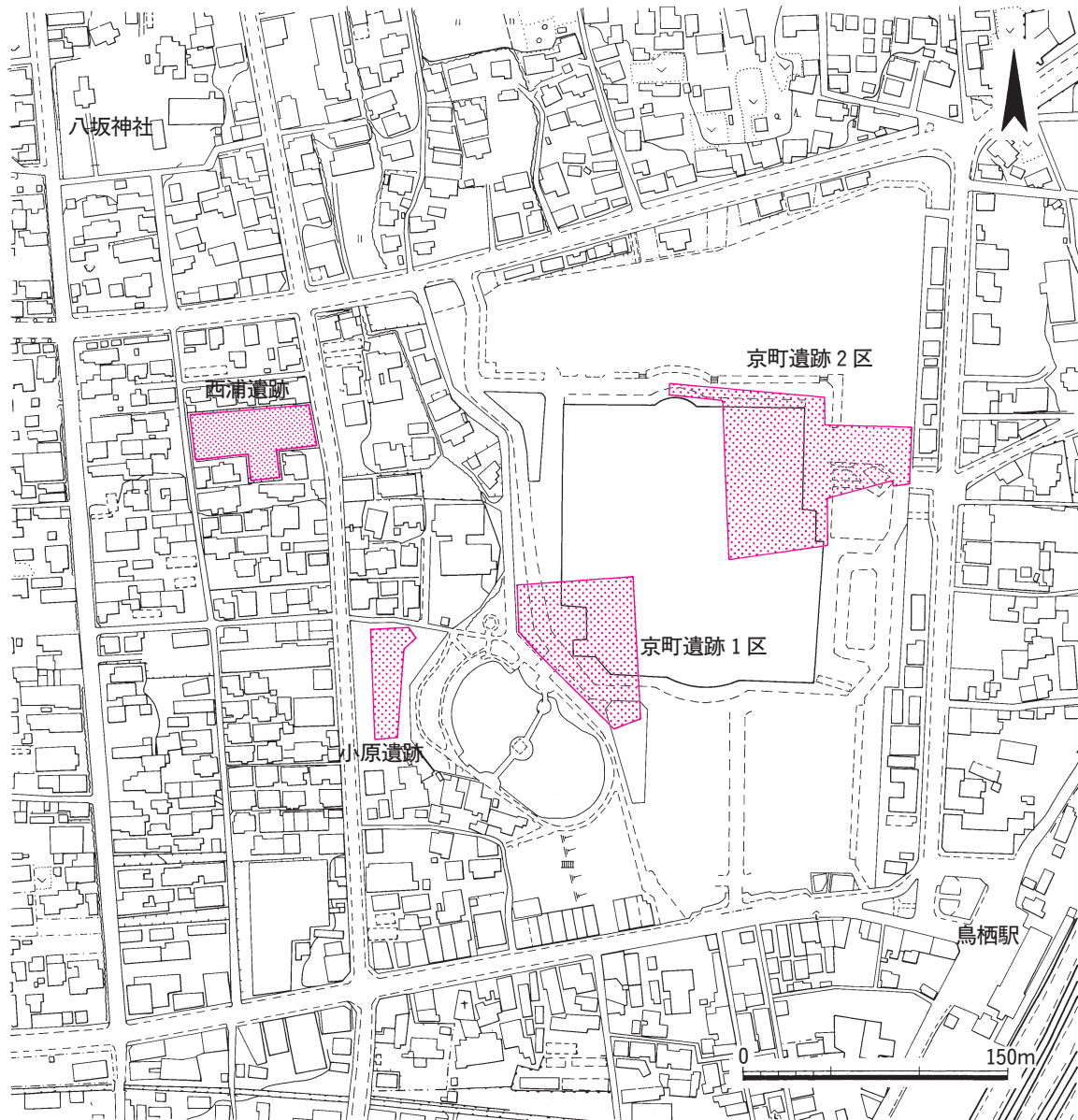


図4 調査地点位置図 (1/4,000)

2. 調査の経過

調査対象地は日本薬品㈱の工場跡地で、工場移転後は昭和56年よりスーパー「寿屋」の駐車場として利用されていた。そのため全面がアスファルト舗装されており、調査開始に際してはアスファルトの撤去が必要であった。それに加えて商店街と住宅街が隣接する地域であり、周囲は一般民家を取り囲むように広がることから調査時の影響を考慮しなければならなかった。また、対象地東側は大正町商店街の表通りに面し、交通量も多く人の行き来も激しい場所である。それに加えて西側の裏通りにも面していることから、調査対象地自体が近隣住民の通り道ともなっていた。それらの状況から安全確保の意味で東西の通りに沿ってフェンスを設置することとした。アスファルトの撤去及びフェンス設置、これらについては本調査に先立ち平成14年12月中に行なった。

本調査は平成15年1月6日に着手した。バックホーによる表土除去から開始した。排土については作業効率アップのため、調査区外への搬出を考えた。この件について事業主体者である株式会社ソロンと協議を行なったが、搬出する土量が多く費用がかかること、排土搬出に際して大型ダンプが商店街に頻繁に出入りすることから周辺地区へ与える、騒音その他の影響を考慮し調査区外への排土搬出は断念した。そのため調査地区内に排土を置くことになり、全体の2分の1程度を調査し、その後排土を反転させ残りの調査に着手することにした。

表土除去作業は南側の張り出し部分から始め、引き続き調査区西端から東方向へ向かって行なった。1月8日からは作業員を投入し遺構検出を行ない本格的な調査を開始した。調査対象面積のおよそ2分の1の表土除去が完了した時点で測量用の基準杭を設置した。また、遺物の取り上げ時に出土時点を明確にするため調査対象地を20m四方のグリッドに分けることとした。名称を北から南へA・B・C、西から東へ1・2・3…とした。1月25日からは遺構実測を開始した。遺構の掘り下げ及び遺構実測が完了後、1月31日に1回目の空中写真撮影を実施した。前半2分の1の調査が終了し、2月3日より埋め戻し作業にとりかかり、引き続き残り2分の1の表土除去を開始した。2月5日からは表土除去作業と並行しながら残り2分の1の遺構検出を開始した。遺構の掘り下げが完了し2月18日に2回目の空中写真撮影を実施した。残りの発掘及び遺構実測は2月28日までに終了した。遺物の取り上げ作業が若干あったことと、天候の関係などから埋め戻し作業は3月17日から開始し、3月25日に完了した。3月26日にテントやトイレ等発掘機材及びバックホーを撤収し、調査を全て終了した。

3. 調査の概要

調査対象地は東西に長く、東西に約60m、幅20mの長方形と、中央部南側に15m×13mの正方形に近い張り出し部分があり、南向きに凸形をしている。遺構確認面は地表下60～70cmで標高は20m前後である。調査地は全体がほぼ平坦であったが、調査区の東端付近では東へ向かいやや下っていた。地形的にも低位段丘の東辺近くであり遺構密度は次第に薄くなるものと考えられる。

調査区は以前にアスファルト舗装の駐車場として利用され、さらにその前は薬品会社が営まれていた場所であった。そのため敷地内には薬品会社のものと思われるレンガ積みの建物基礎や各種配管の溝が所々残っていた。その他に、これら建物を解体した際の瓦礫、建物の廃材やガラス、ゴミ等の廃棄された穴が多く確認された。これらにより攪乱を受けている遺構も見受けられた。

遺構は溝、土壇墓、土坑、住居跡、及び性格不明遺構が確認された。確認された遺構の時期は弥生時代後期～中世及び近世である。近世の遺構は近代以降のものと思われる建物基礎などと重複し、遺物も現代のものまで混じっており全体を正確に把握するにはいたらなかった。調査区のほぼ西半分からは溝以外の遺構は確認されなかった。またピット（小穴）もほとんど検出されなかった。調査区の中央付近から東南部分にかけて遺構が集中する。

住居跡は弥生時代ものが1棟、古墳時代のものが3棟確認された。古墳時代の住居跡のうち1棟は中世の溝と重複し四方の壁がわずかに残る程度であった。残り2棟の住居跡は重複していた。うち1棟にはカ

マドの痕跡が確認された。いずれの住居跡も壁際から土器がまとまって出土した。土壙墓は1基確認され、土師器の皿や碗が出土した。

溝は弥生時代と考えられるものが1条のほか、中世の溝が13条、近世1条、不明のものを1条確認した。弥生時代と考える溝は後世に数度の掘削を受けている痕跡がみられた。中世の溝は道路跡もしくは屋敷跡等の町割りを示すものであろう。中世の溝は調査区を東西に並行して横切る。調査区中央付近でT字型に曲がり、南方向へも並行して伸びる。溝は調査区外へ延びている可能性が高く、周辺地区の今後の開発は要注意であろう。中世の溝からは朝鮮製の青磁四耳壺が出土した。朝鮮製青磁四耳壺については現在の所他に出土例をみない。その他に鉄製の鋤先も出土した。中世溝からの遺物量は多くなく、土師器が少し出土したのみである。溝は建物基礎などにより所々削平されていた。

近世の溝は調査区南張り出し部分の南東角で確認された。溝の上部には性格不明遺構が重複していた。溝からは近世陶磁器の破片が多く出土し、その他に中国製青磁や白磁も出土した。国産の陶磁器類はほとんどが小破片で図示できたものは少なかった。陶磁器類の時期に関しては17世紀後半から18世紀にかけてのものが大半を占める。若干ではあるが幕末、明治以降の遺物も混ざっており、中には戦時中の統制番号の押された珍しいものなど興味深い遺物も出土した。溝埋土の上層からの出土であり後世の掘削で混じり込んだものであろう。

中国製磁器の産地は龍泉窯、景德鎮、樟州窯などで12世紀～13世紀頃の白磁が最も古く、他はおよそ15世紀～16世紀を中心とする。



図5 西浦遺跡遺構配置図 (1/200)

4. 遺構と遺物

(1) 溝

SD02 (図6・7、写真図版10-1~12、11-1~4)

南側張出し部分のC-2に位置する。長さ5.4m以上、幅1.10~1.35m、深さ0.4~1.1mである。溝の断面形は逆台形で壁は垂直に近く立ち上がる。SX01と重複し古いと思われる。調査時の埋土観察ではSD02埋まった後、整地後にSX01がつくられたようである。溝は調査区の南東角を斜めに横切る。溝の両端は調査区外に延び全容は不明である。隣接地区での開発については留意する必要がある。

遺物は土師器、須恵器の破片のほか、近世の陶磁器破片が多く出土した。比較的残りの良いものを図示した。5は肥前青磁の染付皿である。1/4ほどの残存である。6は肥前染付の椀で外面にコンニャク印判の装飾が見られる。7は肥前染付の皿で中央付近にはキズ隠しが施されている。8は肥前染付の碗で1/4程度残存している。全面に釉が施されている。9は波佐見系染付皿で1/2残存。10は肥前青磁の瓶で口縁部から首部にかけての残存である。胴部から下は欠損して不明である。11は肥前陶器の椀、12は肥前陶器刷毛目鉢である。底部のみ3/4程度残っている。13は色絵の油壺で赤色の彩色が施される。14は仏飯器でほぼ完形である。15は中国製白磁椀の口縁部で復元口径は17cmほどである。

そのほかには中国製磁器の破片が数点出土した。景德鎮窯の染付皿、青磁の碗、白磁などいずれも小破片であった。また、国産の陶磁器類も多く出土した。肥前青磁、白磁、肥前染付の椀、皿、肥前陶器の皿、土瓶、椀、波佐見系の染付皿、関西系施釉陶器、瀬戸・美濃と思われる陶器片などが多数出土した。ほとんどが小破片で、いずれも近世後期以降のものである。また遺構には伴わない昭和以降の物が数点混ざっていた。珍しいものでは、戦時中の統制番号の押された茶碗の破片が出土している。

瓦の破片が8点出土しているが詳細な時期の特定はできなかった。

SD05

南側張出部C-2区に位置する。確認されたのは、長さ1.55m、幅0.65~0.70m、深さ0.15mである。SK04とSX01と重複しどちらよりも古い。後世に削られ溝の残りは非常に悪いが、SD25南側の延長線上に位置することから同一の溝の可能性が高い。SD25との間が削平されており連続していなかったことから別に遺構番号を付した。本来はさらに南へ延びてSD10と交差していたことが予想される。遺物は出土しなかった。

SD06

南側張出部のC-2区に位置する。確認されたのは、長さ4.95m、幅0.46~0.85m、深さ0.08~0.11mである。調査区を東西に横切る。SD09とSD05の間に位置する。SD09と重複するが、調査時にSD09との新旧関係は確認できなかった。同時期に存在した可能性が高い。溝の東端は次第に浅くなり消滅している。SK04とわずかに接している。SD09西側に延びるSD07とは同一の溝とも考えられる。土師器の小破片が数点出土した。その他に陶磁器類の小片も少し出土した。

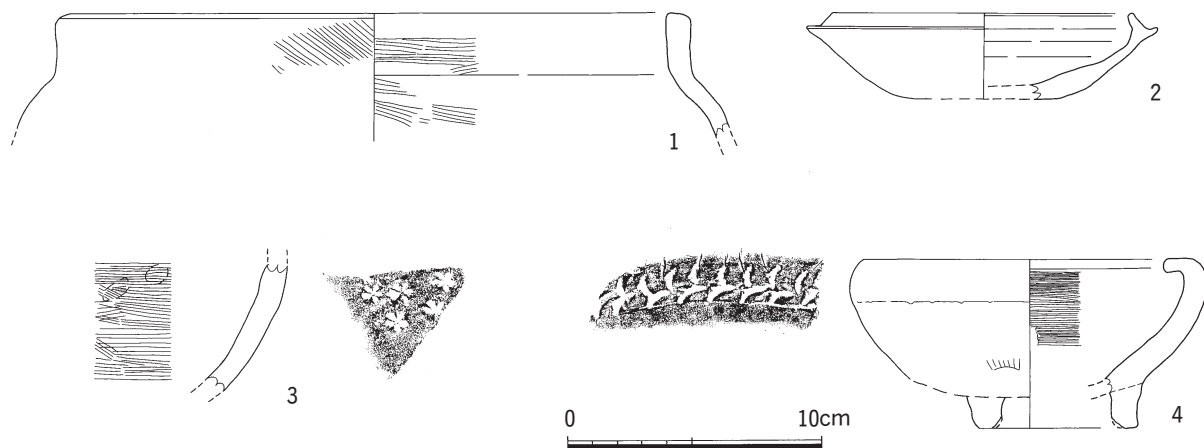


图6 SD02出土遺物 (1/3)

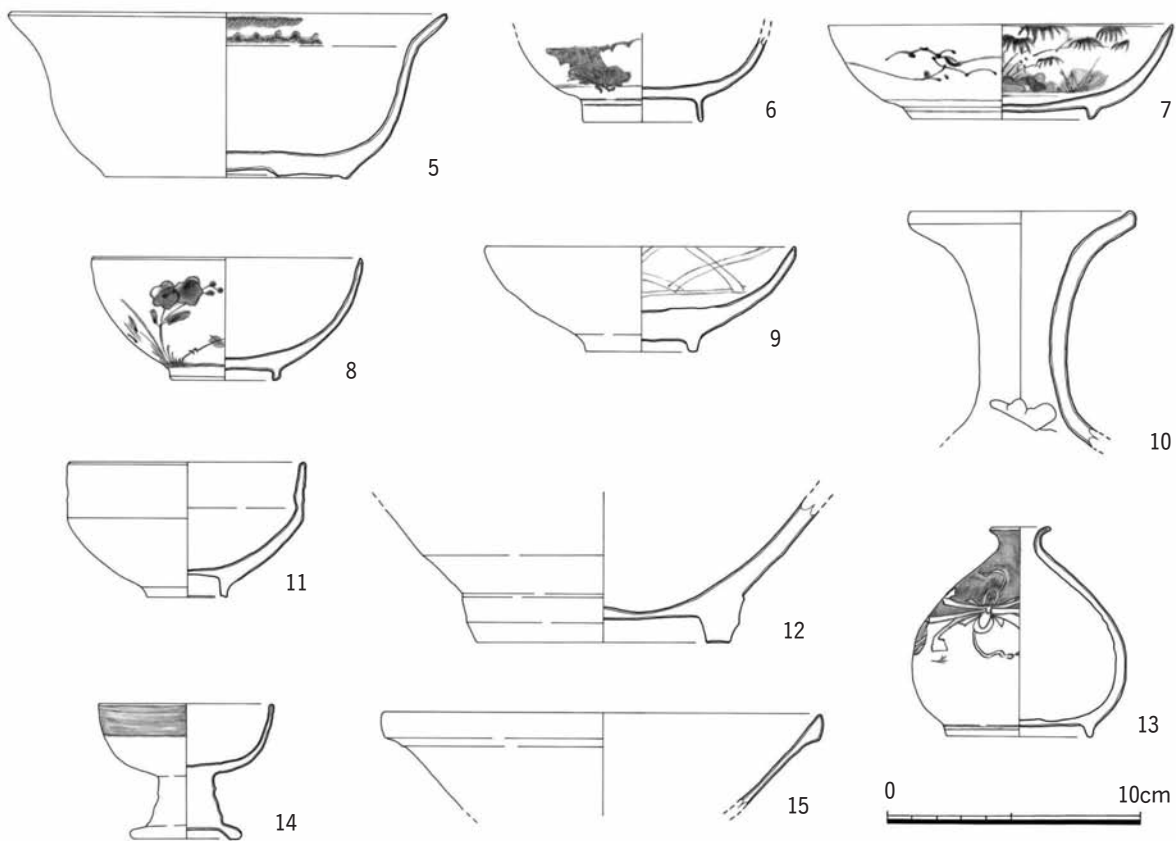


图7 SD02出土陶磁器類 (1/3)

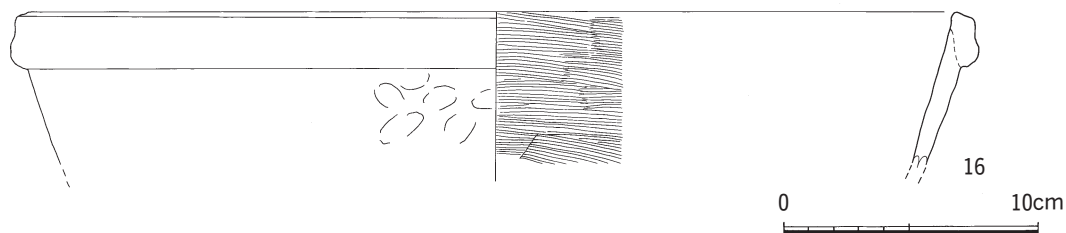


図8 SD07出土遺物 (1/3)

SD07 (図8、写真図版11-6)

南側張出部のC-2区に位置する。確認された部分は長さ2.0m以上、幅0.9~1.2m、深さ0.21~0.28mで、溝の西端は調査区外へ延びているため全容は不明である。SK11と重複し古い。SD06の西側の延長線上に位置する。途中SD09と交差するため、遺物取り上げ等調査の便宜上、別途遺構番号を付したがSD06と同一の溝である可能性が高い。また、SD09とも新旧関係は認められず、両方の溝は同時期に存在したものと考えられる。16は播鉢の口縁部であろう。その他、土師器の破片が少し出土した。

土器3点 小破片・その他中1袋

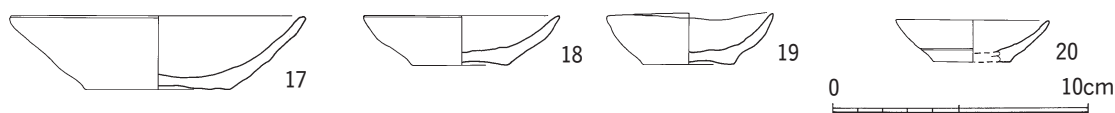


図9 SD09・SD10出土遺物 (1/3)

SD09 (図9、写真図版11-7)

南張出部のC-2区に位置する。確認されたのは長さ8.4m以上、幅0.5~1.5m、深さ0.35~0.79mである。確認された溝の北端では幅が1.5mほどであるが途中で急激に狭くなり西へ向かって曲がっている。SD12を挟んで北側に位置するSD13は途中で後世に掘削されて不明であるが、溝幅や位置関係からして同一の溝である可能性は高い。遺構検出の際には確認できなかったが本来はSD12を横切って重複していたと考えられる。遺構配置図では掘削された部分を波線で表したが溝の推定ラインでもある。調査時には確認できなかったが、掘削されたのではなく溝を埋めたものであったかもしれない。土師器の杯、皿などが数点と小破片が少し出土した。

SD10 (図9、写真図版5-5、11-8)

南張出部の南端C-2区に位置する。SX01と重複し古い。西端は調査区外へ延びる。東端はSX01との重複で不明であるが調査区外まで延びる可能性がある。また一部は後世に掘削されている。確認された溝の規模は、長さ5.2m以上、幅1.0~1.6m、深さ0.59~0.65mである。溝の断面形はV字に近いU字型である。埋土の下の方からは土師器の皿などが出土した。検出面に近い上層からは近世の陶磁器類の小破片が出土した。肥前青磁の皿、肥前染付の碗、瀬戸の小破片が確認された。その他、小破片であるが瓦3点と煙草のキセルの金属部分が出土した。

SD12 (図10・11、写真図版5－7・8)

調査区をほぼ東西に横切り B-1、2、3 区に位置する。長さ55m 以上、幅3.10～4.50m、深さ0.33～1.69 m である。溝の両端部は共に調査区外に延びるため、全長は不明である。そのうち溝の幅が確認できたのは13.3m である。その他の部分については調査区外にかかるため溝の北岸のみ確認された。調査区中央付近で SD13及び SD25が南北に横切る。また SX31が重複し新しい。溝の断面形はやや開き気味の V 字形で、数度にわたり掘り直しがなされたようである。溝底のレベルは東に向かいやや下っている。遺構検出面で溝に切り込む円形の小穴を数カ所確認したがゴミの廃棄跡であった。

遺物は最深部から弥生土器の破片が数点出土した。瓦は破片が2点出土した。22は丸瓦の一部である。須恵器も1点確認された。21は鉢であろう。遺構検出面に近い上層部分からは近世陶磁器類の破片が出土した。小破片がほとんどで図示できるものはなかった。主なところでは、唐津陶器の大皿、肥前染付の碗、陶器の刷毛目瓶、すり鉢や碗や皿、刷毛目陶器の小破片、肥前か福岡の碗などである。遺物の時期は17世紀後半から18世紀に集中している。

SD13 (図12・13・14、写真図版6－1～4、11－9～12)

調査区の西端から中央付近まで延び、そこから南へ向かって直角に曲がる。SD14と平行に走る。確認された全長は33.6m 以上で、幅1.05～1.50m、深さ0.41～1.00m である。溝の西端は攪乱によって切られているが調査区外へと延びることが予想される。B-1 区の中央付近で溝の南壁に切り込むように SK29が位置する。SD13と SK29との間に新旧関係は認められない。SK29からは朝鮮製青磁四耳壺が出土した。屈曲した SD13の南端は SD12と重複している。SD12の検出面がゴミ穴で攪乱を受けていたため、遺構検出時に新旧関係がはっきり確認できなかったが、SD12を横切り南へ延びていたと考えられる。SD12の南側で攪乱のため一部消失するが、南方延長線上に位置する SD09とは同一の溝であったと考えられる。溝は南へ屈曲する手前1.5m ほどのところで2条に別れる。SD13については遺物取り上げの便宜上、南へ延びた部分を SD13②、途中で分かれた部分を SD13③と枝番を付して区別した。SD13③は長さ8.20m、幅0.7～0.8m、深さ0.02～0.23m で溝の底面はほとんど平坦である。溝の南端は SD12の北側で次第に浅くなり消滅する。溝の断面は U 字形で②の部分では壁は急激に立ち上がる。SD13②部分は SD25と平行に位置しその距離は約4.8m である。

23～27は中世後期の遺物であろう。これらは溝の底面に近い所からの出土である。23は土鍋の口縁部、24、25は火鉢である。26は杯で底部が回転糸切り後ヘラケズリで仕上げている。27は鉄製の鋤先である。その他の遺物は溝の検出面から上層にかけて出土した。28は16世紀後半の景德鎮の染付皿で底部のみ1/4残存している。29は中国産青磁の皿で底部のみ1/3ほど残存。15世紀頃のものであろう。中国産の遺物では、白磁の碗、青磁の皿、龍泉窯青磁の碗、景德鎮染付の皿や白磁の皿、樟州窯の皿などの小破片が出土した。国産の陶磁器類では肥前青磁の皿や染付の碗と陶器の皿や碗、肥前系染付の碗と猪口、染付の瓶の小破片、関西系の土瓶などが出土した。ほとんどが17世紀～18世紀を中心としたものである。

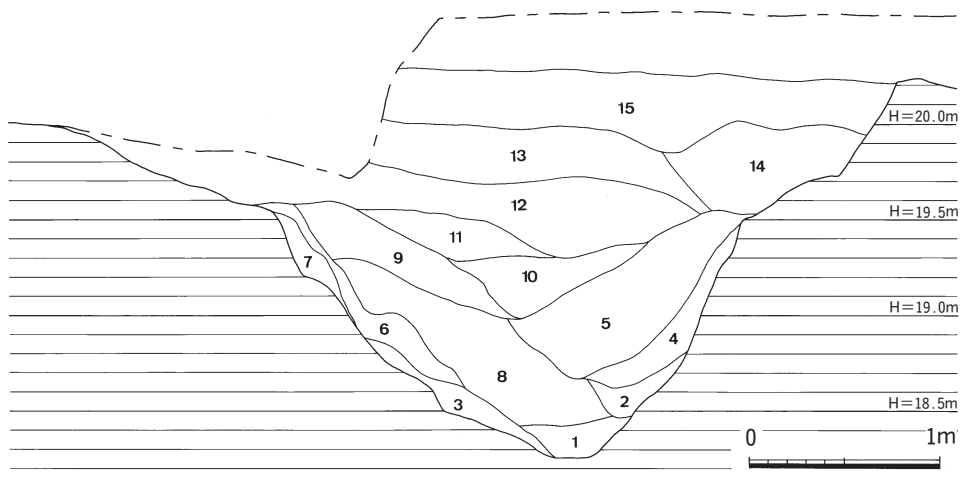


図10 SD12土層断面図 (1/40)

SD12土層

- | | |
|----------------------|----------|
| 1. 黒褐色土 (小礫含む) | 9. 黒灰褐色土 |
| 2. 黄灰色土 (黒褐色土混) | 10. 黄灰色土 |
| 3. 黄灰色土 | 11. 黒褐色土 |
| 4. 黄灰色土 | 12. 褐色土 |
| 5. 黒褐色土 (黄灰土ブロック混じる) | 13. 褐灰色土 |
| 6. 黒灰色土 (黄灰色土混じる) | 14. 黒褐色土 |
| 7. 黄灰色土 | 15. 褐色土 |
| 8. 黒灰色土 (黄色砂粒含む) | |

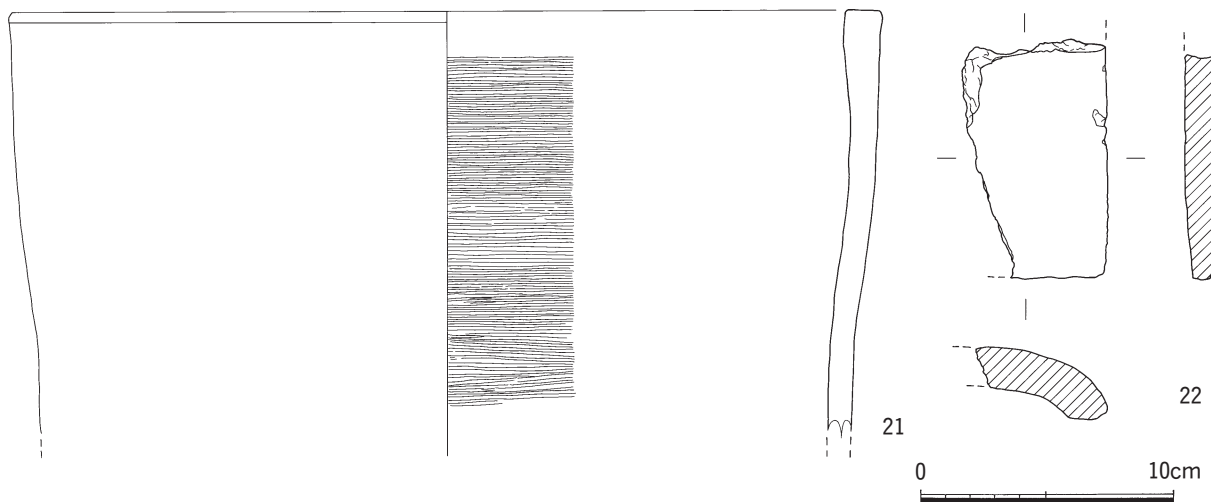


図11 SD12出土遺物 (1/3)

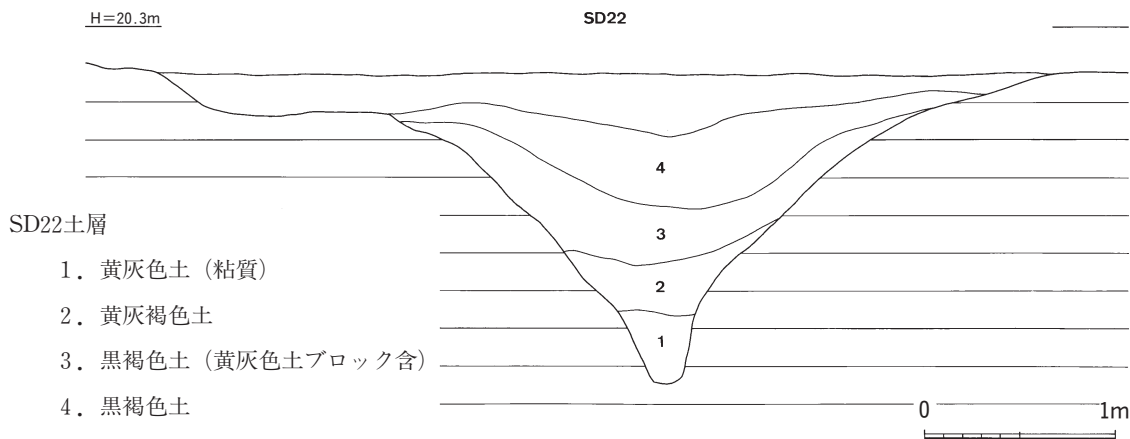
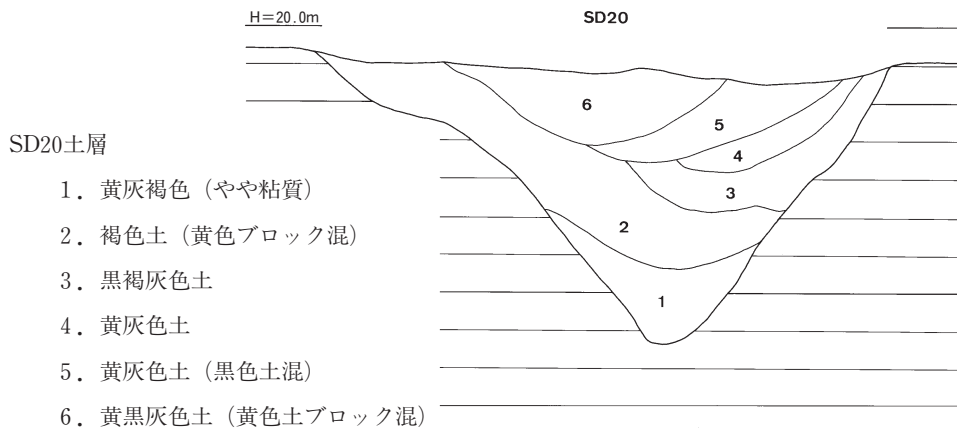
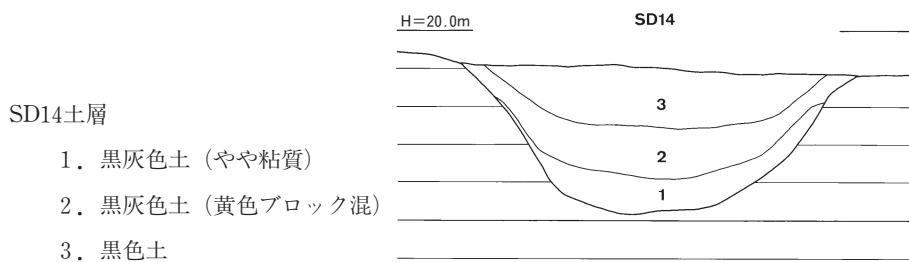
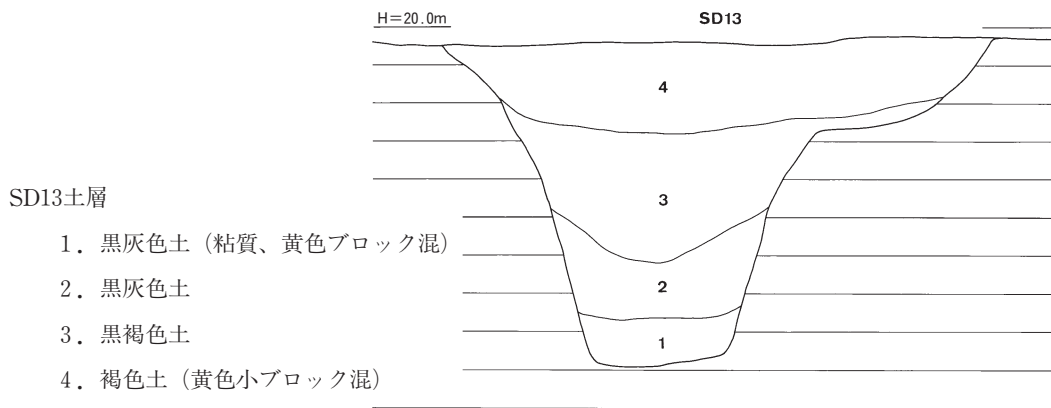


図12 SD13・SD14・SD20・SD22土層断面図 (1/20)

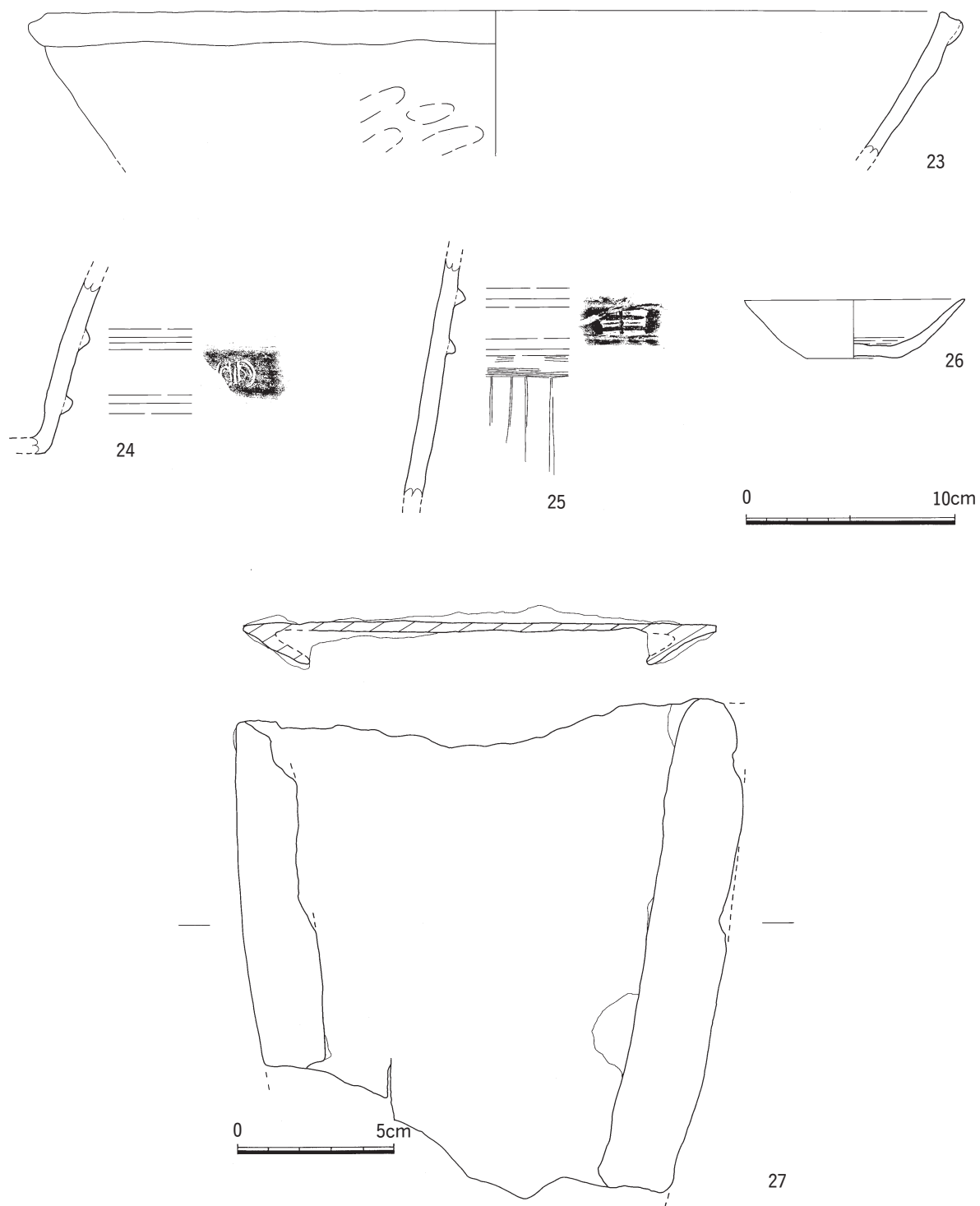


图13 SD13出土遺物 (1/3)

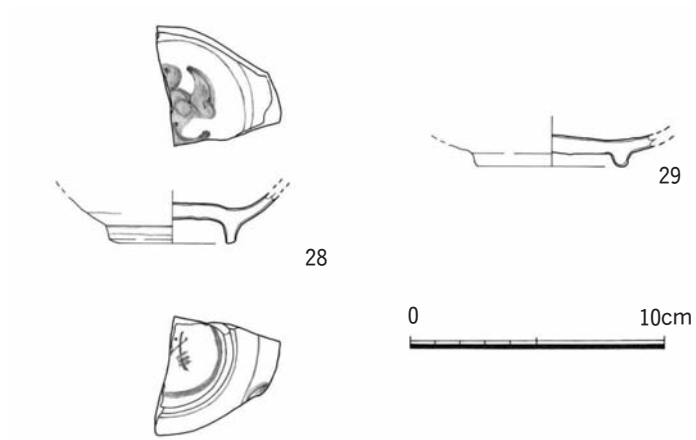


图14 SD13出土陶磁器類 (1/3)

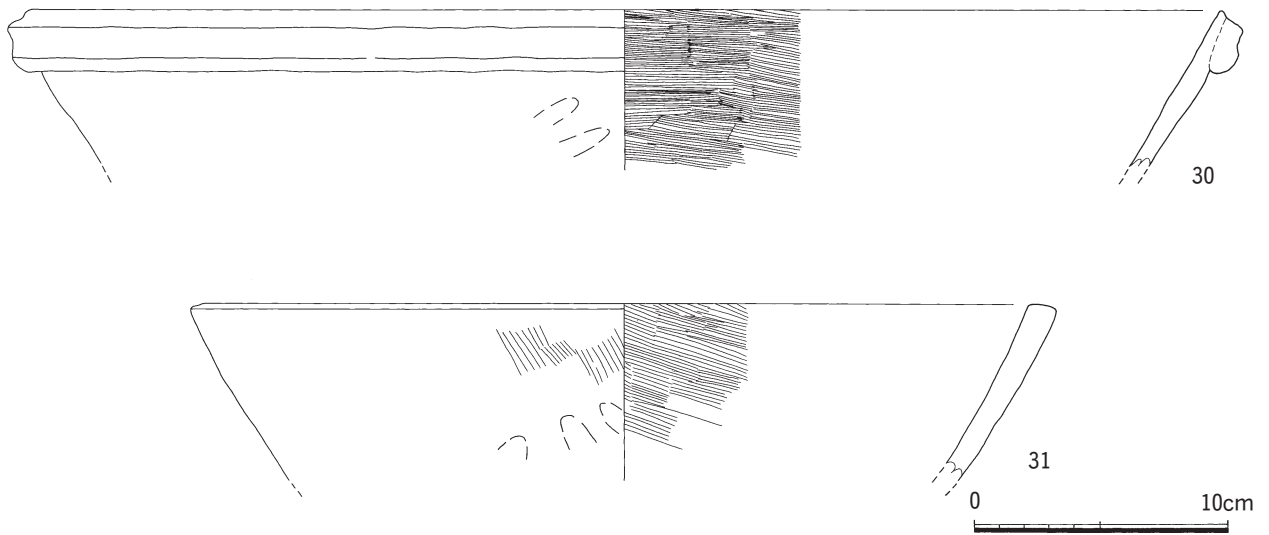


图15 SD14出土遺物 (1/3)

SD14 (図15、写真図版 6 - 5・6)

調査区をほぼ東西に横断する。溝の東西両端とも調査区外まで延びており全容は不明である。確認された部分は長さ57.0m、幅0.75~1.70m、深さ0.26~0.44である。溝の所々は後世の建物基礎等で攪乱、掘削を受け消滅している。溝の幅は東にいくほど次第に狭くなり SD19との交差部分では約0.4mであった。SD13及び SD20とは平行に走り、それぞれの溝との距離は調査区の西端で約4.2m、東端近くでは約3.8mである。中央近くでは約3.5mと若干狭くなる。調査区北東隅の A-3区では SD19、SD22とそれぞれ交差する。SD22は SD14から北へ延びる。調査区の中央付近では SD25と T字型に交差する。他の溝との新旧関係は認められず、同時期に作られたと考えられる。A・B-3区で SX21、SH30と重複するがいずれよりも新しい。

土師器の小片がわずかに出土した。30は土鍋、31は播鉢である。その他には、埋土の上層からは混入と思われる国産陶磁器類の小破片が少し出土した。朝鮮、肥前の磁器がそれぞれ1点出土した。

SD15 (写真図版 6 - 7)

調査区西南隅の C-1区に位置する南北方向の溝である。幅0.7~0.9m、深さ0.17~0.36mである。溝の南端は調査区外へと延びる。北端は攪乱により切られて消失する。現存での長さは約3.5mである。断面は逆台形状を呈する。SD15は北へ延び SD13、SD14とほぼ直角に交差したことが予想される。SD13②とはほぼ平行に位置する。遺物は出土しなかった。

SD16 (写真図版 7 - 1)

調査区東南角の B-3区に位置する南北方向の溝である。南北両端がいずれも調査区外へと延びているため船長は不明である。幅0.3~0.6m、深さ0.43~0.89mである。わずかに長さ約3.2mが現存する。西側には0.5mほど離れて SD17が同じく南北に走る。溝の断面形は U字形である。

遺物は土師器、須恵器の小破片が数点と陶磁器類の破片が少し出土した。

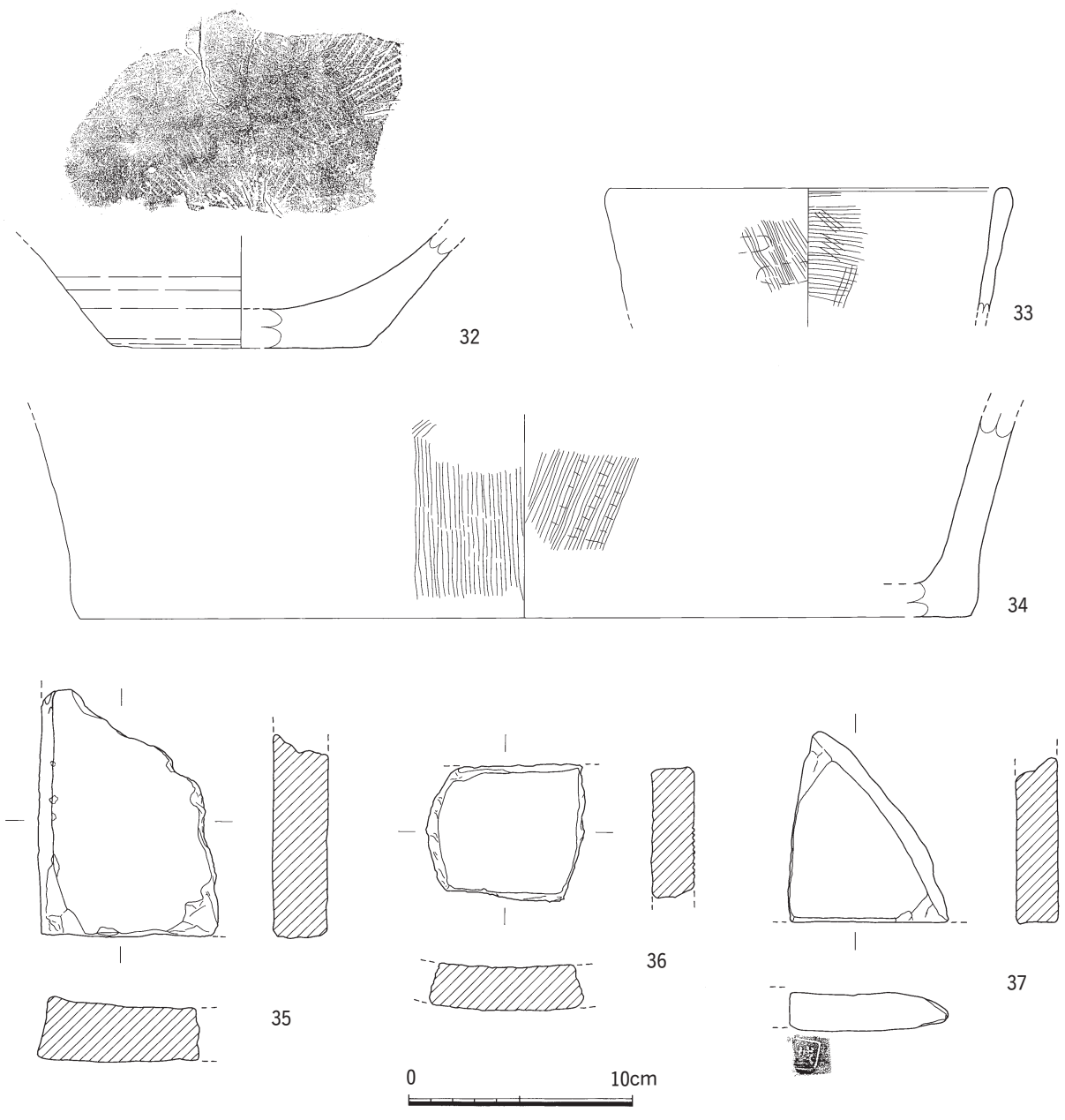


图16 SD17出土遗物 (1/3)

SD17 (図16、写真図版7-1・2、12-1・2)

調査区の東端、B-3区に位置する南北方向の溝である。確認されたのは長さ13.2m、幅0.5m、深さ0.17~0.56mである。SD20とSH18と重複しそれよりも新しい。東側にはSD16が平行に位置し、西側には約2.0m離れてSD19が平行に走る。溝の南端は調査区外へと延びる。溝の北端は攪乱により切られて不明であるが、調査区外まで延びることが推測される。また、溝の間も一部攪乱のため消失している。

32は播鉢の底部である。33は鉢の口縁部で一部残存する。35~37はいずれも平瓦の一部である。土師器が少しと須恵器の破片が1点。陶磁器類はいずれも小破片で出土した。ほとんどが17世紀~18世紀頃のもので、溝の検出面や埋土の上層からの出土であったことから混入したものであろう。肥前染付の碗、皿、瓶、小坏、白磁、陶器の土瓶、刷毛目鉢、すり鉢と甕、呉須絵陶器、陶胎染付の碗、刷毛目陶器の袋物、刷毛目の甕や大皿などが出土した。

SD19 (図17、写真図版7-7・8、12-3~5)

調査区の東端に位置し、A・B-3区を南北に走る溝である。SH30と重複し新しい。SD14、SD20とはほぼ直角に交差する。他二つの溝との新旧関係は認められなかった。また、SD22とは平行に位置する。現況で確認されたのは長さ14.3m、幅0.32~0.6m、深さ0.04~0.58mである。溝の断面は逆台形で後世の攪乱等で全体的に残りは悪い。特にSH30と重複する部分では大きく攪乱を受けており、検出面ではSH30との新旧関係は不明であった。溝の北端は調査区外に延びる。南端は攪乱により切れ消失する。それより南側で溝は検出されなかった。

40は土師器の甕、41、42は須恵器の杯、44は窯道具で1点ほぼ完形で出土した。45~48は平瓦である。その他の遺物は須恵器、土師器の小破片が少量、陶磁器類は肥前染付の碗、肥前青磁、染付の瓶や陶器の鉢と大皿、陶器のすり鉢、青磁染付の鉢、磁器の袋物、関西系陶器の鍋、陶器の刷毛目皿、碗、袋物、刷毛目大皿などが小破片で出土した。

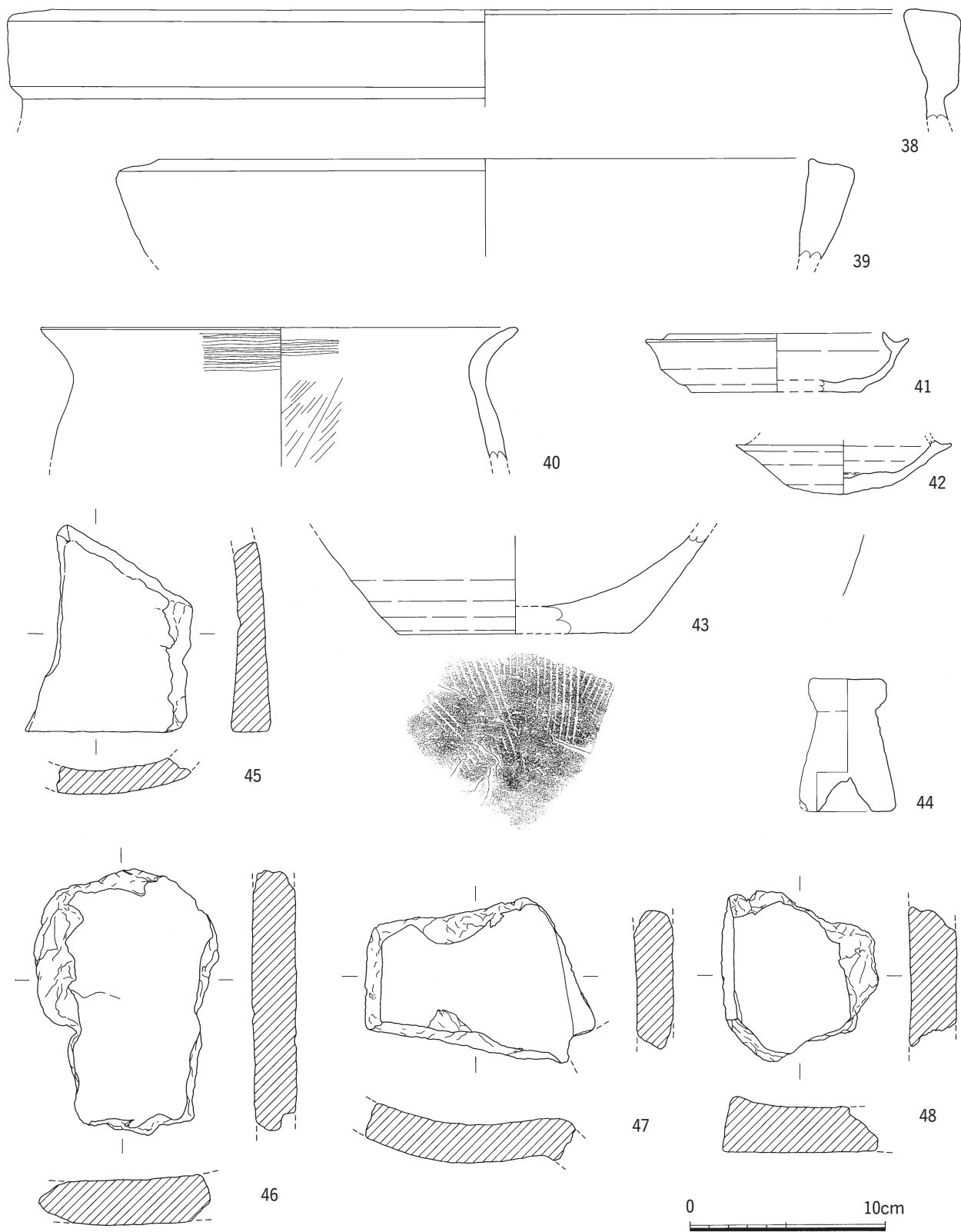


图17 SD19出土遗物 (1/3)

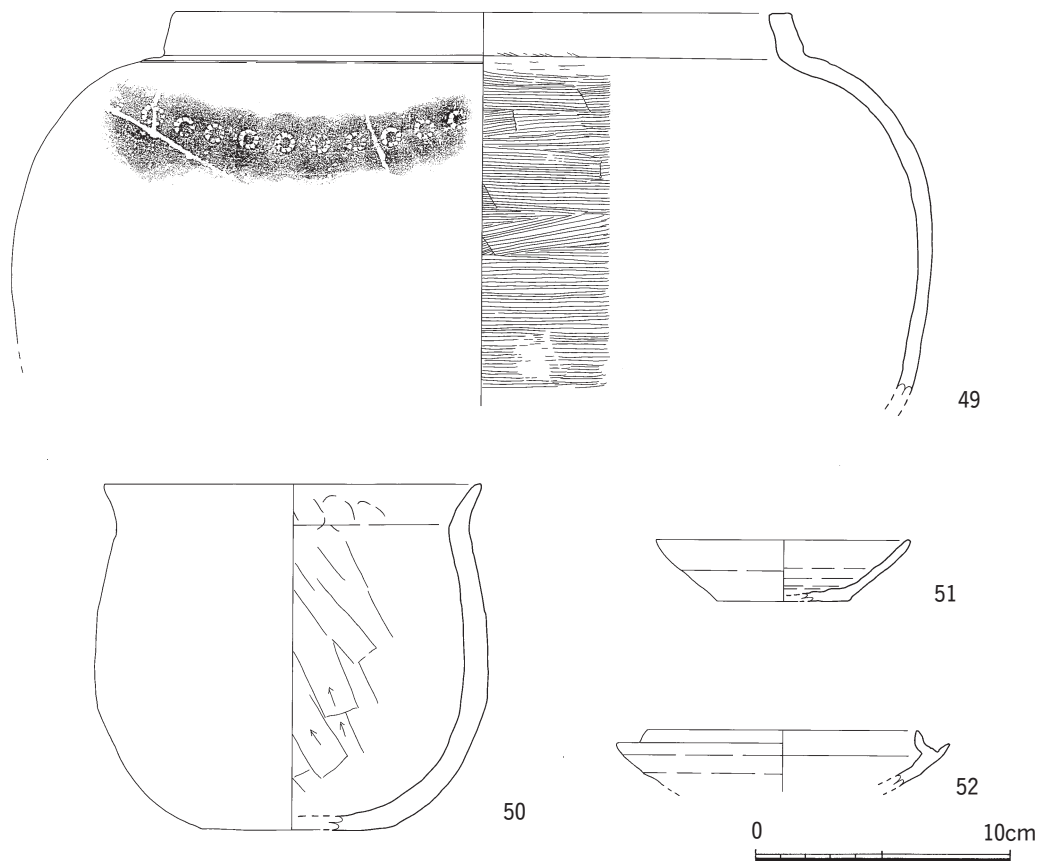


図18 SD20出土遺物 (1/3)

SD20 (図18、写真図版7-4・6、12-6)

調査区のほぼ中央、B-2区から調査区東端へ延びる溝である。SD25から垂直に東へと調査区を横切る。確認されたのは長さ26.7m、幅0.5~1.55m、深さ0.29~0.81mである。SD14とは平行な位置関係にある。調査区の東端付近でSD17、SD19と交差する。また、SX21と重複し新しい。溝の東端は調査区外へと延伸するため全長は不明である。途中2カ所で大きな攪乱により削平されている。溝底面のレベルは東へ向かい緩やかに下っている。調査区東端のA・B-3区は広い範囲で攪乱、掘削を受けておりこの付近の遺構の残りは悪い。D20の溝の幅が東へいくほど狭くなるのは上部が削られているためである。

49は湯釜、50土師器の甕、51は土師器の杯で回転糸切り離しである。52は須恵器の杯で口縁部の破片が出土した。遺物の出土量は少なかった。土師器、須恵器の破片と肥前系染付、関西系、陶器の刷毛目甕などの陶磁器類がいずれも小破片で少し出土した。

SD22 (写真図版 7 - 5)

調査区北東隅の A-3 区に位置する溝である。SD14から垂直に北へ延びる。SD14とは新旧関係が無く同時期の溝である。確認されたのは長さ3.05m、幅1.55~2.3m、深さ0.50~0.87mである。溝は調査区外へ延びており全長は不明である。東側の SD19とは平行に位置する。溝と溝の幅は約 6 m である。

遺物は土師器の小破片が少しと陶磁器類の小片がわずかに出土した。図示できるものは無かった。

SD25 (写真図版 8 - 1)

調査区中央の B-2 区に位置する南北方向の溝である。SD14から南へ向かって延びる。SD13②部分と平行に位置する。溝の南端は SD12を横切り南へ延びると推定される。南側延長線上の C-2 区に位置する SD05に繋がると考えられる。確認されたのは長さ13.5m、幅0.8~1.2m、深さ0.09~0.23mである。溝の断面は逆台形であり、今回の調査で確認された中では最も浅い溝である。SD12との重複部分の遺構検出面が攪乱されており SD25の痕跡は確認できなかった。溝が南へ延伸した場合 SD19の東側延長線上で交差する可能性が高い。その場合、最大で全長30m 以上になる。

遺物は図示できるものは無かった。全て小破片で肥前染付の碗、陶磁器類、土師器が少し出土した。

今回の調査で確認した溝は SD12を除き全て同時期の溝と考えられる。溝の交差部分での遺構検出や土層断面の観察でも新旧関係は認められなかった。いずれも規格制をもって東西南北いずれかの方向に延びており当時の町割を示すものであろうか。溝と溝の間の部分については道路であった可能性もあるが、遺構検出レベルでは突き固めて造成した痕跡は確認されなかった。

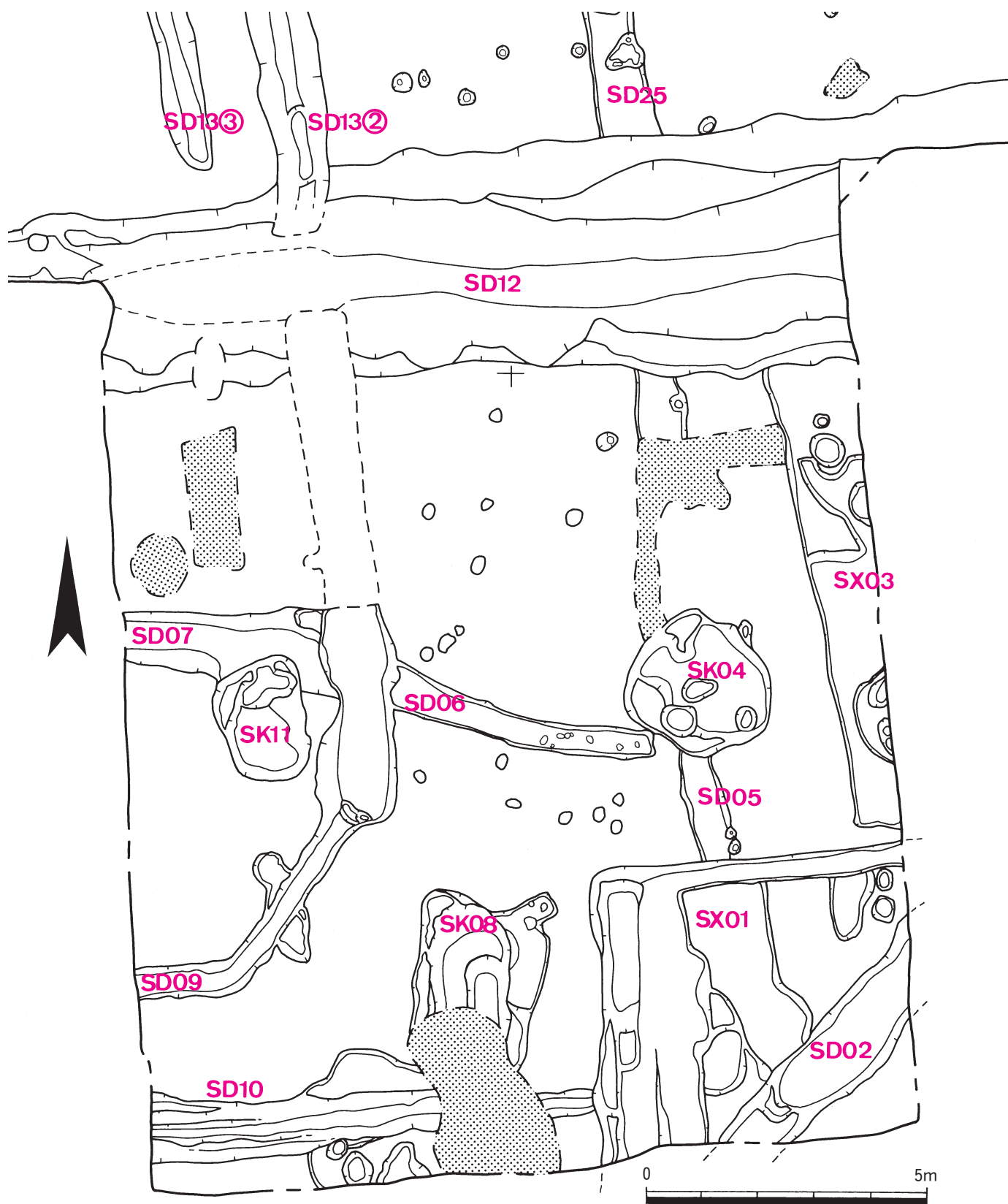


図19 調査区南張出部 (1/100)

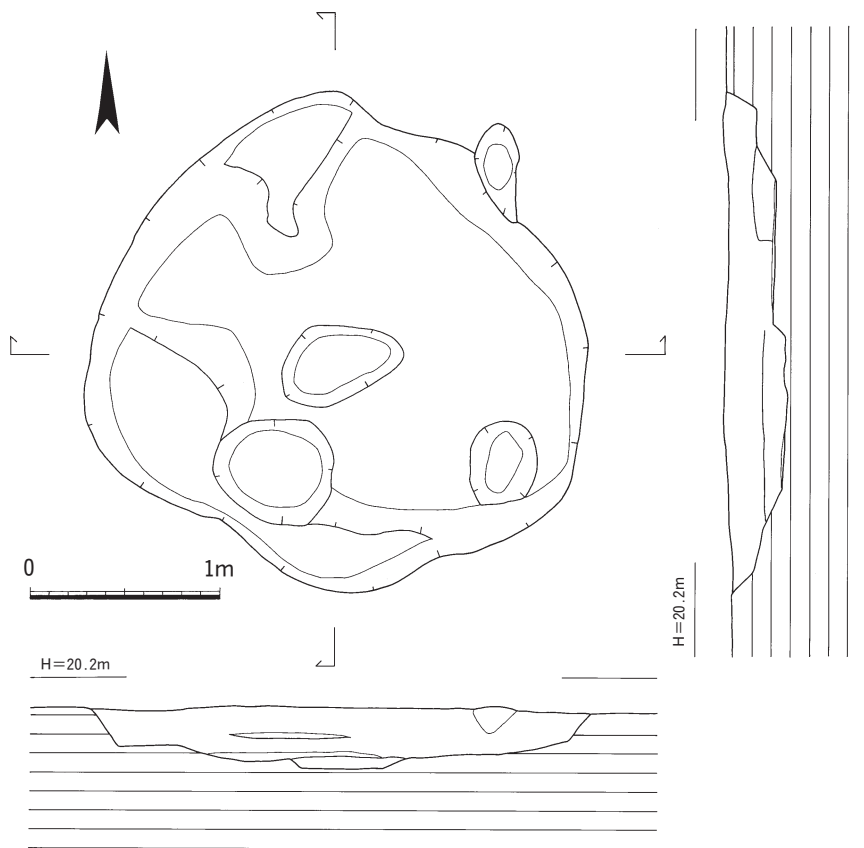


図20 SK04 (1/40)

(2) 土坑・土壙墓

SK04 (図20、写真図版5-2)

調査区の南張出部C-2区に位置する。SD05と重複し新しい。西側のSD06とは僅かに接する。平面形は長軸2.65m、短軸2.63mの不整形で、深さ0.31mである。径0.4mほどの小穴が3カ所確認された。底面はほぼ平坦で壁はやや開き気味に立ち上がる。土師器、陶磁器の小破片が少し出土した。図示できる遺物は出土しなかった。

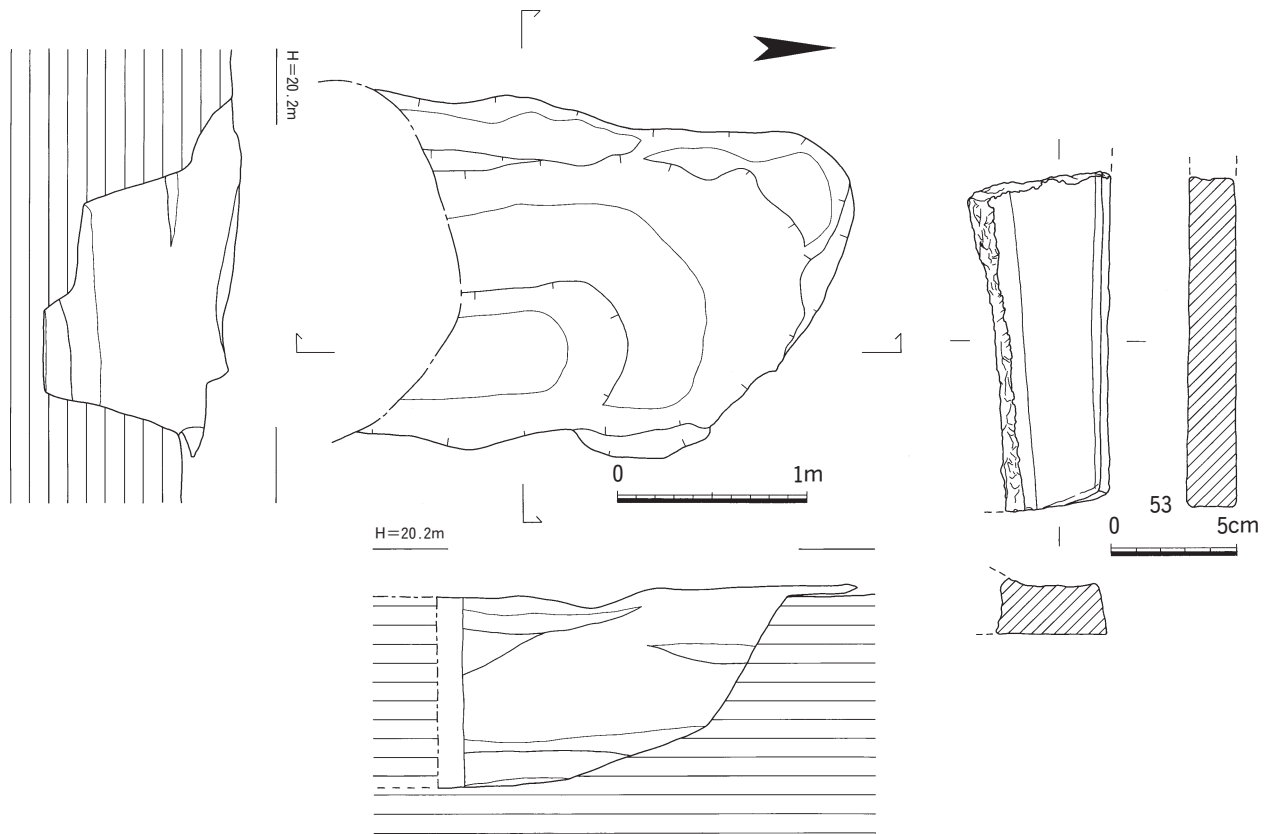


図21 SK08 (1/40)・出土遺物 (1/3)

SK08 (図21、写真図版5-3)

調査区の南端付近、C-2区に位置する。後世の掘削により遺構の一部が破壊され全容は不明である。SD10と接するか重複した可能性が高い。長軸2.00m以上、短軸2.00m。深さ1.05mである。ほぼ南北に延びる楕円形のプランである。最深部の底面は南へ緩やかに下っている。西壁には平坦面を有し開き気味に立ち上がる。東壁は急激に立ち上がる。遺構検出面近くの埋土上層は攪乱しており近代の遺物が混じっていた。近世の陶磁器類が小破片で出土した。肥前の播鉢、壺の破片、瓦が4点、陶磁器類の小破片が出土した。53は平瓦の一部であろう。1点のみ図示する。

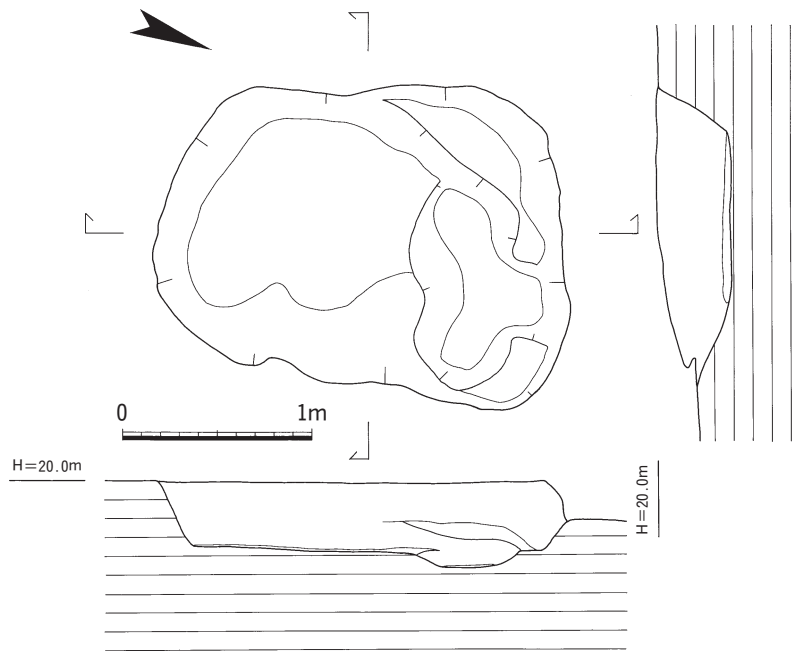


図22 SK11 (1/40)

SK11 (図22、写真図版5-4)

南張出部のC-2区に位置する。SD07と重複し新しい。長軸2.15m、短軸1.54mの隅丸の長方形で深さは0.39mである。底面はほぼ平坦で北壁側に小穴を有する。土師器の破片の他、陶磁器類が少量出土した。肥前染付の小碗、陶器の皿、など数点である。図示できるものは無かった。

SP26 (図23・24、写真図版13-14~17、14-1~6)

調査区中央やや東よりのB-3区に位置する。西側にはSK28が隣接する。平面形は長軸1.0m、短軸0.85mの楕円形である。深さは0.45mで遺構中央が最も深くなる。壁は急激に立ち上がる。

遺物は土師器の皿、杯、碗などほぼ完形のもものが10点出土した。54~62は全て底部糸切り離しである。54~59は杯、60~62は皿である。63は高杯で脚部が欠損している。その他は土師器の小片が少し出土した。

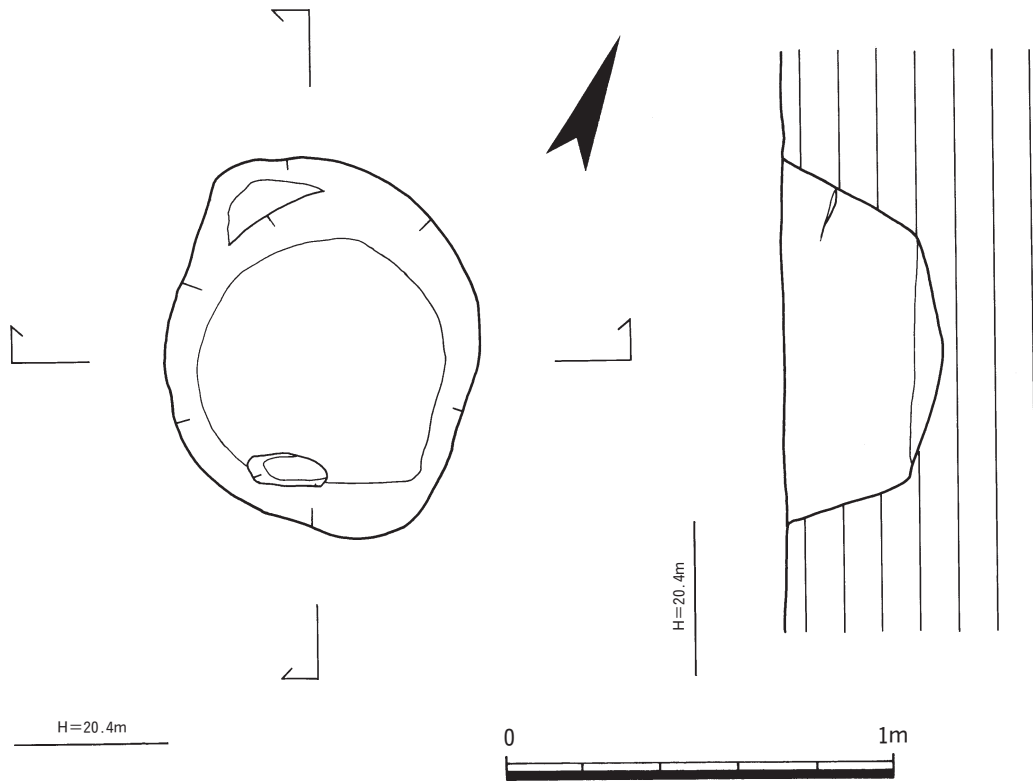


图23 SP26 (1/20)

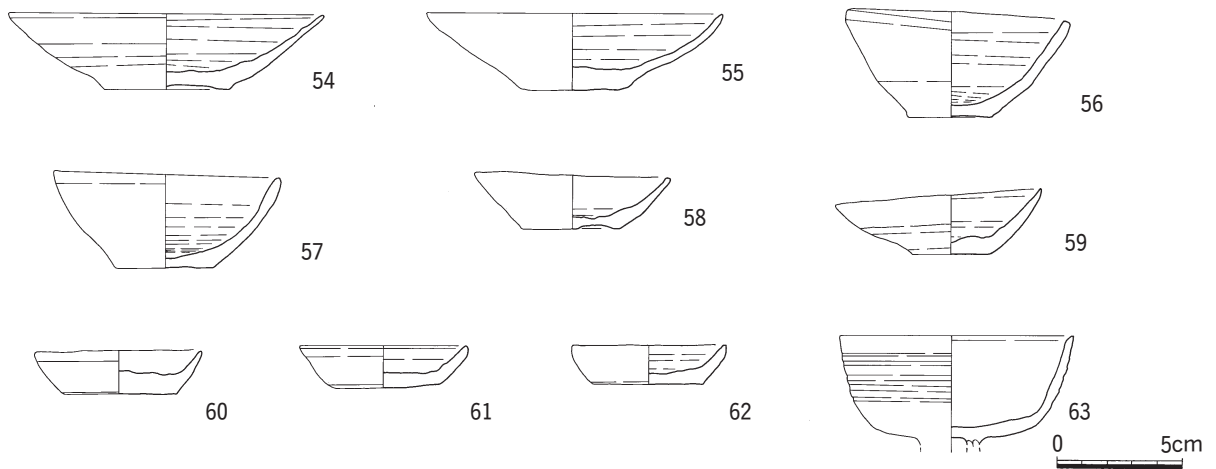


图24 SP26出土遗物 (1/3)

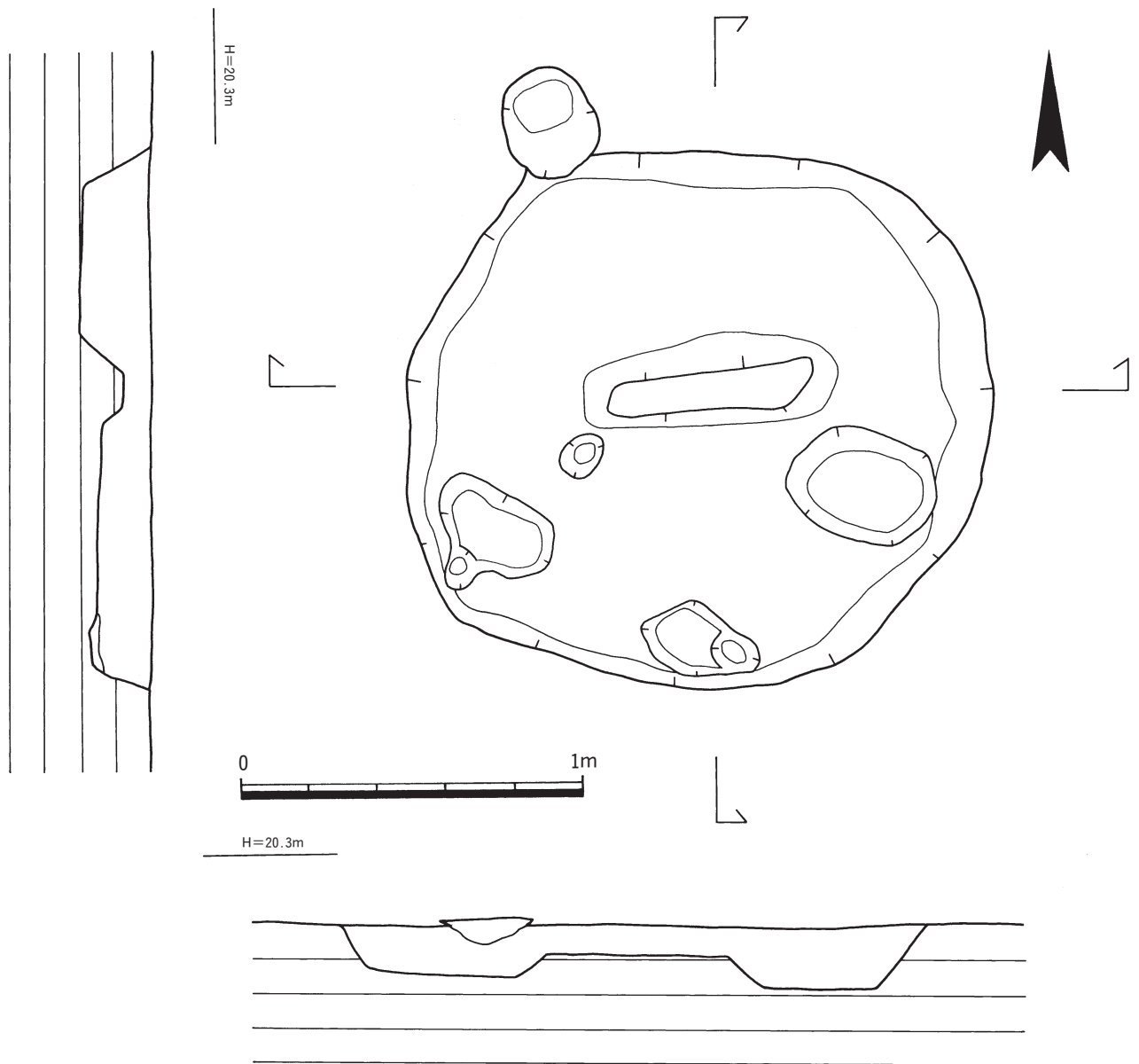


図25 SK27 (1/20)

SK27 (図25)

調査区中央やや東よりのB-2区に位置する。平面プランは円形で直径は1.5mほどである。深さは0.15~0.2m。底面はほぼ平坦であるが、中央が一段高くなっている。南壁側に小穴が3カ所確認された。近世陶磁器の小片が少し出土した。陶器の袋物、椀の破片が数点である。

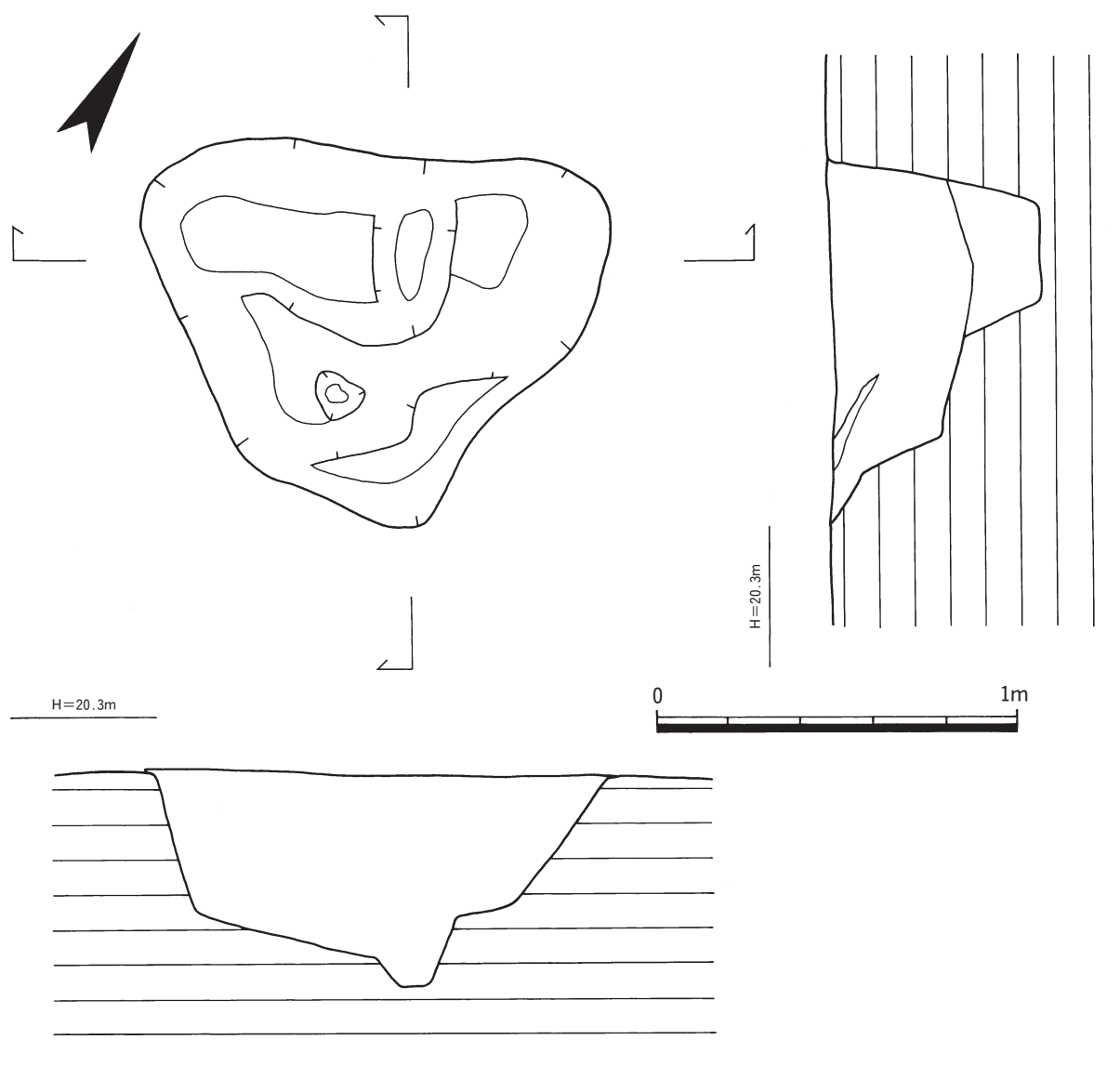


図26 SK28 (1/20)

SK28 (図26)

調査区中央やや東よりのB-2区に位置する。SP26の西側でSK27の北東側約1mにあたる。平面形は1辺が約1.2mの隅丸の三角形である。北壁に接する小穴部分が最も深くなり、深さは約0.6mである。北壁は垂直に近く立ち上がる。土師器、陶磁器類の小破片が数点出土した。

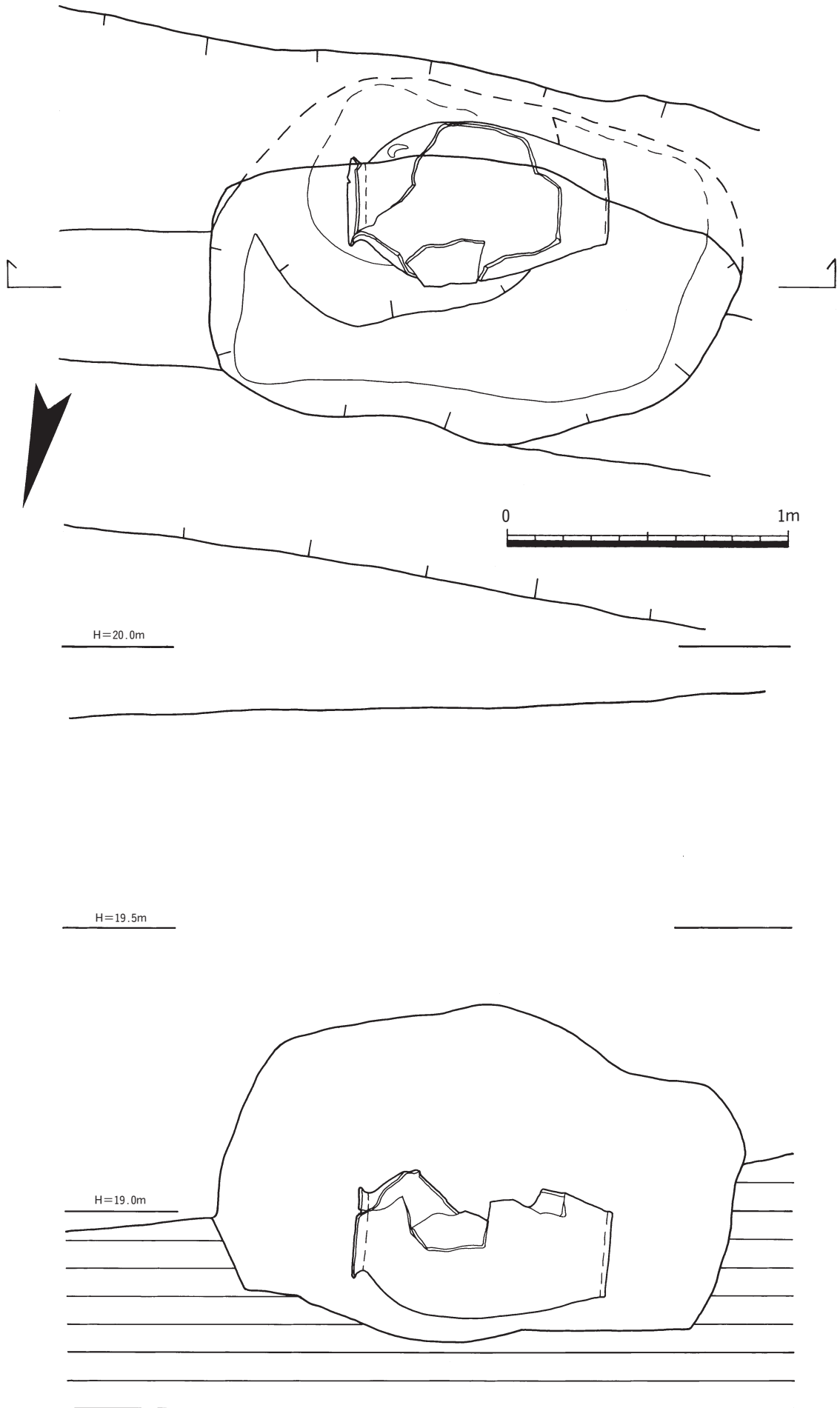


图27 SK29 (1/10)

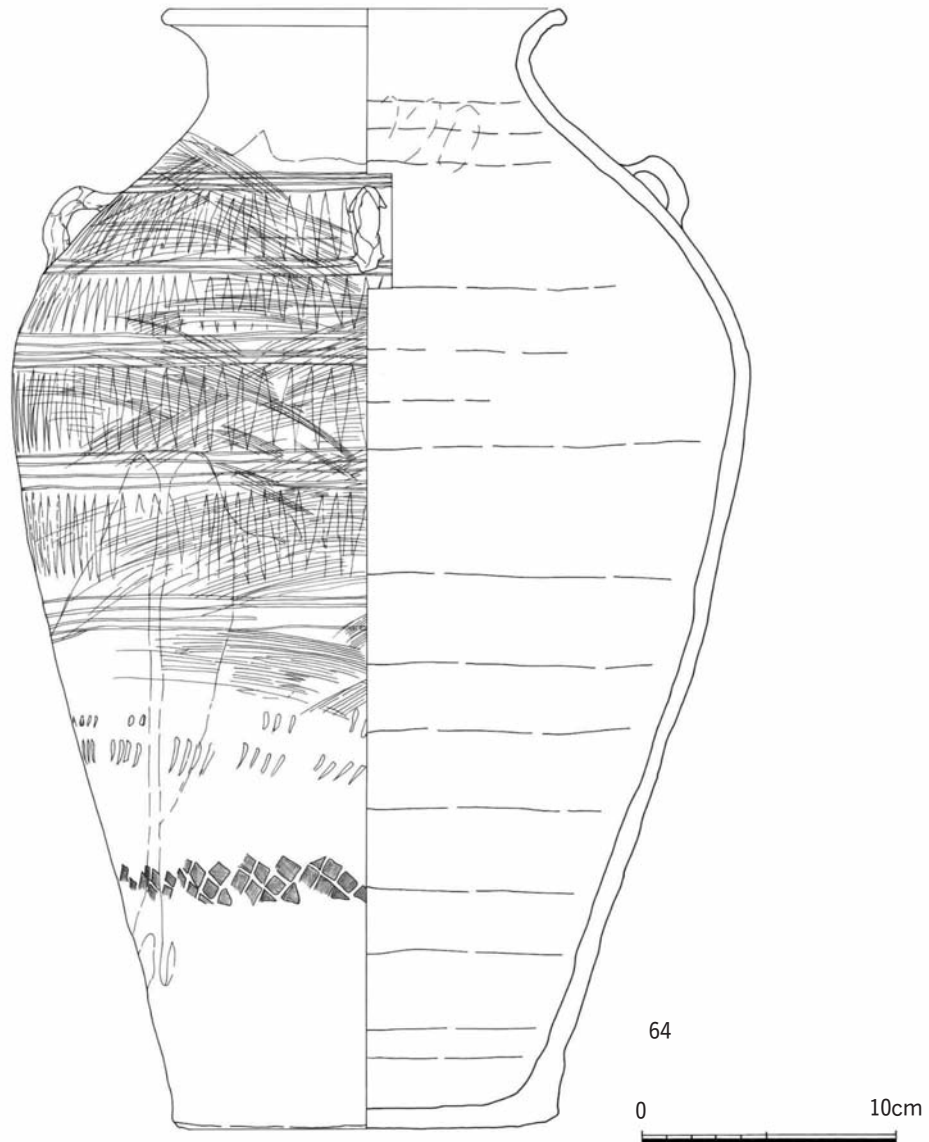


図28 SK29出土遺物 (1/3)

SK29 (図27・28、写真図版 8-7・8、9-1~8)

調査区中央やや西よりの A-3 区に位置する。SD13の中央から南壁にかけて隅丸の長方形にちかい楕円形の掘り込みが確認された。SD13の遺構検出面では遺構の切り込みは確認されなかった。SD13埋土の土層観察によっても溝の埋没後に切り込んだ痕跡は無かった。このことから SD13との間に新旧関係はなく、溝と同時期に掘られたものであろう。遺構の規模は長軸1.9m、短軸1.2m、溝上部から遺構底面までの深さは2.2mである。遺構の底面は中央付近がやや深くなっている。土坑は SD13の底面中央から南壁にかけて潜り込むように彫り込まれており、土坑の長軸は溝とほぼ平行である。土坑底面の東南側が10cmほど深くなっており、その部分から壺がほぼ水平に寝かされた状態で出土した。壺は口縁部から胴部にかけて割れていたが、破片は壺の内部に落ち込んでおり、復元の結果ほぼ完形となった。壺は耳が縦に4カ所に付いた四耳壺である。壺の内部には土が流れこんでいたが、壺内部からの出土品は無かった。また、壺内部の土も持ち帰り洗浄したが遺物は出土しなかった。

64の壺は高さ44.0cm、口径15.4cm、胴部の最大径29.0cm、底部径15.2cmである。口縁部が2カ所欠けている。粉青沙器で輪積みによる成形で下部の方はたたきが入る。器形は若干いびつである。器底は平底で砂目が4カ所見られる。象嵌が5列入り、その間に鋸歯状文が入る。肩部から胴部にかけて刷毛目を残している。朝鮮製で、年代はおよそ15世紀後半と思われる。

この粉青沙器四耳壺は何らかの祭祀に使われ埋納された可能性も考えられる。このような器形の壺は、朝鮮王朝時代には上層階級が胎衣壺として使用した例が多いようである。たいへん貴重な壺であることから溝に廃棄されたとは到底考えられない。また、遺構の状況からして意図的にそこに置いたことが推察される。これらのことから周辺にこのような貴重な壺を所有することのできる有力者の存在が考えられる。西浦遺跡の調査では建物跡は確認されなかったが、溝が東西南北に規格性を持ち配されている状況から調査区周辺は屋敷地として整備されていたと考えられる。隣接する地域に居住していたことが想像できる。

粉青沙器四耳壺のような特殊な遺物がどのようなルートで入ってきたのか興味深い。

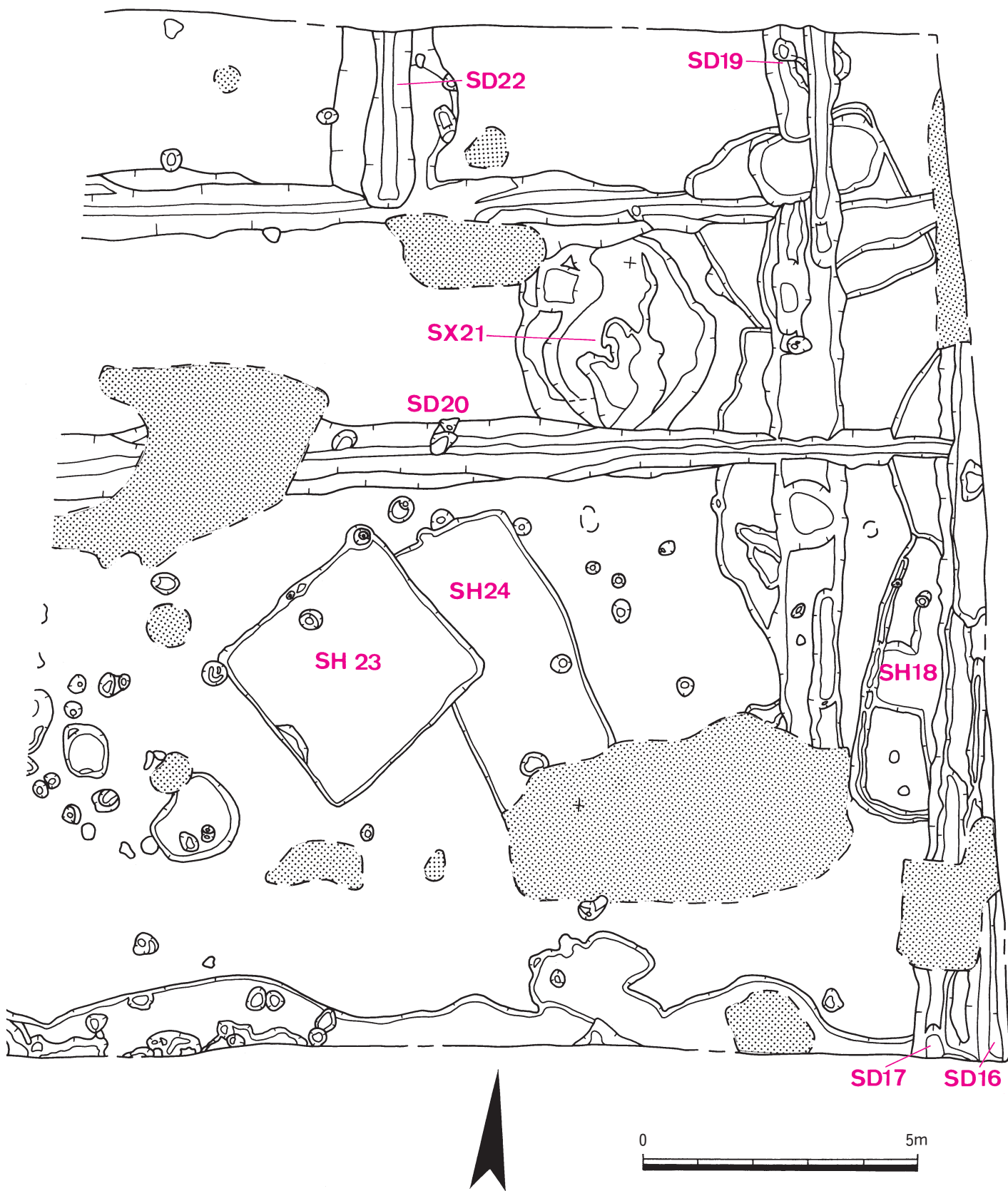


図29 調査区東端部 (1/100)

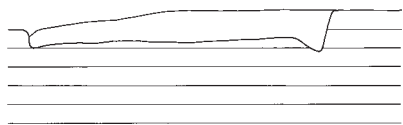
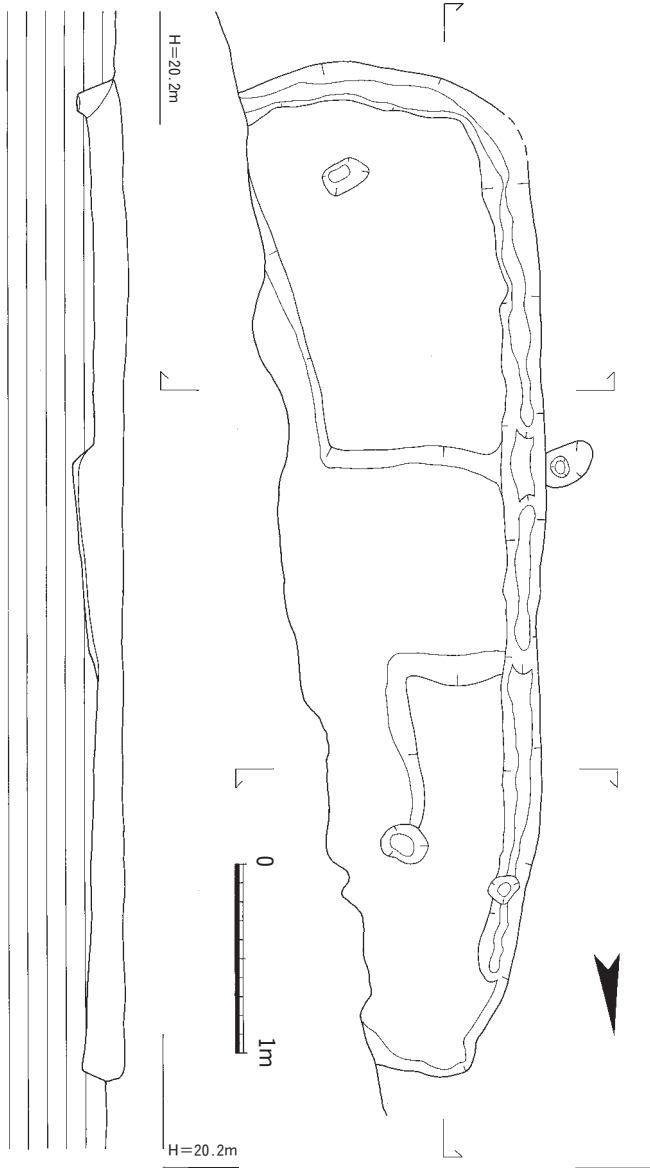
(3) 竪穴住居跡

SH18 (図30、写真図版7-2・3)

調査区東端のB-3区に位置する。SD17と重複しそれよりも古い。SD17に削平されていることと東側調査区外にかかるため全体の規模は不明である。南西角は攪乱坑に接する。西辺5.27m、南北辺2.44m以上で、北西角と南西角に削り出しのベッド状遺構が設けられており、床面からの高さはいずれも0.15m程度である。壁の高さは0.15~0.26mである。西壁から南壁にかけて幅0.15~0.2mの溝が回る。小穴が見られたが、いずれも径0.2m深さ0.16m程度が3カ所あるが柱穴と特定できるものはなかった。遺物は土師器と弥生土器の小破片が僅かに出土した。図示できるものはなかった。弥生時代後期~古墳時代前期初頭頃の住居跡と考えられる。

SH23 (図31・32、写真図版4-2、8-3、13-3~5)

調査区東端近くのB-3区に位置する。SH24と重複しそれよりも新しい。平面形は1辺が3.67mほどの正方形である。床面はほとんど平坦で残存壁高は0.30mである。北角に直径0.45m×0.39m、深さ0.43mの小穴を確認した。また、西南辺の中央から0.4m離れたところに直径約0.40m、深さ0.28mの小穴が確認された。支柱穴であろうか。南西壁のほぼ中央には幅0.2m、長さ0.8mの屋内土坑がある。遺物は西角近くの床上に土師器がまとまっており、65の甑が一個体分出土した。土師器の甕、高杯の脚、須恵器の杯を図示した。その他は土師器の破片が出土した。



☒30 SH18 (1/40)

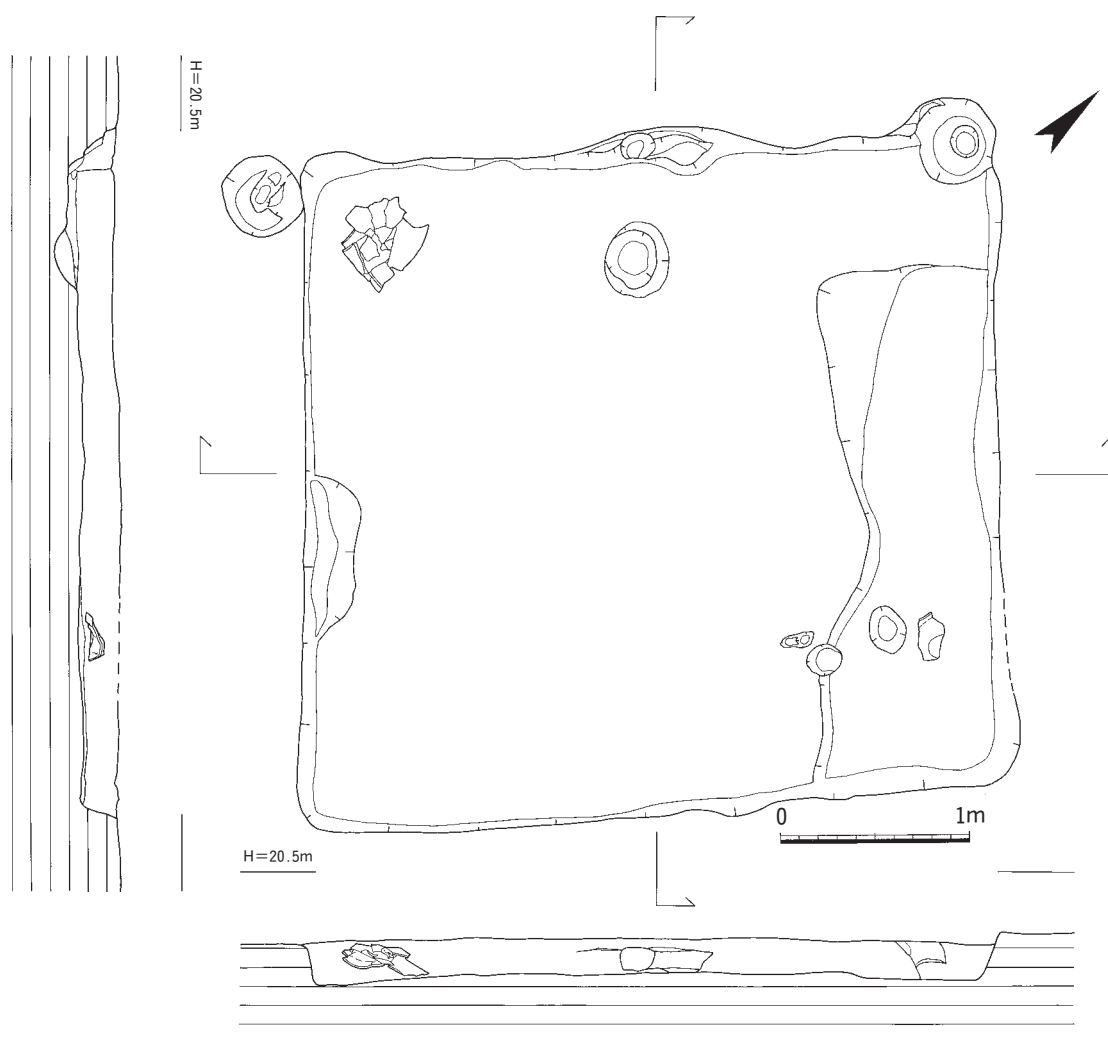


図31 SH23 (1/40)

SH24 (図33・34・35、写真図版4-2、8-5・6、13-6~13)

調査区東端近くのB-3区に位置する。SH23と重複し切られる。南壁は攪乱により消失するため全体の規模は不明である。住居のプランは長辺5.15m以上、短辺が2.50mの長方形である。深さは0.22m程度で床面はほとんど平坦である。東壁中央付近はやや外へ膨らむ。東辺の中央付近に直径0.35m、深さ0.15mの小穴を確認した。南端で一部攪乱を受け消失されている小穴を確認した。直径0.48m×0.33m以上、深さ0.13mである。東壁際の南端近くの床面に遺物がまとまって出土した。また、近くからは炭化物もまとまって出土した。北壁付近にはわずかに床面が赤く焼けており炉跡かカマドの痕跡であろう。

遺物は土師器の甕、鉢などが出土した。近世の陶磁器が3点出土したが混入であろう。

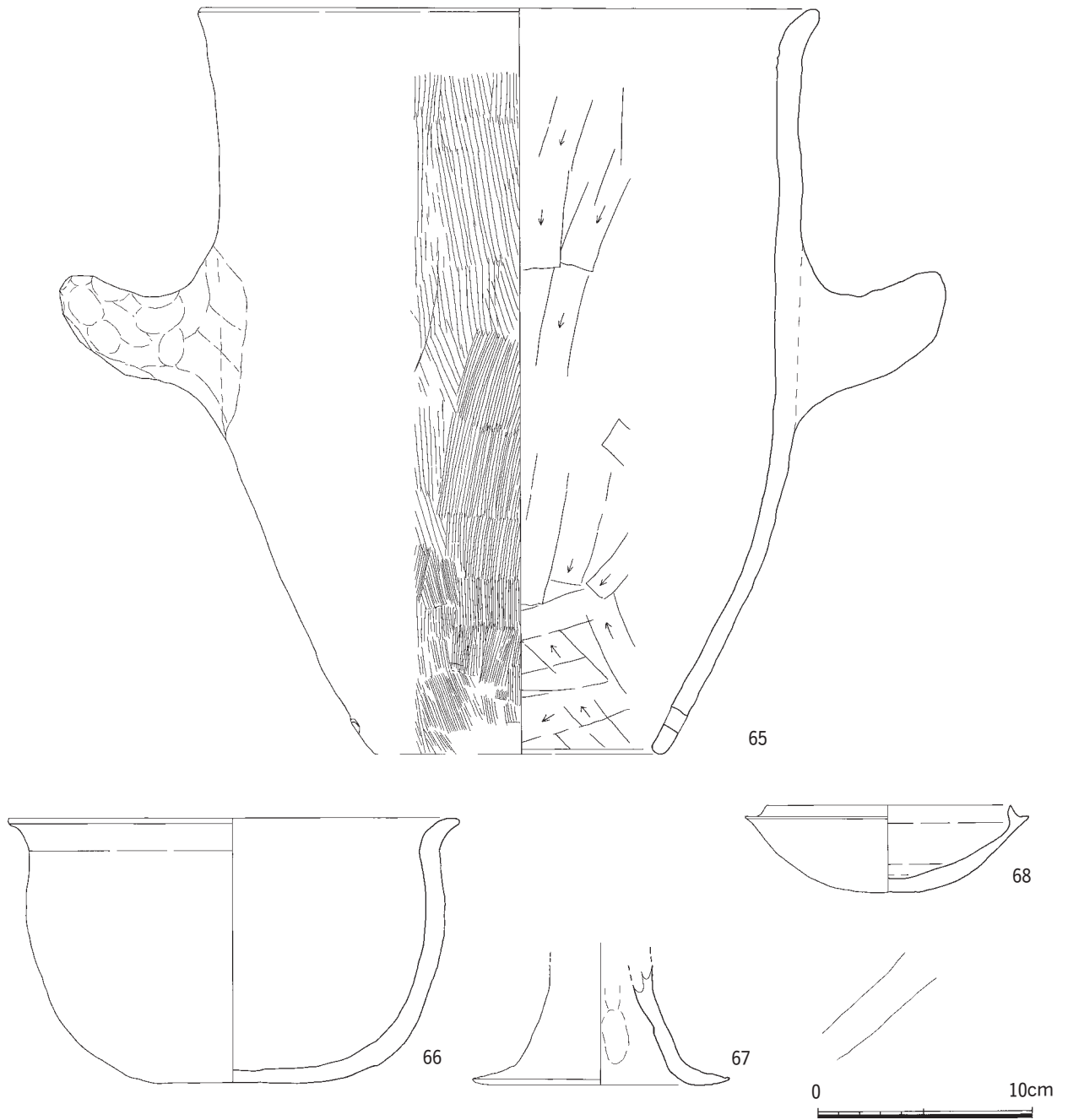


图32 SH23出土遺物 (1/3)

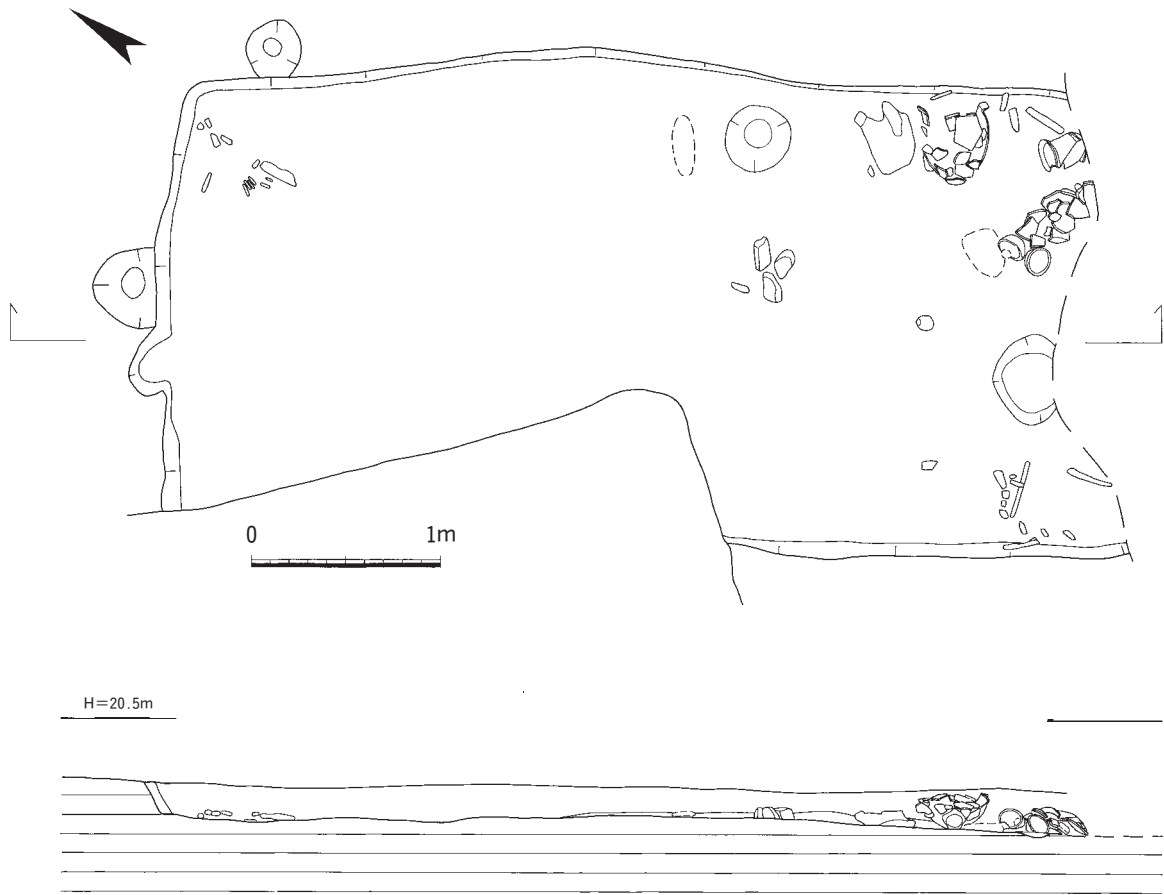


図33 SH24 (1/40)

SH30 (図36)

調査区東端の A・B-3 区に位置する SD14、SD19 と重複し、いずれの溝よりも古い。二つの溝が SH30 のほぼ中央で交差する。また攪乱により大きく削られており残存状況は極めて悪い。床面は西壁側に少し残る。長軸が 3.9m、短軸が 3.6m のやや長方形のプランである。遺構検出作業時には非常にわかりにくい遺構であったが、四方の角部分が全て確認できたことと壁の痕跡がわずかに残っていたことから住居跡として遺構番号を付した。

遺物は土師器の破片が少し出土したほか、混入と見られる陶磁器類の小片がわずかに出土した。二つの溝と重複したうえ更に攪乱を受けているため住居跡に伴う遺物と判断できるものは無かった。

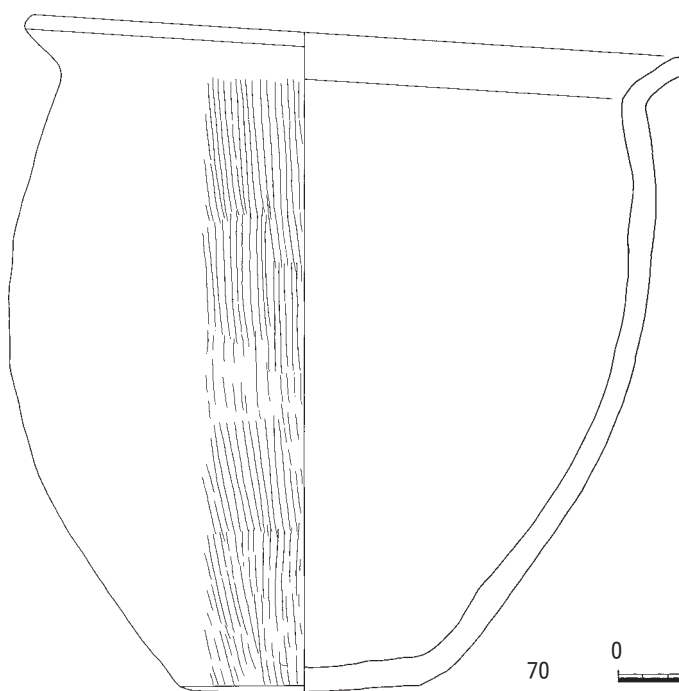
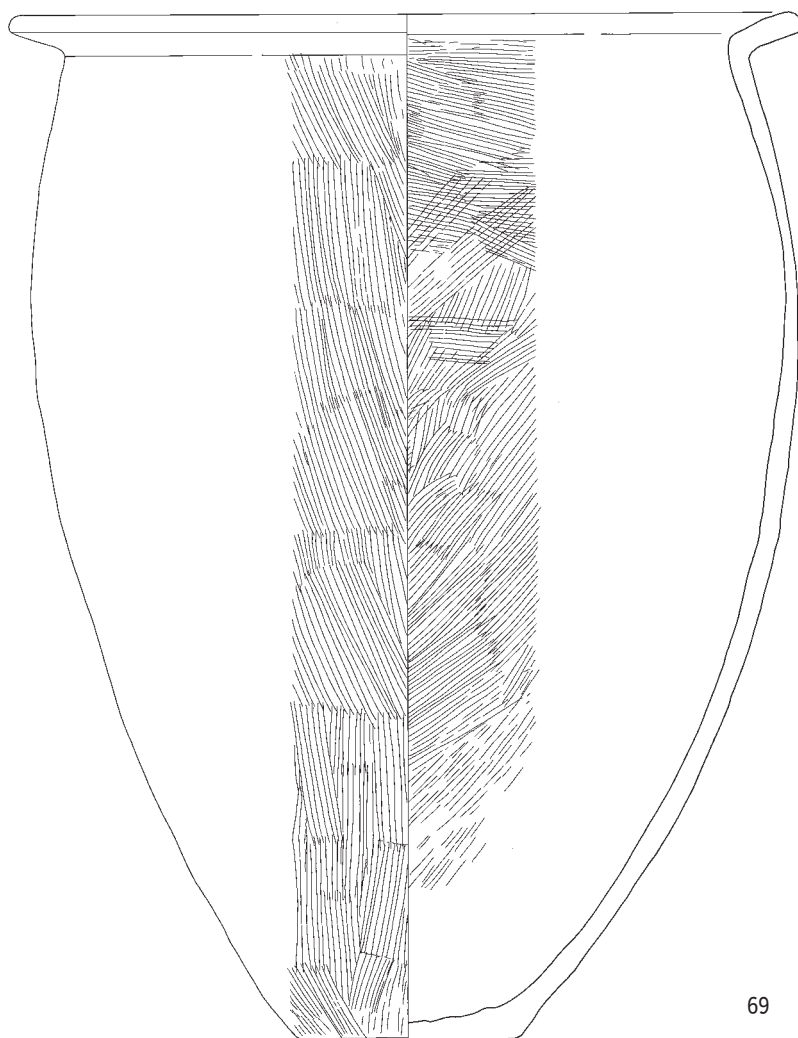


图34 SH24出土遺物(1) (1/3)

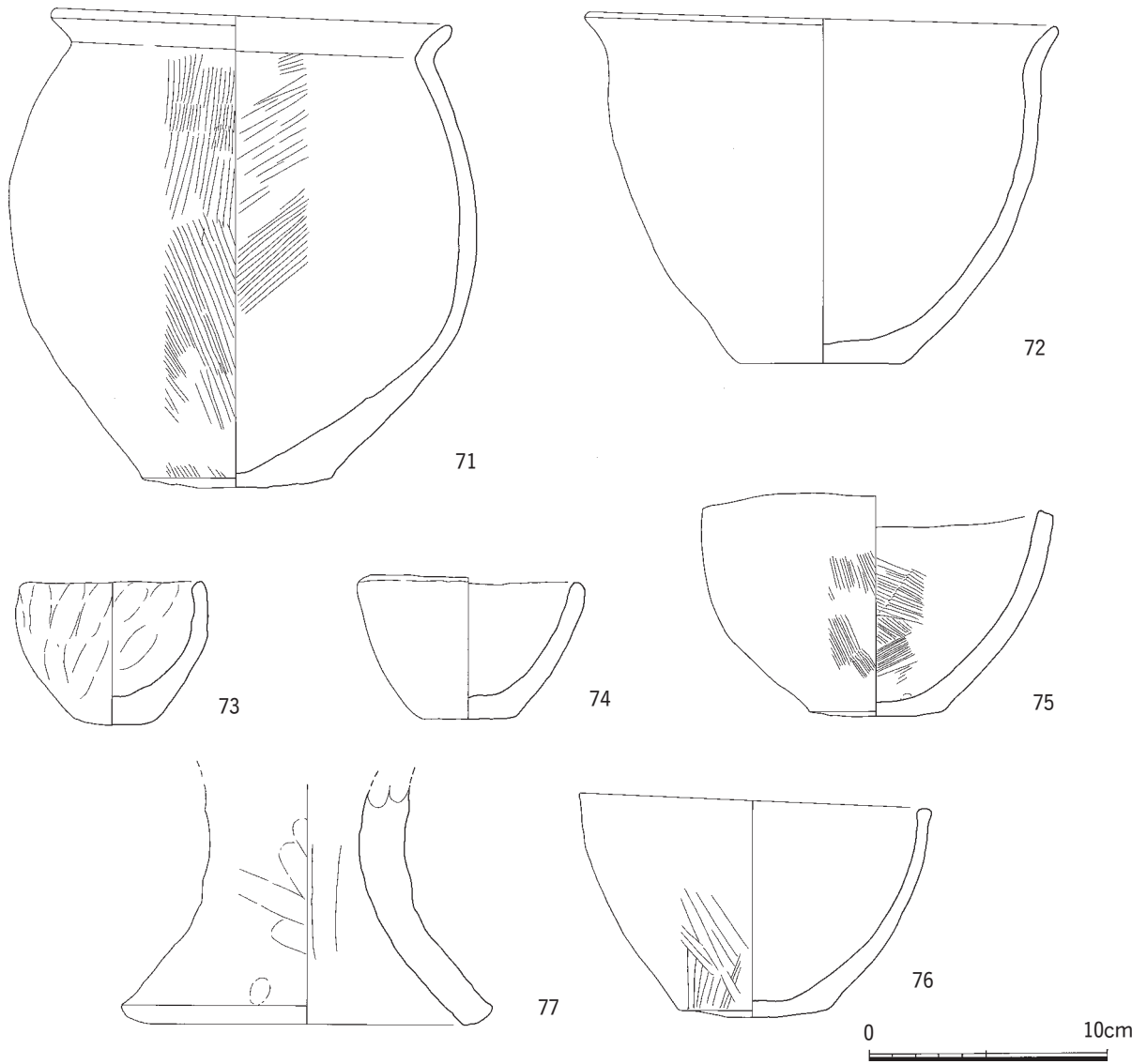


图35 SH24出土遺物(2) (1/3)

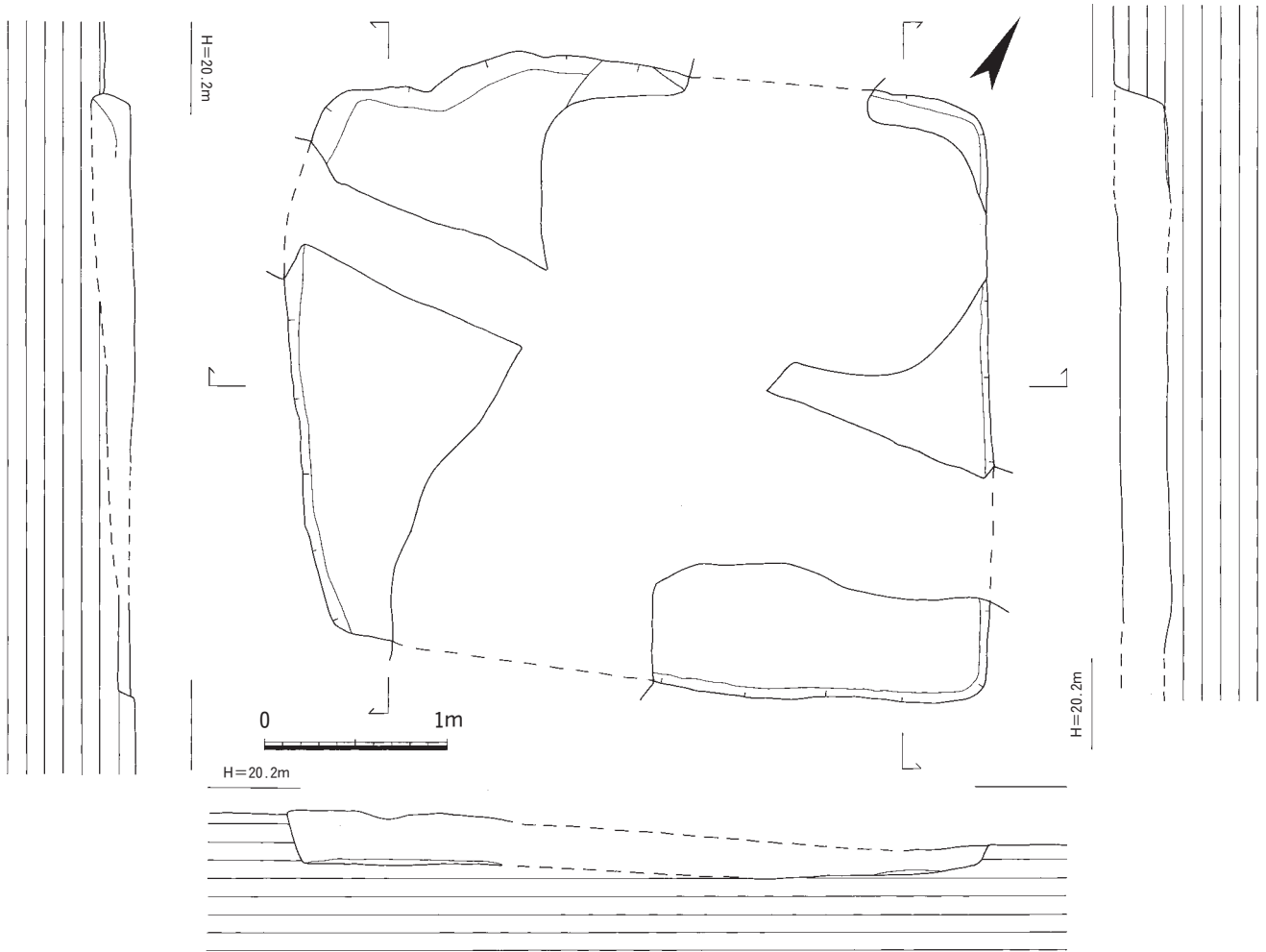


図36 SH30 (1/40)

(4) その他の遺構

SX01 (図37、写真図版5-1)

調査区の南側張り出し部分の南東角C-2区に位置する。SD05及びSD10と重複して新しい。SD02の真上に位置する。長辺5.70m以上、短辺5.17m以上の規模をもつ遺構で、深さ0.94mである。確認されたのは北西の角側で、調査区外へと広がるため遺構の全容は不明である。遺構検出面は大きく攪乱されていた。肥前染付の碗、陶器の小碗、陶磁器類の破片が出土した。

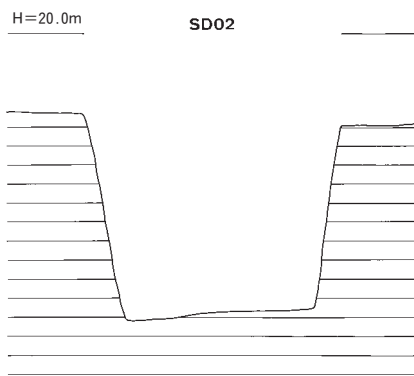
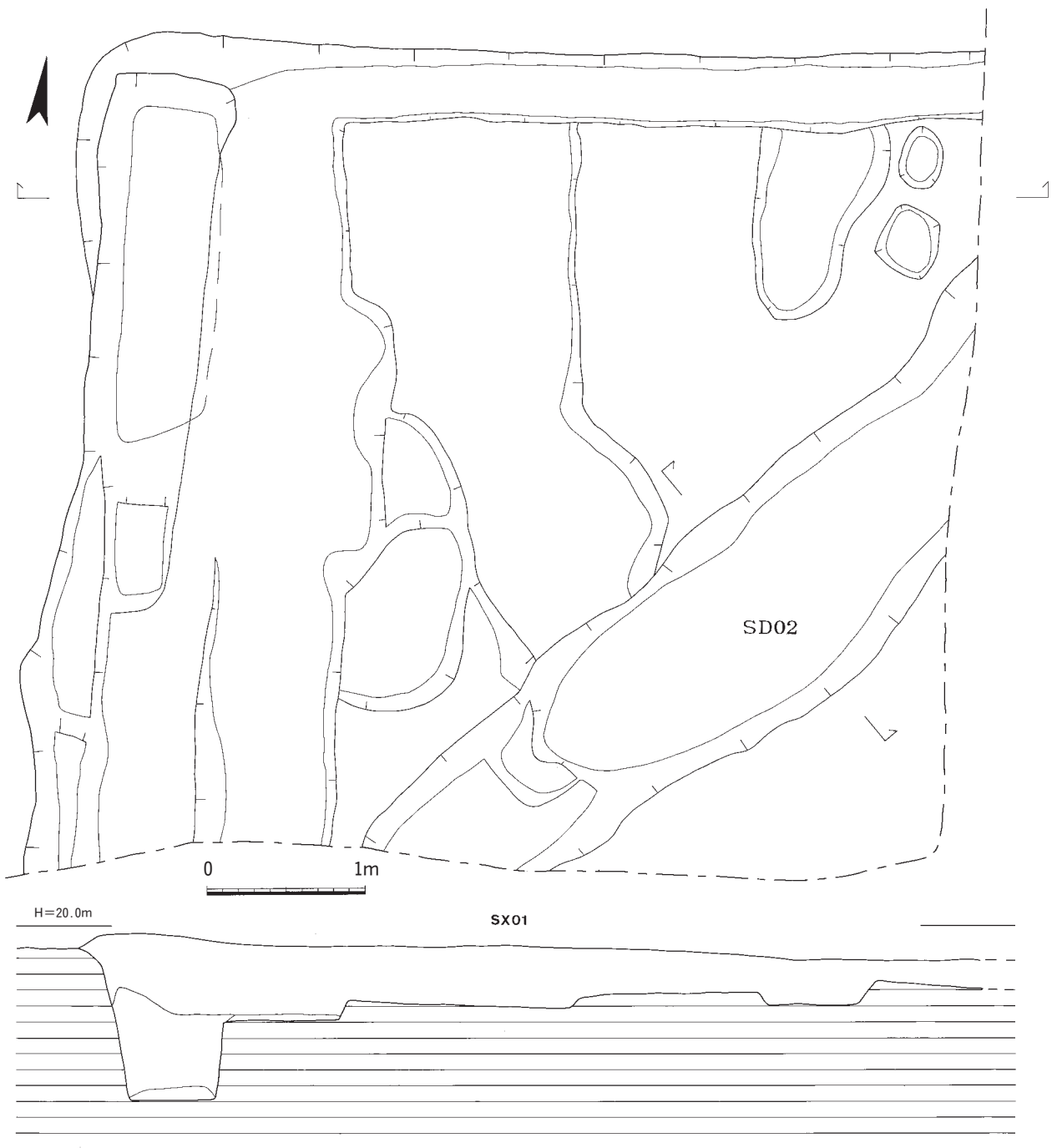


图37 SX01 · SD02 (1/40)

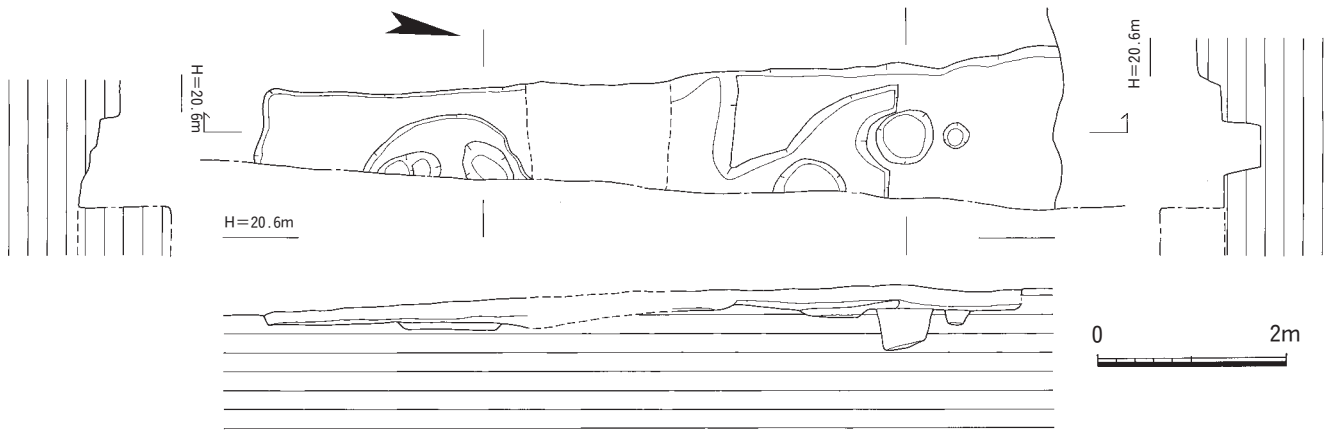


図38 SX03 (1/80)

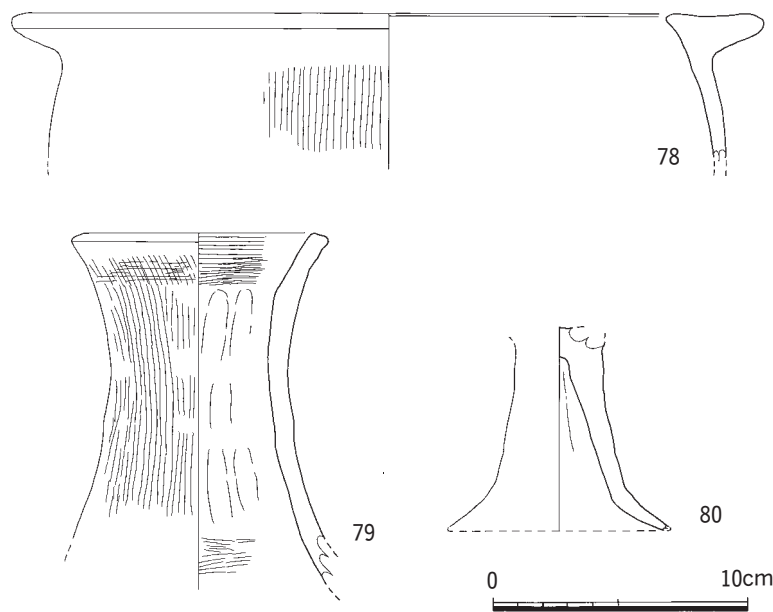


図39 SX03出土遺物 (1/3)

SX03 (図38・39、写真図版11-5)

調査区の南側張り出し部分の東側 C-2 区に位置する。SD12と重複するが、遺構検出面が攪乱されており新旧関係は明確でなかったが SD12より新しいと考える。確認されたのは南北9.5m、東西1.2m で遺構は調査区の東側へと広がる。深さは約0.2m である。遺構の残存状況も悪く遺構検出面では大きく攪乱を受けていたため遺構の性格については判断し兼ねる。不明遺構として遺構番号を付した。土師器の破片が数点と、陶磁器類の小片がわずかに出土した。

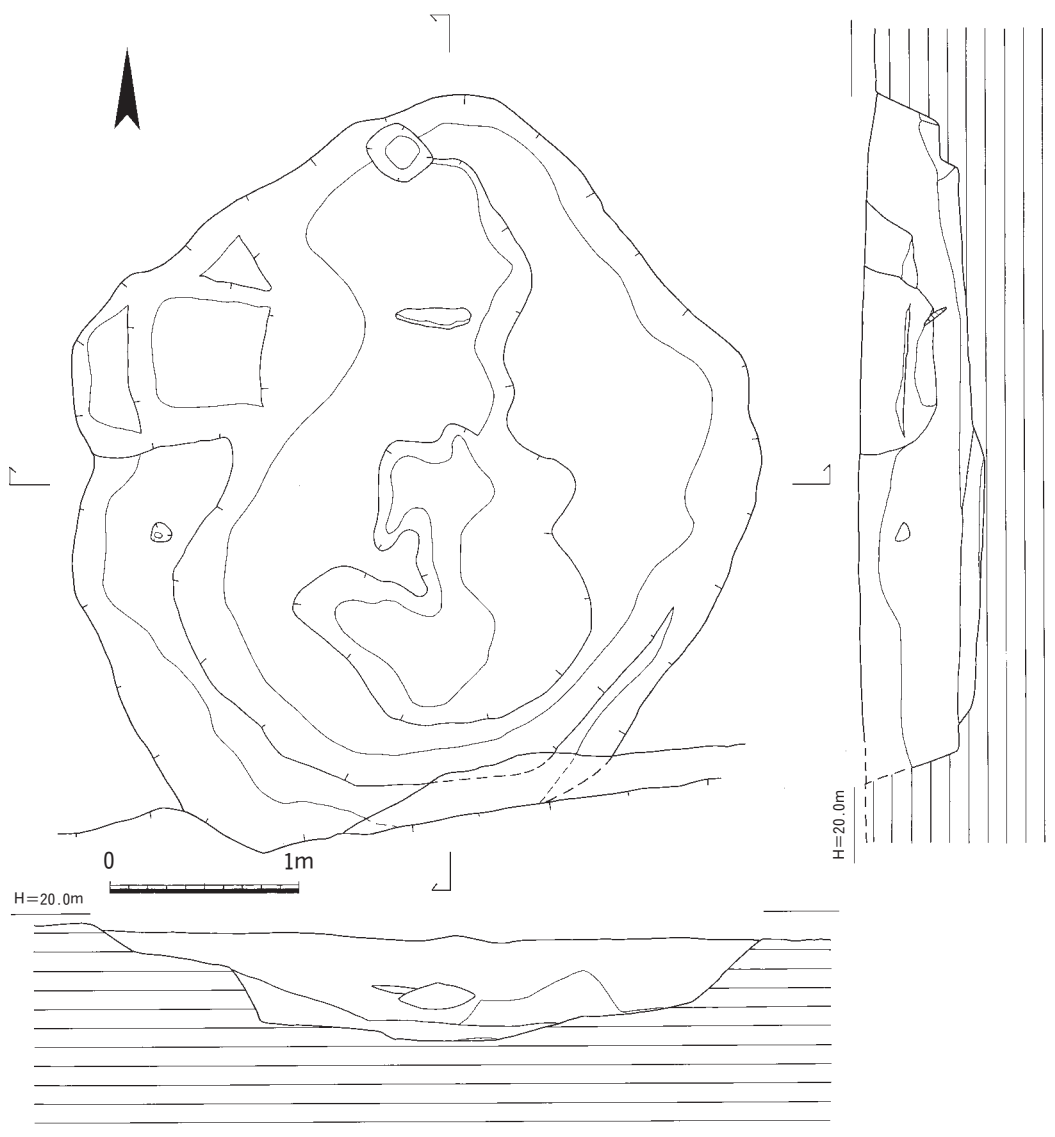


図40 SX21 (1/40)

SX21 (図40・41・42、写真図版 8-2・4、12-7~11、13-1・2)

調査区東端のB-3区に位置する円形の遺構である。SD14とSD20に挟まれる。北側はSD14とわずかに接する。南側はSD20と重複し切られる。長軸3.59m、短軸3.55mの不整形で深さは0.58mである。埋土は攪乱されており出土した遺物も時期幅が広い。弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器類が出土した。88は肥前の壺か甕であろう。胴部から底部に欠けて出土した。陶磁器類では肥前系唐津、陶器の袋物や大皿の小破片が出土した。

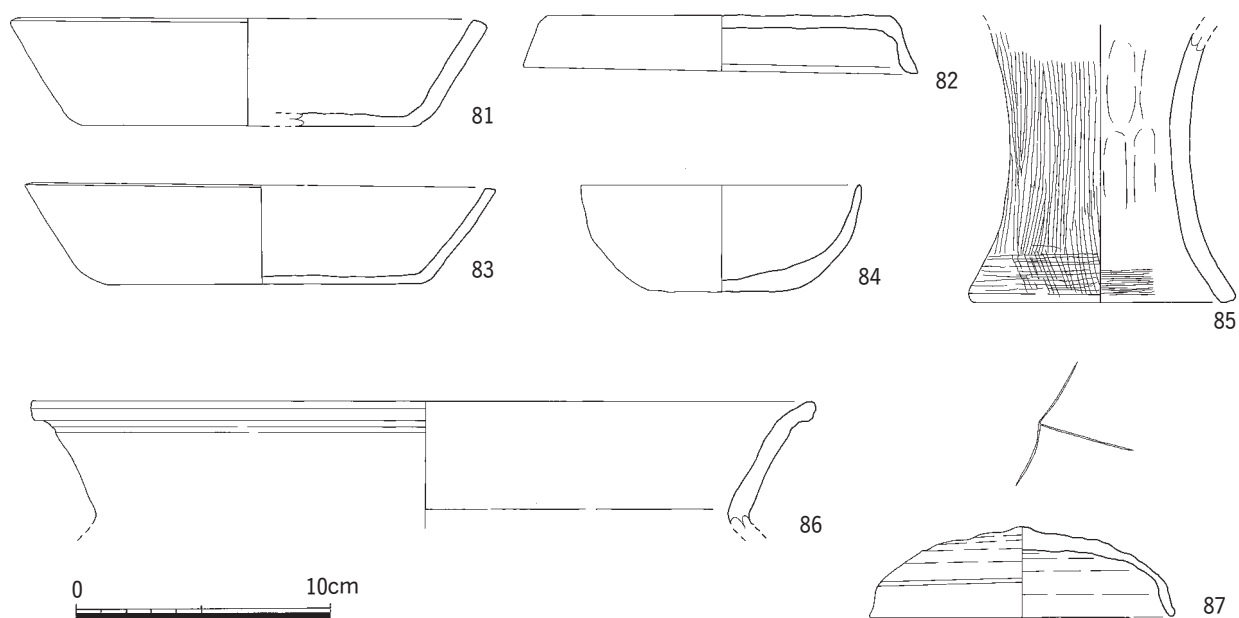


图41 SX21出土遺物(1) (1/3)

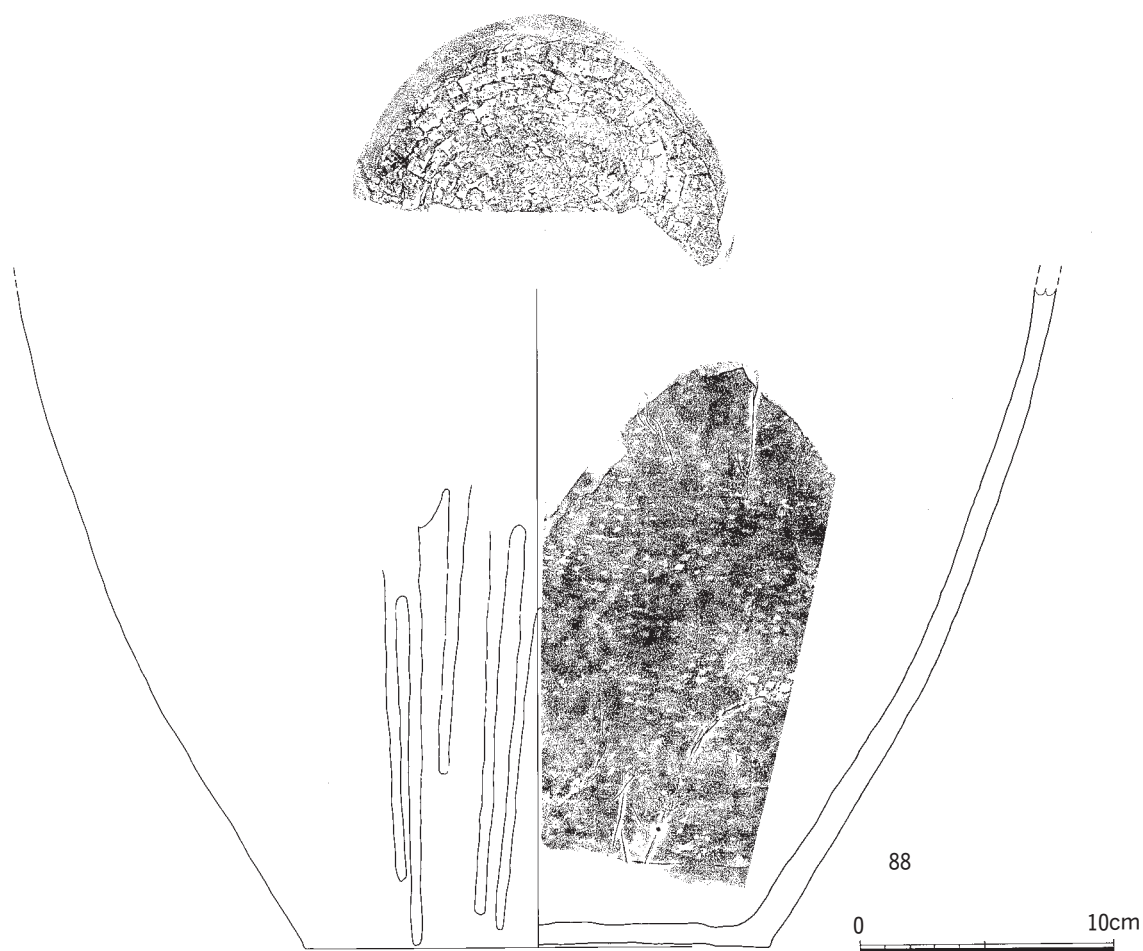


图42 SX21出土遺物(2) (1/3)

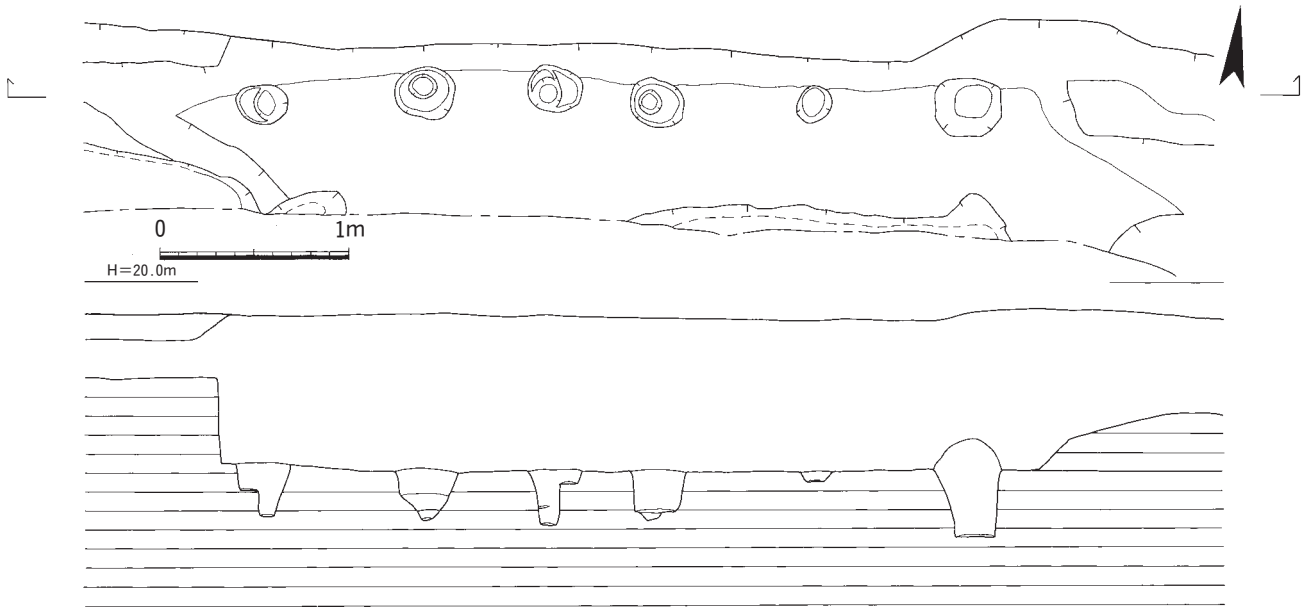


図43 SX31 (1/40)

SX31 (図43)

調査区中央西よりのB-1・2区に位置する。SD12の北壁側に重複している。遺構の南側は調査区外南側へと広がるため全容は不明である。確認できた遺構の規模は5 m×1 mで北壁側に直径0.2~0.3mほどの小穴が一行に並ぶ。遺構の底面はほとんど平坦である。北壁は垂直に近く立ち上がる。SD02の埋没後に掘り込んだのではなく、SD12の北壁側に切り込んで掘られている。調査区の端にあたり確認できた範囲も狭小であったことから遺構の性格を把握することはできなかった。そのため不明遺構として番号を付した。一部ゴミ穴によって攪乱を受けていた。ガラス片が大量に廃棄してあった。遺物は土師器の破片と陶磁器類の小片は少し出土した。

5. まとめ

西浦遺跡が所在する一帯は鳥栖市の中心部であり住宅、商店が密集する地域であることから過去の本格的な発掘調査調査例は少なく、隣接する小原遺跡と京町遺跡の2件のみであった。今回の調査では弥生時代から古墳時代、中世、近世と幅広い時代の遺構・遺物が確認された。

特に遺構では中世の屋敷地を示す区画溝が発見されたことは意義がある。過去の調査でも中世溝は確認されており西浦遺跡の調査で中世集落の広がりが明らかになった。また、遺物では朝鮮製の青磁四耳壺が区画溝から出土したほか、中国景德鎮や龍泉窯の青磁、白磁等が出土した。それに加えて国産の近世陶磁器類がまとまって出土したのも貴重な資料と言える。

図44では区画溝を明確に表すために、他の遺構を省き溝だけを表してみた。SD12とSD02については時期を中世とは異にするが、他の溝については規格性を持ち整然としており、屋敷地を区切る溝と通路もしくは道路部分であると考えられる。溝に挟まれる通路と考えられる部分は、東西方向に延びる溝と溝の幅が3.8m～4.2mである。SD14から南へ延びるSD13とSD25の間では約4.8mとなる。この通路は調査時の土層観察や遺構検出の状況からすると、砂や粘土等で交互に丁寧に突き固められた痕跡が見られなかったことから、本格的な道路であったとは考えにくい。SD19、SD20、SD25で画される部分を一つの区画と考えた場合およそ22mほどとなる。西側のSD13、SD15の部分では25m程度と若干広くなる。

図45では隣接する小原遺跡と京町遺跡で確認された中世後期の溝を図示した。小原遺跡の調査で確認された5号溝と7号溝は平行に位置しており、区画溝の一部である可能性は高い。確認された溝の全長は12mほどで溝は調査区外の西へと延伸している。地形的に東側が限られるため集落の東端近くであろうか。両溝の間は2.8m～3.0mで、西浦遺跡で確認されたSD14とSD20の間よりも若干狭くなっている。両調査地点は約100m離れており、西浦遺跡で確認された区画溝が小原遺跡で確認されたものと直接繋がるものと断定するにはいたらないが、地図上で復元する限り西浦遺跡から小原遺跡一帯にかけて区画が広がる可能性は捨てがたい。京町遺跡でも中世後期の集落跡が確認されており、集落は東へも広がることが予想される。しかし、地形を考慮した場合、集落は東方向へ広がるものの連続して広がらず一旦途切れるものと考えられる。

今回の調査で確認した遺構を町屋の一部と断定することは現状では困難であるが、京町遺跡、小原遺跡の調査結果を含めて考えた場合可能性は高いと考える。

西浦遺跡周辺の集落の廃絶時期・原因について調査の状況から把握することは難しい。鳥栖の中世については鳥栖地方の中世の文献は少なく、この時期の集落については不明な部分が多い。「太宰府安楽寺文書」「河上神社文書」など外部資料に残る断片的な資料に頼らざるをえない。しかしながら、勝尾城下町遺跡や京町遺跡、小原遺跡、藤木遺跡などここ数年の発掘調査でも中世の集落が存在することは明らかであり、今回の調査で中世集落の様相を一部ではあるが掴めたことは非常に興味深く意義が大きい。

西浦遺跡の調査で出土した遺物の中で特に注目されるのは、朝鮮製粉青沙器四耳壺であろう。この粉青沙器四耳壺は、現段階で同様な器形の出土例を他に見ない貴重な資料と言える。生産地については不明であるが、年代は15世紀後半と考えられる。

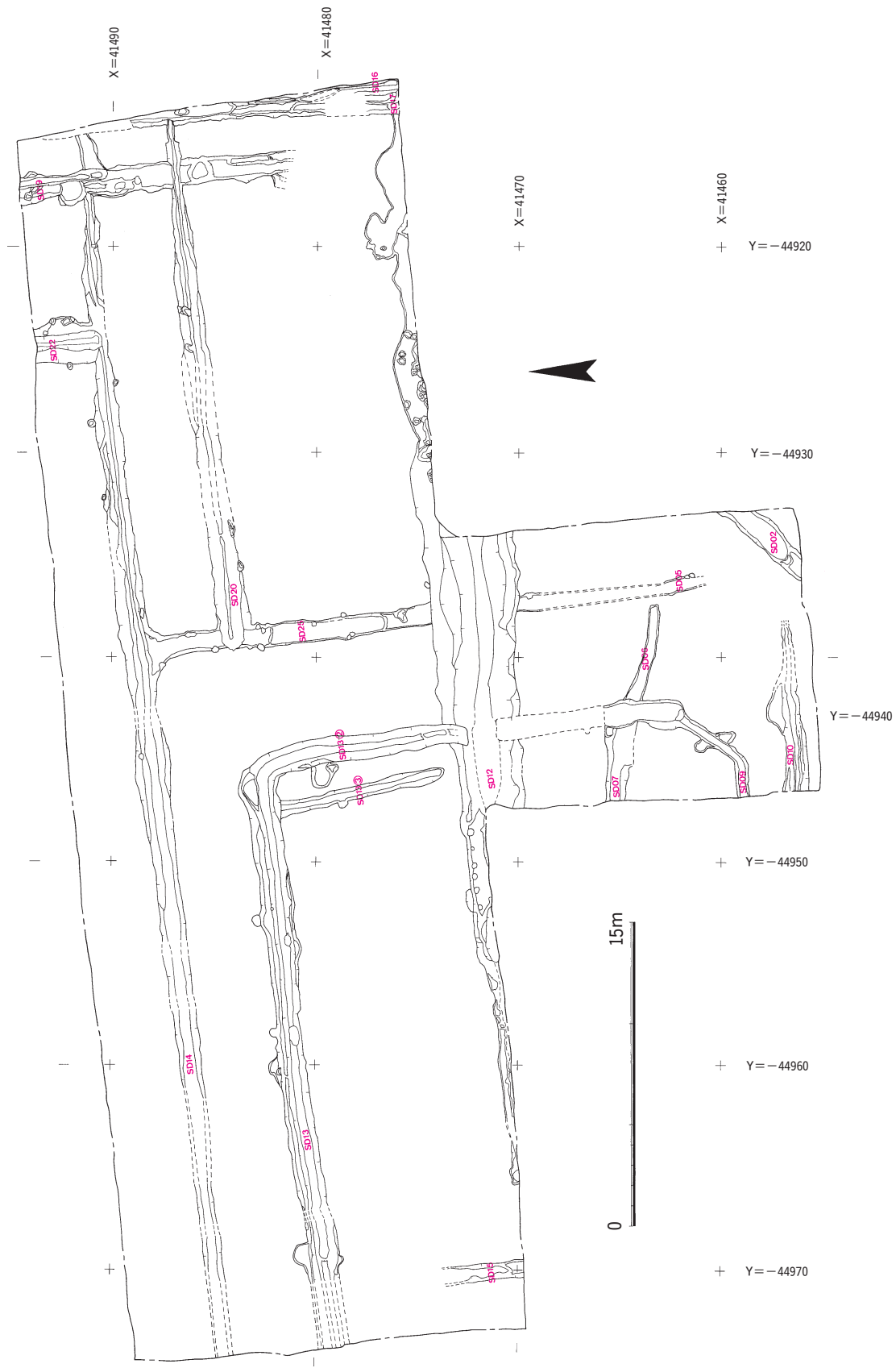


図44 溝遺構配置図 (1/300)



図45 中世溝位置図 (1/2,000)

朝鮮半島では、14世紀末に高麗時代から李氏朝鮮時代になるとともに焼き物も大きくその様相を変えていく。大きくは高麗時代の青磁から李氏朝鮮時代の粉青沙器、白磁へということが言える。粉青沙器は日本では三島、刷毛目と総称されてきた。ただし、粉青沙器は15世紀から16世紀にかけての李朝時代の前期に盛行し白磁とともに陶磁生産の双璧をなすが、16世紀末の豊臣秀吉による朝鮮侵略のころには白磁に取って代われ、ほとんど姿を消している。粉青沙器は技法的にみた場合、高麗青磁の象嵌技法を受け継いだやきものといえる。この時代には朝鮮のみならず、中国でも主流が青磁から白磁へと大きく移行している。粉青沙器の基調をなす色は白であり装飾法も基本的には素地を白におくことで共通している。粉青沙器は白磁の完成とともに衰退していく。つまり、粉青沙器は青磁から白磁へと移行する間の過渡的な性格を持つものとみることができる。

白磁が普及していった背景には清廉潔白の象徴として「白」を尊ぶ儒教思想が広まったことも要因の一つと言えよう。それは、朝鮮王朝が儒教を国教の地位まで高め、儒教に基づく祭器の需要が増大したことによるものであろう。

西浦遺跡で出土した、朝鮮製粉青沙器四耳壺に装飾技法の特徴から名称を付けるとすれば、「粉青沙器象

嵌鋸齒状文四耳壺」とでも言えようか。

このたびの西浦遺跡の調査では、この他に17～18世紀の国産陶磁器類が破片ではあるが多く出土した。ほとんどが小破片であるため復元できたものはわずかであった。近世の遺構では明確に検出されたのは溝のみであり、建物跡等の確認はできなかったが長崎街道が近くを通っており、また多くの記録からも近世に集落が存在したことは間違いない。今回の調査で得られた、肥前染付けを初めとする陶磁器類は貴重な資料と言える。今後、これら明らかになってきた中、近世の資料を含め総合的に検討する必要があると思われる。

参考文献

- 「小原遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第9集（1981）
- 「京町遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第54集（1997）
- 「焼石遺跡Ⅰ」江北町文化財調査報告書第3集（1997）
- 「焼石遺跡Ⅱ・馬場北遺跡Ⅰ・山中遺跡Ⅰ」江北町文化財調査報告書第4集
- 「武雄市内古窯跡群発掘調査報告書Ⅶ・萱ノ谷窯跡」武雄市文化財調査報告書第40集
- 「箱崎2」―箱崎遺跡群第3次調査の報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第262集（1991）
- 「箱崎3」―箱崎遺跡群第5次調査の報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第273集（1992）
- 「箱崎4」―箱崎遺跡群第6次・7次調査報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第459集（1996）
- 「箱崎6」―箱崎遺跡群第10次調査の報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第551集（1998）
- 「箱崎7」―箱崎遺跡群第8次調査の報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第591集（1999）
- 「箱崎8」―箱崎遺跡群第11次・13次調査報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第592集（1999）
- 「箱崎10」―箱崎遺跡群第18次・第19次調査報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第664集（2001）
- 「箱崎11」―箱崎遺跡群第16次調査報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第703集（2002）
- 「箱崎12」―箱崎遺跡群第17次・第23次調査報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第704集（2002）
- 「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）」福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集（1989）
- 『近世の陶磁器』発掘調査速報展図録 塩田町教育委員会（2001）
- 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 大橋康二 ニューサイエンス社（1989）
- 『陶磁』日本史小百科 佐々木達夫 東京堂出版（1991）
- 『国内出土の肥前陶磁』展図録 九州陶磁文化館（1984）
- 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会（2000）
- 『東洋陶磁史』「高麗から朝鮮へ十四・十五世紀の諸相」片山まび 東洋陶磁学会（2002）
- 『やきもの事典』平凡社（1995）
- 『陶磁器、海をゆく』佐々木達夫 増進会出版社（1999）
- 『世界やきもの史』長谷部楽爾 監修 株式会社美術出版社（1999）

表2 出土遺物一覧表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	法量	形態・技法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
図6	1	SD02	瓦質土器	茶釜	口径 (25.0)	口縁部一部残存。	小砂粒	
					器高 <4.5>	口縁部、外面胴上半部ヨコナデ。他ハケ。	良好	
	2	SD02	土師器	杯	口径 (11.6)	口縁から底部にかけ1/4残存。	3 mm 以下の砂粒	
					器高 <3.4>	全面ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	良好	
	3	SD02	土師器	茶釜	器高 <5.0>	一部残存。	細砂粒	
						内面ハケ。一部指調整あり。外面ナデ。	良好	
	4	SD02	土師器	香炉	口径 (13.0)	口縁から底部にかけ1/4残存。高台付。	小砂粒	
					器高 6.7	口縁部ヨコナデ。内面ハケ。底部内面ナデ。外面ナデ。ハケわずかに残る。	良好	
図8	16	SD07	土師器	鉢	口径 (37.6)	口縁周辺一部残存。	小砂粒 雲母含む	
					器高 <6.0>	口縁部ヨコナデ。内面ハケ。外面指調整。	良好	
図9	17	SD09	土師器	杯	口径 (11.6)	口縁1/6残存。	細砂粒 雲母含む	
					器高 2.9	全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	良好	
	18	SD09	土師器	杯	口径 (7.6)	口縁一部、底部付近5/6残存。	微砂粒	
					器高 1.9	全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	良好	
	19	SD09	土師器	杯	口径 6.6	完形。	にぶい橙色	
					器高 2.0	全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	良好	
	20	SD10	土師器	杯	口径 (6.0)	全体の1/4残存。	微砂粒	
					器高 1.6	全面ヨコナデ。外面に沈線1条。底部外面糸切り痕。	良好	
図11	21	SD12	弥生	甕	口径 (34.4)	口縁から胴中央にかけ1/6残存。	小砂粒 雲母含む	カク乱
					器高 <16.6>	口縁部ヨコナデ。内面ハケ。外面ナデ。	良好	
図13	23	SD13	土師器	鍋	口径 (42.6)	口縁一部残存。	小砂粒	
					器高 <7.0>	全面ヨコナデ。外面指調整あり。外面煤付着。	良好	
	24	SD13			器高 <8.5>	一部残存。	微砂粒	
						全面ヨコナデ。外面三角凸帯2条貼付。	良好	
	25	SD13			器高 (11.4)	一部残存。	細砂粒	
						内面ナデ。外面三角凸帯2条貼付。工具ナデ。	良好	
	26	SD13	土師器	杯	口径 (10.4)	口縁一部、胴部1/4、底部残存。	細砂粒	
					器高 2.8	全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	良好	
図15	30	SD14		土鍋	口径 (47.0)	口縁一部残存。	小砂粒	
					器高 <6.0>	内面ハケ。外面ヨコナデ。一部指調整。	良好	
	31	SD14	土師器	鉢	口径 (34.4)	口縁一部残存。	小砂粒	
					器高 <6.9>	内面ハケ。外面ヨコナデ。一部ハケと指調整。	良好	
図16	32	SD17	土師器	播鉢	器高 <5.2>	底部から胴部にかけ1/3残存。	細砂粒	
					底部径 (11.5)	内面ナデ後播目。外面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	良好	
	33	SD17	土師器	鉢	口径 (17.8)	口縁一部残存。	細砂粒	
					器高 <5.6>	口縁部ナデ。他ハケ。外面一部指調整。	良好	
	34	SD17			器高 <8.7>	底部一部残存。	灰白色	
					底部径 (40.0)	底部内面ナデ。他ハケ。	小砂粒 雲母含む	
図17	38	SD19④	瓦質土器		口径 (49.0)	口縁一部残存。	細砂粒 雲母含む	
					器高 <5.8>	全面ナデ。	良好	
	39	SD19③	土師器		口径 (38.0)	口縁部一部残存。	にぶい褐色	
					器高 <5.0>	全面ナデ。	良好	
							褐色	

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構	種類	器種	法量		形態・技法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
図17	40	SD19②	土師器	甕	口径	(24.4)	「く」字状口縁。 口縁部から内面にかけハケ。外面ナデ。	小砂粒 雲母含む	
					器高	<6.8>		良好	
								橙色	
	41	SD19③	須恵器	杯身	受部径	(11.0)	1/4残存。 全面回転ヨコナデ。	微砂粒	
					器高	3.0		良好	
					底部径	(8.8)		赤褐色	
	42	SD19③	須恵器	杯身	受部径	(11.0)	受部一部、底部残存。 全面回転ヨコナデ。底部外面にヘラ記号	細砂粒	
					器高	2.6		良好	
								黄灰色	
	43	SD19	土師器	播鉢	器高	<5.0>	底部一部残存。 内面ナデ後播目。外面ナデ。	細砂粒	
					底部径	(12.0)		普通	
								赤褐色	
図18	49	SD20	土師器	湯釜	口径	24.4	口縁から胴部にかけて2/3残存。 口縁ヨコナデ。内面頸部ハケ後ナデ。胴部ハケ。 外面ナデ。胴部に押型文様あり。	小砂粒若干	
					器高	(15.0)		良好	
								にふい褐色	
	50	SD20	土師器	甕	口径	(14.8)	1/2残存。外反する「く」字状口縁。 口縁内面指ナデ。内面ケズリ。外面ナデ。	2 mm 以下の砂粒 粗砂粒若干	
					器高	13.6		良好	
					底部径	(7.2)		橙色	
	51	SD20	土師器	杯	口径	(10.0)	口縁1/5、底部1/4残存。 全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	小砂粒若干	
					器高	2.4		良好	
					底部径	(5.2)		にふい橙色	
	52	SD20	須恵器	杯身	口径	(10.4)	口縁部周辺一部残存。 全面ヨコナデ。	小砂粒、粗砂粒	
					器高	<2.2>			
								灰色	
図24	54	SP26	土師器	杯	口径	12.3	口縁1/2欠損。 全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	細砂粒	
					器高	3.0		良好	
					底部径	4.8		にふい黄橙色	
	55	SP26	土師器	杯	口径	11.5	口縁2/3、胴部1/4欠損。 全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	細砂粒	
					器高	3.0		良好	
					底部径	4.2		にふい橙色	
	56	SP26	土師器	杯	口径	8.7	口縁1/4欠損。 全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	細砂粒	
					器高	4.2		良好	
					底部径	3.2		にふい橙色	
	57	SP26	土師器	杯	口径	8.8	口縁一部欠損。 全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	細砂粒	
					器高	3.8		良好	
					底部径	3.7		にふい橙色	
	58	SP26	土師器	杯	口径	7.6	口縁1/3欠損。 全面ヨコナデ。底部外面板目痕。	小砂粒	
					器高	2.2		良好	
					底部径	3.7		にふい黄橙色	
	59	SP26	土師器	杯	口径	8.1	口縁一部欠損。 全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	細砂粒	
					器高	2.6		良好	
					底部径	3.0		浅黄橙色	
	60	SP26	土師器	皿	口径	6.5	完形。 全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	細砂粒	
					器高	1.7		良好	
					底部径	4.2		にふい黄橙色	
	61	SP26	土師器	皿	口径	6.6	口縁1/2欠損。 全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	細砂粒	
					器高	1.6		良好	
					底部径	4.4		にふい橙色	
	62	SP26	土師器	皿	口径	6.0	口縁一部欠損。 全面ヨコナデ。底部外面糸切り痕。	細砂粒	
					器高	1.5		良好	
					底部径	4.4		にふい橙色	
	63	SP26	土師器	高杯	口径	9.2	脚部欠損。 全面ナデ。体部に沈線5条。	2 mm 以下の砂粒若干	
					器高	<4.2>		良好	
								黄橙色	
図28	64	SK29	青磁	壺	口径	15.4	完形。 内面頸部指ナデ。他ナデ。外耳部指調整。 内外面とも釉塗り。	良好	
					器高	44.0		内面オリープ灰色	
					底部径	15.2		外面灰白オリープ灰色	
図32	65	SH23	土師器	甗	口径	29.0	口縁周辺一部欠損。口縁部ヨコナデ。内面ケズリ。 外面ハケ。取手指調整。底部ナデ。底部付近に穿孔あり。口縁より底部まで黒斑あり。	3 mm 以下の砂粒	
					器高	34.6		良好	
					底部径	13.6		にふい橙色	
	66	SH23	土師器	鉢	口径	(21.0)	底部1/2、口縁から胴部にかけて一部残存。 口縁部ヨコナデ。他ナデ。	小砂粒	
					器高	12.3		良好	
					底部径	(8.0)		にふい橙色	
	67	SH23	土師器	高杯	脚裾径	(12.0)	脚裾部1/3残存。 内面指調整。他ナデ。内面黒斑あり。外面丹塗りあり。	細砂粒	ベルト
					器高	<5.6>		普通	
								橙色	

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構	種類	器種	法量		形態・技法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
図32	68	SH23	土師器	杯	口径	11.3	口縁から受部にかけ1/3欠損。 全面回転ナデ。ヘラ記号あり。	小砂粒若干 良好 灰白色	カマド SXカケ瓦
					器高	4.0			
					底部径	3.0			
図34	69	SH24	弥生	甕	口径	31.0	口縁から胴部にかけて1/2欠損。「く」字状口縁。 口縁部ヨコナデ。内外面ともハケ。底部ナデ。 胴部外面煤付着。	小砂粒 良好 にふい橙色	
					器高	40.8			
					底部径	8.7			
	70	SH24	弥生	甕	口径	25.4	口縁周辺1/2欠損。「く」字状口縁。 口縁部ヨコナデ。内面ナデ。外面ハケ。胴部に黒斑あり。	小砂粒 良好 にふい黄橙色	
					器高	26.5			
					底部径	9.6			
図35	71	SH24	弥生	甕	口径	16.6	胴部一部欠損。「く」字状口縁。 口縁部ヨコナデ。内面胴上部ハケ。下部ナデ。 外面ハケ。外面に黒斑あり。	2 mm 以下の砂粒 良好 橙色	
					器高	20.0			
					底部径	8.0			
	72	SH24	弥生	鉢	口径	19.9	口縁3/4、胴部1/4欠損。直線的に短く外傾する口縁。 口縁部ヨコナデ。内面ナデ。底部内面指オサエ。外面ナデ。	小砂粒少量 良好 にふい橙色	
					器高	14.8			
					底部径	7.0			
	73	SH24	弥生	杯	口径	7.4	口縁部から胴部にかけて1/2欠損。 全面指ナデ。	小砂粒 良好 にふい橙色	
					器高	6.0			
					底部径	3.3			
	74	SH24	弥生	杯	口径	9.4	完形。 全面ナデ。	小砂粒 粗砂粒若干 良好 淡橙色	ペルト
					器高	6.1			
					底部径	4.0			
	75	SH24	弥生	鉢	口径	14.7	完形。底部やや丸みのある平底。 口縁部ヨコナデ。内面ハケ。底部内面指オサエ。 外面ハケ。胴下部から底部ナデ。外面黒斑あり。	小砂粒 良好 にふい橙色	
					器高	9.3			
					底部径	5.6			
	76	SH24	弥生	鉢	口径	14.8	ほぼ完形。底部やや丸みのある平底。口縁部ヨコナデ。内面 ナデ。外面胴中部から胴下部工具ナデ。胴下部から底部に かけハケ。外面胴部から底部にかけ黒斑あり。	小砂粒 良好 にふい橙色	
					器高	9.4			
					底部径	6.2			
	77	SH24	弥生	器台	裾部径	(15.6)	裾部1/4残存。体部下部にくびれ部。 体部内面指オサエ。裾部ヨコナデ。外面指調整。	細砂粒 良好 橙色	
					器高	<10.0>			
図39	78	SX03	弥生	甕	口径	(29.6)	口縁部一部残存。 逆し字状口縁。 口縁部ヨコナデ。内面ナデ。外面ハケ。	細砂粒若干 良好 橙色	
					器高	<5.6>			
	79	SX03	弥生	器台	受部径	(10.0)	口縁から胴部下にかけ1/3残存。 受部端部ヨコナデ。内面体部指ナデ。他ハケ。	細砂粒若干 良好 内面灰褐色 外面にふい橙色	
					器高	<13.9>			
	80	SX03	土師器	高杯	杯部径	(3.4)	杯と脚裾部欠損。 全面磨耗のため不明。内面一部絞り痕あり。	微砂粒 良好 橙色	
					器高	<9.0>			
図41	81	SX21	土師器	杯	口径	(18.8)	1/3残存。 底部内面ハケ。他ヨコナデ。 外面に黒斑あり。	小砂粒多い 良好 にふい黄橙色	
					器高	4.2			
					底部径	(13.8)			
	82	SX21	土師器	皿	口径	15.4	口縁から底部にかけ3/4残存。 口縁部ヨコナデ。他ナデ。	小砂粒 雲母含む 良好 浅黄橙色	上層
					器高	2.3			
					底部径	13.6			
	83	SX21	土師器	杯	口径	18.6	ほぼ完形。 底部内面ハケ。内面から外面にかけヨコナデ。 底部外面ナデ。外面に黒斑あり。	細砂粒 良好 内面橙色 外面にふい橙色	
					器高	4.0			
					底部径	12.4			
	84	SX21	土師器	杯	口径	(10.0)	口縁周辺一部、底部残存。 内面ナデ。外面磨耗のため不明。	小砂粒 粗砂粒若干 良好 橙色	上層
					器高	4.2			
					底部径	5.8			
	85	SX21	弥生	器台	脚裾径	10.5	口縁部欠損。 内面指ナデ。裾部内面ハケ。外面ハケ。裾端部 ヨコナデ。	細砂粒 良好 淡橙色	
					器高	10.7			
	86	SX21	須恵器	壺	口径	(30.8)	口縁周辺一部残存。 口縁部から内面にかけヨコナデ。外面ナデ。	2 mm 以下の砂粒 良好 内面暗灰色 外面灰色	
					器高	<4.8>			
	87	SX21	須恵器	蓋	口径	12.0	口縁部1/2欠損。 全面ヨコナデ。天井部ヘラ記号あり。	小砂粒若干 良好 暗灰色	
					器高	3.5			
図42	88	SX21			器高	<26.0>	底部1/2、胴部1/4残存。	微砂粒 良好 にふい赤褐色	
					底部径	(18.4)			

表3 瓦一覧表

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構	種別	計測値 (cm)				色	調	備考
				全長	幅	高	厚			
図11	22	SD12	丸瓦	<9.4>	<5.6>	2.8	1.7	灰色		下層
図16	35	SD17	平瓦	<11.0>	<7.9>	—	2.5	灰黄色		
	36	SD17	平瓦	<6.1>	<7.1>	—	1.9	灰色		
	37	SD17	平瓦	<8.5>	<7.1>	—	1.9	黒褐色・灰色		
図17	45	SD19	平瓦	<9.8>	<6.8>	—	1.2	にぶい橙色		
	46	SD19	平瓦	<13.5>	<9.4>	—	2.3	外面褐灰色 内面にぶい黄橙色		
	47	SD19	平瓦	<8.2>	<11.8>	<1.3>	1.9	外面灰色 内面浅黄橙色		
	48	SD19	平瓦	<8.6>	<8.1>	—	2.3	黄灰色		
図21	53	SK08	平瓦	<12.9>	<5.5>	—	1.9	灰色		

表4 陶磁器一覧表

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構	産地	種類	器種	法量		形態・技法の特徴	時期	備考
						口径	器高			
図7	5	SD02	肥前	青磁染付	皿	口径	(17.4)	1/4残存。	18c 後半	
						器高	6.4	全面施釉。底面一部無釉。		
						底径	9.6			
	6	SD02	肥前	染付	碗	器高	<3.3>	高台より底部残存。	1690~ 1730年	コンニャク判
						高台径	4.8	全面施釉。		
	7	SD02	肥前	染付	皿	口径	13.6	1/2残存。	18c 前半	キズカクシ
						器高	3.8	全面施釉。		
						高台径	7.2			
	8	SD02	肥前	染付	碗	口径	10.7	口縁部3/4欠損。	18c 前半	
						器高	4.8	全面施釉。		
						高台径	4.4			
	9	SD02	波佐見系	染付	皿	口径	12.2	1/2残存。	18c 後半	
						器高	4.1	全面施釉。内面一部無釉。		
						高台径	4.4			
	10	SD02	肥前	青磁	瓶	器高	<9.3>	裾部から脚体部にかけて2/3残存。	17c 末~ 18c 前半	
						裾部径	9.0	全面施釉。		
	11	SD02	肥前	陶器		口径	(9.4)	口縁から胴部にかけて1/4。	18c 前半	
						器高	5.3	内外面とも施釉。高台ケズリ。		
						高台径	3.2	底部残存。		
	12	SD02	肥前	陶器	刷毛目鉢	器高	<5.7>	底部3/4残存。	18c	
						高台径	10.0	内外面とも施釉。高台ケズリ。		
	13	SD02			油壺	口径	(2.4)	口縁1/4、体部1/2、底部残存。	18c 前半 ~中	色 絵
						器高	8.3	口縁内面白釉。内面回転ヨコナデ。		
						高台径	5.8	外面色絵施付。		
	14	SD02			仏飯器	口径	7.0	口縁部一部欠損。	18c 後半	
						器高	5.3	全面施釉。		
						底径	4.2			
	15	SD02	中国	白磁		口径	(17.4)	口縁部一部残存。	12c~13c	
						器高	<3.7>	全面白釉。		
図14	28	SD13②	景德鎮		皿	高台径	(5.0)	高台から底部にかけて1/4残存。	16c 後半	
								全面施釉。		
	29	SD13②	中国	青磁	皿	器高	<1.3>	高台部1/3残存。	15c 頃	
						高台径	(5.8)	全面施釉。底面無釉。		
図17	44	SD19②		窯道具		上部径	4.0	外面ケズリ。		
						脚裾径	5.0			

写 真 图 版

写真図版 1

1. 鳥栖駅方向
(南東方向)



2. 南方向





1. 全景①



2. 全景②



1. 全景③ (南張出し部)



2. 全景④西から



1. 調査区東端部



2. SH23 (右)・24 (左)



1. SX01北西から



2. SK04北から



3. SK08西から



4. SK11東から



5. SD10東から



6. 作業風景



7. SD12西から



8. SD12土層西から



1. SD13西から



2. SD13②③西から



3. SD13②南から



4. SD13②③南から



5. SD14東から



6. SD14出土状況



7. SD15北から



1. SD17 (左)・SD16 (右) 南から



2. SD17・SH18北から



3. SH18東から



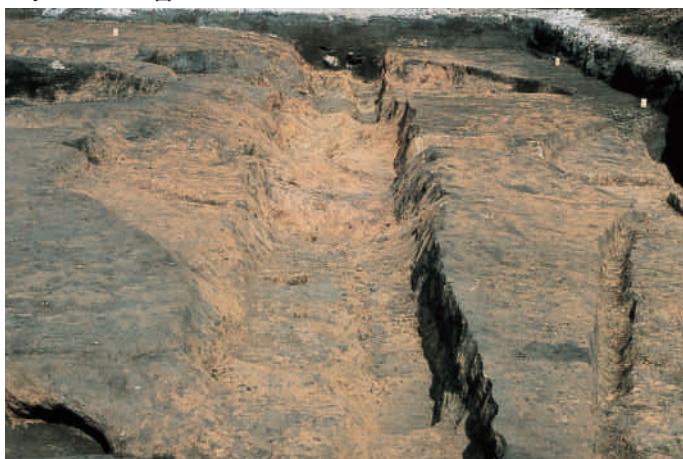
4. SD20東から (SD19交差部分)



5. SD22土層



6. SD20土層東から



7. SD19南から



8. SD19北から



1. SD25南から



2. SX21西から



3. SH23南から



4. SX21ベルト除去後南から



5. SH24南から



6. SH24ベルト除去後南から



7. SK29出土状況①



8. SK29出土状況②



1. 粉青沙器四耳壺①



2. 粉青沙器四耳壺②



3. 粉青沙器四耳壺③



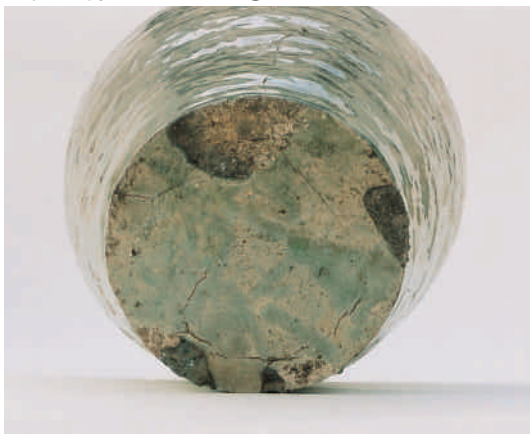
4. 粉青沙器四耳壺④



5. 粉青沙器四耳壺⑤



6. 粉青沙器四耳壺⑥



7. 粉青沙器四耳壺⑦ (底部)



8. 粉青沙器四耳壺⑧ (内面)



1. SD02出土染付類①



2. SD02出土染付類②



3. SD02出土陶器類①



4. SD02出土陶器類②



5. SD02出土肥前染付皿①



7. SD02出土肥前染付碗①



9. SD02出土肥前染付碗



6. SD02出土肥前染付皿②



8. SD02出土肥前染付碗②



10. SD02出土仏飯器



11. SD02出土波佐見系染付皿



12. SD02出土肥前陶器刷毛目鉢



1. SD02出土肥前青磁染付皿



2. SD02出土肥前青磁瓶



3. SD02出土油壺



4. SD02出土遺物



5. SX03出土遺物



6. SD07出土遺物



7. SD09出土遺物



8. SD10出土遺物



9. SD13出土遺物①



10. SD13出土遺物②



11. SD13出土鋤先①



12. SD13出土鋤先②



1. SD17出土遺物①



2. SD17出土遺物②



3. SD19出土遺物①



4. SD19出土遺物②



5. SD19
出土遺物③



6. SD20出土遺物



7. SX21出土遺物①



8. SX21出土遺物②



9. SX21出土遺物③



10. SX21出土遺物④



11. SX21出土遺物⑤



1. SX21出土遺物⑥



2. SX21出土遺物⑦



3. SH23出土遺物①



4. SH23出土遺物②



5. SH23出土遺物③



6. SH24出土遺物①



7. SH24出土遺物②



8. SH24出土遺物③



9. SH24出土遺物④



10. SH24出土遺物⑤



11. SH24出土遺物⑥



12. SH24出土遺物⑦



13. SH24出土遺物⑧



14. SP26出土遺物①



15. SP26出土遺物②



16. SP26出土遺物③



17. SP26出土遺物④



1. SP26出土遺物⑤



2. SP26出土遺物⑥



3. SP26出土遺物⑦



4. SP26出土遺物⑧



5. SP26出土遺物⑨

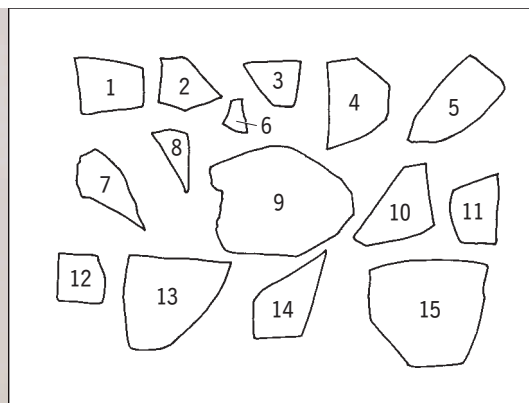


6. SP26出土遺物⑩



7. 瓦類

出土遺構	図番号	登録番号
1.	SD17 図16-36	030446
2.	SD19 図17-48	030450
3.	SD12 図11-22	030448
4.	SD17 図16-35	030445
5.	SK08 図21-23	030451
6.	SD19 図17-46	030447
7.	SD19 図17-47	030449



8. 中国製磁器類

表5
中国製磁器
一覽表

産地	種類	器種	時期	登録番号
1. 中国	白磁	碗	12c~13c	030348
2. 中国景德镇	白磁	皿	16c	030356
3. 中国龍泉窯	青磁	碗	15c 後半~16c 前半	030349
4. 中国	白磁		16c 後半~17c 前半	030205
5. 中国景德镇	染付		16c 後半~17c 前半	030302
6. 中国	青磁	皿	15c~16c 前半	030471
7. 中国			16c 末~17c 初	030268
8. 中国景德镇	染付	皿	16c	030352
9. 中国	青磁	皿	15c	030351
10. 中国景德镇	染付	皿	16c 末~17c 初	030354
11. 中国	染付	碗	16c 後半	030206
12. 中国景德镇		皿	16c	030267
13. 中国景德镇		皿	16c 後半	030350
14. 樟州窯		皿	16c 後半	030353
15. 中国	白磁		12c~13c	030204

鳥栖市文化財調査報告書第71集

西 浦 遺 跡

平成16年 3 月26日 印刷
平成16年 3 月30日 発行

編 集 鳥栖市教育委員会

発 行 鳥栖市宿町1118番地

印 刷 大同印刷株式会社

佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20